
またあした・・・

小粒納豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

またあした・・・

【Nコード】

N0059A

【作者名】

小粒納豆

【あらすじ】

全てが解決するはずだった。組織は六年前のあの日、崩壊した。薬のデータも手に入れた。全てが元通り戻る筈だった。だが・・・、予期せぬことが起こった。哀がいなくなってしまったのだ。そして、六年の歳月が流れていた。

プロローグ1 追憶

——おまえはもう、・・・『自由』なんだぜ？

あなたが言ったあの言葉、目を閉じると今も聞こえる。
もう、6年も前の話なのにね。

でもね、工藤君。

今も変わらないわよ、この気持ち。

私には、自由なんてない。

私のための自由だなんて、どこにもないの。

そう、どこにも。

< B > プロローグ1 追憶 < / B >

雪が降っていた。

灰色の空から降る雪は、コンクリートの道路の上に落ちては消え、
落ちては消えの繰り返しで、しかし、一向にやむことはなかった。
家を出る前に聞いたテレビの天気予報では、季節はずれの薄い
布地のピンクのワンピースを着たアナウンサーが、これから
夜はさらに冷え込むでしょうと、にこやかな顔で言っていた。
きっと明日の朝には牡丹雪に変わり、町一面真っ白に染まって
いることだろう。

その中で緋色の髪を持つその少女は傘も差さずに、ただ固く
冷たく濡れたコンクリートの道路を一步一步踏みしめるようにして
歩いていた。

少女は黒のコートを羽織り、頭を同色のフードですっぽり覆い、何とかその寒さをしのいでいるようだった。

時折その柔らかな頬を掠める北風に、少女は思わず立ち止まり、縮こまるようにして体をすくめた。

それから冷たい素のままの両手を口元にくっつけ、ハアア、と体の奥のそのまた奥から暖かい息を吹きかける。白い息が辺りに立ち込めた。

一瞬だけではあるけれども手元に温かさを感じ、少女は安心したように口元に笑みを浮かべると、再びその道をゆっくり歩き始めた。

キラキラと白く光る雪景色を見て、楽しむこともせず、ただ表情を変えずにただ、もくもくと。

そして時折足を止めて、周りの風景をしっかりとその瞳に焼け付けるように捕らえていく。

まるでカメラのシャッターを切るように、一つ一つ、ゆっくりと。学校、校庭、銀杏並木、商店街、交番、郵便局、公園……。

そして……少女はふと立ち止まり、ゆるゆるとそれを見上げた。大きな屋敷がそこにあった。

だれもいるはずのない暗く、薄気味悪いと評判が悪い屋敷。今では時折夜、人の気配がすることがあるということ、幽霊屋敷と言われているほどである。

彼女は以前2度、そこに訪れたことがあった。

2度とも少女がまだ一人の黒に染まった科学者で、彼をまだ被験者としか見ていなかったとき。

そこで初めて、彼女は彼が生きているのではないか、という僅かな疑惑が生まれた。

……そして、彼が生まれた場所。

そう、17年間、彼は確かにここで――

「ごめんね、工藤君……」

少女は小さく呟いた。

その声は、ひどく掠れていた。

そして彼女は小さくため息をつく、再び道を歩き始めた。

自分はどこに行きたかったのだろう。

何をしたかったのだろう。

今、何をすべきなのだろう。

・・・全てがわからない。

頭がしんと降り雪のように真っ白になっていて・・・。

しかし、まだ家には戻りたくなかった。

戻ってしまったら、全てが終わってしまう気がする。

すぐに『明日』になってしまふ気がする。

それが怖かった。

だから――

少女はとぼとぼ道なりに歩いていた。

もうどこへ向かうこともなかった。

学校、校庭、銀杏並木、商店街、交番、郵便局、公園・・・。

もしかしたら同じ道をたどっていただけかもしれない。

しかし、それでもよかった。

・・・まだ、歩きつづけていたかった。

歩いて、歩いて、この道を、この町を、ここにいる人々全てを心の

中にとどめておきたかった。

ここにいる大切な人々を・・・。

この瞳で、この心で――

「灰原？」

不意に彼女のすぐ傍でその少年の声が聞こえて来た。

彼の声に一瞬泣き出しそんな表情をして、慌てて全身を奮いたたせる。

そしていつもの大人びた顔を作り、そこでようやく振り返った。

「・・・工藤君」

「やっぱり灰原だ。どうした？ ぼーっとそんなところで突っ立って」
案の定、そこには彼女が思い描いていたとおりの彼がそこにいた。
いつものように、悪くもないのにメガネをかけて少年のふりを
しつづけている男。

包帯で右腕をつり、頬には大きなばんそうこう。
見るからに痛々しいその姿。

全て、自分の所為で――。

少女の表情はそこでまるでビデオの停止ボタンを押して
いるかのごとく固まった。

「・・・どうした？」

彼はもう一度同じ質問を、今度は少女の瞳に問い掛けた。
その真っ直ぐな少しも濁りのないその真っ黒な瞳で。

少女はその瞳から逃げるようにして視線を逸らし、ゆるゆると
口を開いた。

「いつ、退院できたの？」

「・・・ついさっき。灰原、見舞いにも来てくれねーんだもん」
彼は少しの間の後、そう答えてから、恨めしそうな視線で両手を
頭に組み、灰色の空を仰いだ。

それから、まあ仕方ねえけど、と付け足した。

少女はそんな彼の横顔をただじっと見つめていた。

そしてただ小さな声で小さくごめんなさい、と呟いた。

それは無意識に言ったものだった。

しかし、彼はその言葉を聞き逃さなかったのか、ちよつと
驚いた顔をして見せてから、表情をふつと緩ませて小さく
バー口、と呟いた。

「忘れちゃったのか？ 俺は好きでやったんだ。」

オメーは俺を何とかして止めようとしただろ？

それなのにそんなオメーを振り切った。組織を見つけて、みすみす泳がすなんて真似は俺はどうしてもできなかったからな」彼の表情はいつにも増して優しい表情をしていた。

彼は自分を氣遣ってくれている、ということは、少女にはわかっていた。

だから余計に心が痛かった。

「大丈夫だって。こんなのすぐよくなっから・・・」

彼の言葉が少女の耳を通り越していく。

少女は力なく首を横に振った。

そして彼に聞こえないように、ほんの微かな声で、違うの、と呟いた。

本当はそれだけじゃなかった。

自分が本当に彼に対して心の底から謝りたいのはもう一つ・・・

永遠に許されないこと。

・・・本当はそのことを彼に話さなくてはならないはずだった。それが例え目の前の彼を苦しめる結果になろうとしても。

しかし、それは今の自分にはできなかった。

そしてその後の過程を見届ける自信も今の自分にはなかった。きっとこれからもないだろう。だから・・・

だから――

「・・・ごめんなさい」

少女は再び呟いた。

声が震えて、それは一つの言葉としてはかなり聞き取りにくいものだった。

少女は唇を噛み締めて、小さい拳をぎゅっと握った。
長く伸びたつめの先が手のひらに食い込んで、突き
刺すような痛みを感じて少女は思わず苦痛で顔を歪める。
そんな少女の様子に、彼は心配そうに

「灰原・・・？」

と少女の顔を覗き込む。

それからふっと苦笑して、しゃーねーな、と呟いた。
その後でそっと手を伸ばし、優しくその緋色の柔らかな髪を
撫で上げる。

びくり、と体を硬くして、少女は思わずうつむいた。
それからそっと一瞬だけ、彼の顔を覗き見た。

・・・穏やかな表情。

優しい表情。

でも、心が・・・、

心がとても痛かった。

ぐさりとナイフで刺され、傷口をえぐられるような感覚。

少女はまた、彼から逃げるように視線を外した。
そのとき。

突然、少女は、固いのか柔らかいのかよくわからない
何かに頭をすっぽり包まれるような感覚を覚えた。

・・・そしてそれが何であつたかすぐに彼女は知ることになる。

それは・・・

少女の頭を包んでいたものは、彼の腕。

細くて華奢だが、優しく温かい力強い彼の腕。
そしてぐっと彼の胸に引き寄せられて・・・。
ぼすっ。

少女の顔は彼の小さな胸板に押し付けられた。
・・・つまり、抱きしめられたのだ。

「ちよっ・・・工藤君」

動揺する少女の顔。手をじたばたさせ、彼から逃れようとしたが簡単にはそうさせてくれなかった。だんだん体が熱くなってくる。

「や、やめてっ。離して!」

顔が火照っている、

少女は、おそらく自分の顔が熟れたりんごのように真っ赤になっているだろうことは、その顔の熱さで容易にわかることができた。

「そうそう。その顔だよ、その顔」

彼はいたずらボウズのような顔でくすくす笑うと、ようやく少女を自分のもとから『解放』したのだった。

「もう組織はなくなっただ、ジンもウオッカも、

『あの方』なんていう、ふざけた名で呼ばれてた大ボスも。

おまえを苦しめるものはもうこの世には何もねえんだ。

おまえはもう、・・・『自由』なんだぜ?」

彼は笑っていた。

いつもの、優しい微笑みで。

計算しているように見えて、全部素のままの、その優しさで。

そんな彼の表情に、少女は放心したようにただぼんやりと、

彼の顔を見つめていた。

それは、抱きしめられたからでなく。

それが証拠に火照った自分の体が再びひんやりとしていくのを少女は肌でしっかりと感じていた・・・。

「・・・ほら、帰るぞ」

彼はそつと怪我をしていない方の手を差し伸べると、少女の小さい手を握った。

そのぬくもりに、はっとして少女は我に返る。

「こんなところにずっといると、風邪引いちまうぜ?」

オメーが病氣したら困る奴が多いんだからな。わかってるんだろーな」

いたずらっぽく彼は笑う。

「・・・わかってるわよ」

少女はポツリ、と答える。

喉が震えている。

彼は気づいているだろうか。

「そっか？ならいいんだけどよ」

どうやら納得したようだった。

しかしそれでもまだ、彼は心配そうな顔をしてしばらく彼女の顔を見ていた。

「じゃあ行くぞ」

彼はいつもと変わらないその何に対しても自信ありげなその表情で、少女の手をくいつと引つ張った。

少女はこくりと小さく頷くと彼に手を引かれ、ゆっくり歩き出す。

「・・・何だか、オメー今日やけに素直だな」

「そう・・・？」

戸惑った顔で自分の顔を見る彼の視線を感じながら、少女はわざと顔をそむけた。

洞察力が鋭い彼に、自分の心の動揺を気づかれぬために。

霽雪が降る中、その少年と少女は傘も差さず、冷たいコンクリートの道路を歩いていた。

少女はずっと彼の手を自分から解くことはなかった。きつと、この手にもう触れることがないかと思うと、とても哀しかった。

鼻の奥がつんとしてくる。

目頭が熱くなってくる。

胸の奥から熱いものが込み上げてくる。

——でも、泣くわけには行かなかった。

「じゃあ、また明日な」

その少女が住んでいる家の前まで彼は彼女を連れてくると、彼は眩しいほどの笑顔でその言葉を口にした。

「・・・そうね、『明日』」

いつもと変わらぬやり取り。

でも明日からはもう2度と交わすことのないやり取り。

明日、彼はこのやりとりが、この些細なものだったはずのこの約束が少女の決意によって破られたことを知るだろう。そう思うと、少女の心はきりりと痛んだ。

「風呂入って体温めて早く寝ろよ」

一度少女から背中を向けて歩き出した彼はふと足を止めると、振り返ってこう言った。

「・・・あなたもね」

少女は口元に笑みを浮かべて返す。

「おう。じゃあ・・・おやすみ」

「おやすみなさい」

少女は平静を装って別れの挨拶を言った。

彼が再び背中を向けて去っていく。

いつもと同じ足取りで、ゆっくりと歩いていく。

少女は、その後ろ姿をじっと見つめていた。

彼が角を曲がっても、そこに誰もいなくなっても、ずっとその幻影を見つめていた・・・。

目を閉じれば、まだ彼の姿が見える気がして・・・。

しんしんと高い空から降る雪は相変わらず落ちては消え、落ちては消えしていた。

しかし今では霏雪は牡丹雪に変わっている。

きつと明日の朝には積もっていることだろう。

少女は彼の姿も幻影も何もかも見えなくなると、はあ、と白い息だけ外に出して、あきらめたように玄関の方へ向いた。

そして合鍵をポケットから取り出そうとしたとき、かちゃっ、と合鍵が内側から回り、きいい、と音を立ててそのドアが開いた。

「おかえり、哀くん」

優しい表情で少女を迎えてくれたのは、初老の男性。

少女はにっこり笑ってこう言った。

「ただいま。博士」

少女がこの町から、そして彼の前から姿を消したのは、その翌日のことだった。

プロローグ1 追憶（後書き）

作者より…こつぶです。プロローグ1です。

これからいろいろ起こると思いますが、見捨てないでやってください。

ちなみにこれ、テーマは・・・ぐふ。

本編までのお楽しみです。てか、掲示板見る方にはもうばれてるんでしょうねえ・・・。

てか一言。

「気づけよ、彼！（泣）」

原作43巻ではめちゃくちゃその表情の変化に気づいてあげてたのにつ。

（あー。もう『彼』は誰だか、少女が誰だか、バレバレなんでしょうけどね、一応

この中では名前は出してないので。）

でもこうしなきゃ、本編に行かずに終了してしまうので（笑）。

では、ここまで読んでいただいてありがとうございます。ございました。

プロローグ2 失われた記憶

2月も終わりに差し迫っていたある夕暮れ時。

吉田歩美は廊下を全速力で走っていた。

明日の朝までに提出しなくてはいけない進路調査の

プリントを机の中に入れたままだったのを思い出したのである。

校内に鳴り響くのは下校5分前を知らせる音楽。

「やばいなあ・・・」

歩美はそう思わずそう口に出しながら、廊下を走っていた。

ようやく2年B組の教室まで辿り着くと、歩美は急いで

自分の机の中からクリアケースを取り出した。

中にきちんと、その3枚構成のプリントが入っているのを

確かめて歩美は大切そうにかばんに入れた。

そしてまた急いで教室を飛び出す。

廊下を走り、階段を下り・・・

あまり慌てすぎて転ばないように、ずっと地面ばかり見て走っていた

歩美がふと下り階段に差し掛かったとき、思わず立ち止まった。

車が急ブレーキを踏んだときと同じように。

普段、クリーム色の階段がまるでその色のじゅうたんを

余すところなく敷き詰めたかのように、淡い緋色に染まっていたのだ。

夕陽のマジック。

さっきまであまりに急いでいたので階段のことに気をとられたことはなかったのかもしれない。

透明の大きな窓から、全身で滑り込むようにして差し込む緋色の光。

——あなたらしくていいんじゃない？わりと好きよ、こっぴうの・

・

ふいにあることばが頭の中に浮かんできた。

懐かしい、優しい、耳に心地よい女の子の声。

しかしそれと相反したような、どこか大人びたような口調・・・

いつか、このことばを聞いたような気がする。

大好きだった、この声で。

そしてこのことばを口にしたその表情は優しい笑顔だった気がする。

そしてその人のことを、自分はとっても好きだった気がする。

でも、それが誰が口にして、いつ、そして何故そのような状況に

なったのか、彼女にはどうしても思い出すことはできなかった。

まるで自分の知らないだれかが、その記憶だけを何かオブラートの
ようなものでそつと包み隠してしまったかのように。

「下校時刻3分前です。校内にいる人は早く準備を終えて下校して
ください」

学校内に放送されるアナウンス。

歩美は我に返ると、あわてて階段を下っていった。

プロローグ2 失われた記憶（後書き）

作者より：短つ。今、こつぶはあまりの短さに自分でも

びっくりしてしまいました。

・・・でもこれ、よく考えたら、プロローグですもん。
前回は長すぎたんだっ！

ということで、こんな私を許してやってください（懇願）
では。次回からは本題です。
よろしく願います。

1 謎の女

帝丹中学校2年B組。

現在は5時限目。社会科の授業だ。

今の時期はカタカナ人名が多い世界史分野を習っているうえに給食を終えたばかりなので、クラスの大半は寝ていた。

しかもその教科の担任が難しい話をするくせに、ほとんど板書をしないので、

よけいに性質は悪い。

クラスの成績は落ち込む兆しが見えていた。

しかしそんな中でも必ず必死にノートをとるものがある。

この時期の定期テストや授業態度がが内申に響き、今冬の推薦に影響を及ぼすことをしっかり胸に据えているからだ。

いびきや、携帯電話のメールを打つ音の中、カリカリとノートをとる音が微かに聞こえていた。

1に勉強、2に勉強、3、4も勉強、5に勉強。

彼らの頭の中には今の時期、『勉強』それしかないのかもしれない。

その中の一人が円谷光彦だ。

廊下よりの左から3番目。前から4番目の席。

ここから黒板はよく見える。

まあ、この授業は黒板が見えなくてもさほど支障はないが……。

「円谷君、またあとでノート、コピーさせてね」

右隣でプリクラ帳を眺めていた栗毛の髪の子に、かわいい顔でこっそりそう言われて、彼は

「あ、はい……」

と頷いた。それからまたか、と苦笑する。

毎回この授業は、彼女のためにノートにとっているようなものだ。

自分ではまとめられないから、と彼女は光彦と席が隣になったその週から彼に頼っていた。しかし光彦は何も文句を言ったことがなかった。

小さいころからかわいい女の子には弱いのである。

そう、見るからに優等生タイプの彼の気質は、小さいころから少しも変わっていないかった。

だれよりも協調性を重んじて、人に優しく、理知的で……。

小学校のころは、児童会役員を2期勤め、6年には児童会会長を勤めたほどである。

そして今はクラスの学級委員として、クラスの風紀を乱すわけにはいかない、と彼なりにがんばっていたのだ。

そんな中、光彦は突如体に倦怠感を覚え、手にしていたシャーペンを机の上に置いた。勉強のし過ぎだったのかもしれない。

そう思い、彼は気休めに人間観察を始めることにした。

まず手始めに、さきほど声を掛けられたあの女の子に目をやった。

彼女の栗毛は遺伝らしく、それは細い絹糸のように艶やかだった。

先ほどまでプリクラを見るのに夢中だった彼女は、いつのまにか携帯電話を机の下に隠し、だれかとメールを楽しんでいる。

彼ははあ、と深いため息をつき、その視線をまた別に向けた。

次に目をやったのは彼の席のひとつ前の女の子。

彼女は光彦と同じ学級委員。

髪を短く刈ったちよつと体格のいいボーイッシュな女の子。

元気のよい子で、頭の回転が速い、クラスの人気者だ。

ソフトボール部ではキャプテンを務めてる彼女は既にお疲れのようで、教科書の上に突っ伏して男らしく(?)眠っている。

そんな彼女に、光彦は思わず苦笑すると、今度は後ろを振り返った。

1つ左隣の列の、一番後ろの席。

ひとときわクラスの中で目立つ体をもつ丸坊主の少年。

体重は90キロはあろうかという体格を持つ彼のことを

光彦は幼稚園のころから知っていた。

彼はさつき給食全てのメニューを2巡ほどおかわりしたはずなのに、それでも物足りなさそうな顔でおなかをさすっている。

普段は3巡するところを、ある少女にダイエットしなさい、と言われたことで我慢していたのだろう。

それから光彦はまた視線を他に動かした。

廊下から1番目の列、後ろから2番目の席。

空っぽの机。

・・・今日もない。

そのうち埃がたまつていくのじゃないか、と真剣に考えてしまうほど、その机の主が現れたのは随分と前のことだった。

光彦は大きいため息をつく。

仕事に熱を入れるのはいいけれど、たまには学校にも来てほしい。最近の彼は、自分たちと程遠い場所に行ってしまった気がして。

昔一緒によく遊んだ、あの笑顔が今では懐かしかった。

彼の隣にはいつもあの子がいたけれど・・・。

光彦は再び深くため息をつく、最後に窓際の少女に目をやった。窓際の一番後ろの席の女の子。

白いカチューシャで肩までの髪を綺麗にまとめている、くりくりとした丸くて、大きな黒い瞳が特徴的な彼女だ。

この子も幼稚園からずっと一緒だった、幼馴染。

そして——たいせつな、ひと。

彼が勉強以外に唯一気にしていることがあるとすれば、それは彼女の存在だったのかもしれない。

ずっと、ずっと好きだった女の子。

幼稚園のころから、ずっと・・・。

光彦は彼女を見たとき、すぐに、あれ、と思った。

肩までの髪を触りながら、彼女はただぼんやりと窓の外を見つめていた。

いつもは授業を授業を熱心に聞いている彼女がである。

（歩美・・・ちゃん？）

彼はノートの端をびりりと破いて、なにやら書きこみ、それを丸めて彼女の机に向かって投げつけた。

・・・ナイスシュート。

それは無事、歩美のノートの上に着地する。

しかし彼女は気づいてくれなかった。

視線は依然窓の方をぼんやり眺めたまま、こちらに振り返ることもない。

光彦はがっかりして再び頭を教諭の方へ戻したとき・・・。

がたたっ

椅子を動かすその音にはっとして光彦はまた振り返った。

さっきのカチューシャの彼女——幼馴染の吉田歩美だった。

彼だけでなく、クラス全員の視線が歩美に集中する。

「・・・吉田、どうした？」

その教諭は、ずり下がったメガネを上げながら驚いた表情で尋ねた。

しかし彼女は彼の声が聞こえなかった様子で、しばらく校庭を凝視したまま凍りついたように動かなかった。何かに驚いた表情で、彼女は一点を見つめつけていた。

「いたい、その場所には何があるというのか・・・」

「・・・ちゃん？」

光彦は歩美がぼそりと呟いたそのことばに一瞬耳を疑った。

席がそんなに近いわけでもないのに、いつもはこんな小さな声、聞こえるはずなのに、なぜかその言葉だけは耳は拾い上げた。

「吉田・・・？」

メガネ教諭は恐る恐るもう一度彼女の名前を呼んだ。

彼女ははっと我に返ると、バッグも持たずに突然教室を飛び出した。ざわざわとするクラス内。

「よ、よしだああ！」

そのメガネの教諭はあわてて彼女の姿を追いかけて廊下に出るが、既に

彼女は遠くかなたへ消えていた。しかし彼はめげずに追いかける。56歳で運動不足で足に持病を抱える彼と、陸上部エースの歩美と比べたら、

歩美が勝つのは必然だろう。

クラスメートもその教諭に続き、席を立って入口と出口に群がる。

それはまるで深夜、白熱灯に群がる夜光虫のようだった。

光彦は何人かの仲間とともに窓側へ生き、彼女の姿を探した。

ここからだ歩美がどこの方向へいくのかわかるからだ。

そのつもりで窓から校庭を見たのに……。

学校の校門の向こうに、黄色いタクシーが止まっていた。

そしてその傍で立っているのは――

まさか……。

ウェーブがかった緋色の髪の少女が、寂しそうな彼女の顔が、

自分に微笑みかけるその優しい表情が彼の脳裏に鮮明に浮かんた。

そして、タクシーに乗り込もうとするその女性の髪も、思い出の中の彼女とまったく一緒だった。

まさか……。

車のドアがぱたり、と閉まる。

「はい……ばらさん??？」

光彦はポツリ、とつぶやいた。その瞬間、ずしり……

と急に漬物石を何個かまとめて体の上に載せられたように重くなった。

さっき、入り口と出口にいたクラスメートたちである。

光彦の上に2人、まるで体重をかけて乗ってきたのだ。

「お、重いですよ・・・つぶれてしまいます・・・」

彼が小さく悲鳴をあげる。そして次の瞬間、さらに体は重くなる。ちょうどインド象かティラノザウルスに踏まれたときのように・・・。

もちろん乗っているのはさっきの巨漢の少年——小島元太だ。

ぎゃあぎゃあ、と光彦の上に乗っていた2人の少年は早急に避難し、光彦だけが逃れられず、彼の被害にあってしまったのだ。

それから何とか彼から逃れると、はあはあと息を上がらせた。

「・・・歩美は？」

野太い声が光彦の耳に響く。

「まだいません。それより、見てくださいよ。あのタクシーの・・・

」

途中まで言いかけて、彼ははっとした。

タクシーがゆっくり動き出していた。

「待って！」

その声に、光彦、元太、そして多くのクラスメートは窓から身を乗り出した。

歩美が昇降口を飛び出し、校庭に出ると、校門に向かって全速力で走っていた。

あの黄色いタクシーを追って。

光彦は確信した。

彼女も——吉田歩美も見ただ。

あの、タクシーを。

緋色の髪を持ったあの少女を・・・

「何、本当かね。光彦君」

その男は大変驚いた顔で彼を見つめた。

現在17時14分。

ここはその男の自宅で、光彦はほんの30分ほど前にここに訪れたばかりだった。

その男の頭は薄く禿げ上がっていて、恰幅もよく、セーターの上に白衣をまとい、見るからに博士という雰囲気がかもし出していた。

昔と変わらない人のよさそうなその表情。

何年かぶり彼の家に訪れ、彼の顔を見たとき、思わずほっとしたものだった。

「本当に君は彼女を見かけたのかね」

彼はさつきよりまた一段と声を荒げて光彦に聞いた。

「ええ、今日学校で・・・」

光彦はコクリと大きく頷く。

「本当に、本当なんだね」

何度も確かめるように彼は光彦の顔を見る。

そして彼の目頭には熱いものがあふれていた。

彼の名は阿笠博士。

今では著名な天才発明家で、昔はよく彼らのために発明品を作ってくれたりしていた。

彼らが少年探偵団として活躍していた時代に。

だからかれこれ7年彼を知っていることになる。

しかしその探偵団が解散してから、光彦は彼の家に行くことを躊躇していた。他の『2人』はどうだか知らないが・・・。

「・・・バー口。それがあいつだって確信はねえだろ」

突如2人のすぐ後ろで、その声は聞こえた。

アルトとテノールの中間のような少年の声。

まだ声変わりの途中なのだろう、それでもその口調の雰囲気はどこか大人の匂いを感じさせるような・・・。

2人は同時に振り返った。

そこにいたのは、やはり光彦が思っていた人物だった。
黒縁メガネをかけて、黒い厚地のコートを羽織った彼。
その名は……。

「おお、コナン。遅かったのう。3時過ぎには帰ってくると言っていたから

昨日蘭くんにいただいたケーキを残して待っていたのに。今、2人で食べて

しまったぞ」

はかせ
博士はそういうと、おなかをさすって見せた。

光彦はその言葉に驚いて、3分の2ほど食べてしまったシフォンケーキを

申し訳なさそうに見つめた。

そんな2人を見て、コナンと呼ばれたその少年は思わず苦笑する。

「聞いたよ。2時にはもうこっちに戻っていたんだけど、今まで毛利探偵

事務所に寄ってたんだ。そのときケーキを食ったから」

彼は形よくコートをハンガーにかけると、そのあとでかちこちに固まっている

光彦に声をかけた。

「よお、光彦。ひさしぶりだな」

「……え、ええ」

ソファに座っていた光彦は、ちょっと緊張して居住まいを正した。
確かに彼の姿を見るのは2週間ぶりだった。

しかもその日も、職員室に入る彼の姿を見たというだけのこと。

彼と直接話すのはいつたいどれくらい前のことになるだろう。

テレビや雑誌で工藤新一の再来だ、とか、天才的中学生探偵とか、
いろいろ騒がれている彼を見て、何だか雲の上の存在になったよう
な気がして……

それが光彦には寂しかった。

彼の名前は、江戸川コナン。

光彦の小学1年の時からの親友だ。

彼は入学してまもなく帝丹小学校に転校してきた少年で、お化け退治を

きっかけに仲良くなつた仲間である。

最初は自分よりずっと小さくて、がり勉ぼくつて、

一見虚弱そうな、それでいてスポーツ万能で、女の子に、

自分の気になっている女の子である吉田歩美に気に入られている彼を
いけすかない男だと思っていた。

だけど実際はそうじゃなかった。

勇敢で、優しく、頭がよくて、推理が得意で、困ったときは
助けてくれて・・・

そんな彼にあこがれていた。

少年探偵団になってからいろいろ冒険をした。

TWO-MIXのメンバーを誘拐事件に協力して、そのご褒美に
コンサート会場であこがれのみなみちゃんと歌を一緒に歌うことが
できたり、博士の初恋の女性の行方をたどるためにあちこち

探し回ったり、キャンプに行つて青の古城を見つけたり、鍾乳洞で

殺人をした犯人グループとばつたり遭遇したり、サッカーの

優勝パレードに行つて爆発事件に巻き込まれたり・・・。

何度か危ないこともあったけど、いつも彼が助けてくれた。

だから少年探偵団も一生続くと思っていた。

それなのに・・・。

——やめにしてーんだよ、もう。終わりにしてーんだ・・・

ある日彼は言った。

耳の奥に染み入るような悲痛な声で・・・。

しかし、誰も反対などするものはいなかった。

1 謎の女（後書き）

作者より：こんにちは。コ哀大好きのことぶこと小粒納豆です。

今回は『哀ちゃんをめちゃくちゃ幸せにしよう計画』

を実行すべく、中学生コ哀にチャレンジしました。

もう原作なんてすっかり頭の中から捨てちゃいます！

だから何が起ってもこつぶは知りませんよ！

・・・とか言って何にも起こらなかったらごめんなさい。

中学生コ哀なんて書くのは初めてなのですごく緊張して

ます。

プロローグ1から進めているうちに、いろいろ謎が

でてきましたが、最終回までに全て解決できるかどうか・

・。

いや、そのまえに最終回までめげずに書くことができる

かが

問題ですが・・・（こら）

ではでは、こんな私ですがこれからよろしくおねがいし

ます。

2 封印されたモノ

光彦が帰って、既に1時間が経過していた。
阿笠邸宅、地下室。

江戸川コナンはぼんやり机に向かっていた。
何を考えることもなく、ただぼんやりと。

そして机の引出しを静かに開けると、中から
あるものを取り出した。それは――

古ぼけた茶封筒。

封の開けてない封筒。

6年前に彼宛に届けられた手紙。

差出人は――灰原哀。

彼は徐にはさみを取り出すと、封筒の部分に刃をあてる。

さらにチヨキリと一回はさみを入れたところで、

彼ははたと我に返った。

それから思わずふつと自嘲的な笑みを浮かべて、その手を
止める。

「・・・一体俺は何がしたいんだか」

彼はポツリと呟いた。

いまさら、その封筒を開くこともない。

開く意味もない。

それなのに、自分は・・・。

彼はその茶封筒を再びもとの引き出しに戻すと、大きく
深いため息を吐いたのだった。

> B < 2 封印されたモノ > / B <

地下室を出て居間に行くと、博士が一人ソファに座り、朦朧と虚空を見つめているようだった。

空になったケーキの皿も、コーヒーも何もかもそのままに。そんな彼の様子にコナンはちよつと表情を曇らせた。

そして、ふうとため息をつくと、

「・・・おい、博士」

と彼の名前を呼んだ。

しかし彼は何も反応することはせず、ぼんやりと宙を見ているだけだった。

「おい！」

コナンはもう一度、彼に呼びかけをした。

そこで博士ははつと我に返ると、コナンの姿を見つけ、

「何じゃ、いたのか」

と驚いたように呟いた。

そんな彼の様子にコナンは再びため息をついたが、彼が言ったその問いには何も返さなかった。ただ、

「・・・食ったもんくらい自分で片付けろよ」

とだけ言つてテーブルの上にあつた新聞を広げた。

「ああ、すまんすまん」

彼はよつこらせ、とテーブルの縁に手をかけてソファから立ち上がると、それらをお盆に乗せてのたのたと

台所に向かい歩き出した。まだぎりぎりだが50代であるというのに、その後姿はあの日からますます年老いて見えた。

コナンはそんな博士の後姿を目で追いかけて、それからゆっくりと新聞記事に目をやった。

それから記事に目を通しながら、それとなしに

「・・・光彦のことだけど・・・期待すんなよ」

と言った。

「・・・!？」

案の定、博士は思わず立ち止まると、びっくりした表情で

振り返り、コナンの顔をまじまじと見る。

コナンはその視線に気づき、思わず新聞から目を外すと、その新聞を再びテーブルに戻して、博士に目を向けた。

「ただ雰囲気似てるだけだったかもしれないだろ？」

いまだ髪を染めた女なんかたくさんいるんだし。あの色だって今じゃ珍しい色じゃないんじゃないのか」

博士はその言葉に、確かに、と言いかけて、はたと口をつぐんだ。認めたくない、という心理が働いていたのだろう。

コナンは猫背にしてぼんやり床を睨んでいる博士を見て、

「まあ、その女性が灰原であつたと信じたい気持ちはわかるけど」とため息混じりに呟いた。

「あいつらはずっと灰原を待っていたわけだから・・・」
彼の目は少し顔を上げ、思わず口を緩ませた。

——コナンくん、灰原さんを一緒に探しましょう！僕ら、米花少年探偵団じゃないですか！警察が捜さなくなつて、僕らがいれば彼女の消息だってつかめるはずですよ！

——お願い、コナンくん！力を貸して！歩美、哀ちゃんとこんなお別れするのなんて、絶対嫌だよ！

——灰原がいねー少年探偵団なんて、うな井に山椒のねえ井のようなもんなんだよ！

当時の子供たちの言葉が昨日のことにように浮かんでくる。目に涙を浮かべて訴える子供たち。

「灰原、か・・・」

コナンは口の中でその名前を呼んでみた。

「この名前を口にするのも、何年ぶりかな」

思わずふつと苦笑する。そんな彼の様子に、博士は

「・・・新一。恨んでいるのかの？哀くんを」

心配そうに彼の様子を覗き込んだ。

「・・・さあ、どうなのかな」

コナンはぼんやり、何もない空間を見ながら呟く。

「それに・・・光彦が言ったとおり、歩美がその問題の女を見て、『哀ちゃん』と言ったのかさえもわからねーし」

「そうじゃな、だって彼女はあの後・・・」

博士はそこまで言っただけで哀しそうにため息をついた。

「・・・哀くんに対しての記憶を一切失ってしまったのだから」

光彦は帰宅したのはすでに7時をまわっていた。

2月も終わりになると、12月の冬至に比べれば日は

長くはなつたが、まだまだ辺りは真つ暗で、彼は少し早足で

歩いていたので、門の前にその人物がいたのはさすがに驚いた。

「・・・歩美、ちゃん」

そう、彼を待っていたのは――白いカチューシャが似合う

くりくりとした黒い瞳の女の子、吉田歩美だった。

「どどど、どうしたんですか??」

光彦の部屋。

彼は非常に緊張していた。

両親は教師の仕事を今も続けており、卒業式や入学式のことなどについての会合のため、今日も遅かった。

彼女の姉である朝美は就職して一人暮らしを始めている。

つまり、ここには光彦と歩美の2人しかいないのである。

男と女が二人で部屋ですることといえば・・・。

あんなことや、こんなこと・・・

彼の妄想はしだいに大きく膨らんでいく。

いつのまにか彼の頭から湯気が出ていた。

「・・・あのね、私、光彦くんに聞いてもらいたいことがあるの」

彼女は彼のベッドに腰をおろすと、眉に皺を寄せて辛そうな表情をしたまま言った。

口をきゅつと結び、ベッドの縁を睨んでいるとても辛そうな表情。そんな彼女を見て、彼の妄想はみるみるうちにしぼんでいく。

ここでコメディータッチで紹介すると、彼は今、心の中で自分の頭をばかばかとハンマーで叩いていることだろう。

自身を多くの言葉で罵り、痛めつけて。

それほど彼の心は自分自身に対する羞恥、憎悪の念でうめつくされていた。

あれほど、先ほどまで自分の頭の中は緋色の髪少女のことでいっぱいだったはずなのに、幼馴染の吉田歩美がこんな密室でこんな近くにいるというこの雰囲気ですら既に自分の気持ちは負けている。

人間ができていない、ということ片付けられないことのような気がした。

そんな彼の気持ちを知ってか知らずか、歩美はゆるゆると口を開いた。

「・・・6年前のこと、覚えてる？ 私が入院したときのこと・・・」
彼女の問いに、光彦はええ、と言ってゆつくりと頷いた。

「君は一人で犯人と接触し、その挙句・・・」

光彦はこくり、と唾を飲み込んで喉を潤した。

その先を口にすることを躊躇っていた。

歩美はそんな彼の瞳を見つめたまま、その続きを口にした。

「犯人にがけから突き落とされて意識を失ってしまったのよね」

彼女の瞳は哀しくゆらゆらと揺れていた。

水の入った洗面器に浮かぶ、小船のおもちゃのようにゆらゆらと。

意識を失って1週間。

歩美は奇跡的に目覚め、みるみる回復を遂げた。

しかしある記憶だけがぱっさり削り取られていたのだ。

その記憶というのが、灰原哀。

彼女と過ごした1年間、彼女と触れ合ったその時間が、お全て彼女の中にはなくなっていた。

その後、哀がいなくなる前に少年探偵団で行ったキャンプの写真を見せた時、彼女は不思議そうに尋ねた。

——この子、誰？かわいい子だね。

光彦にとって、そのときの彼女の様子は奇異にさえ思えたほどだった。だがすぐに歩美の写真への思いは興味から恐怖に変わった。

小学1年で入学して、しばらくして歩美の写真にはどれも彼女が共に写っていたからだった。

山でのキャンプも、花火大会も、運動会もクリスマスも、

天体観測も、何もかも。

光彦、元太、歩美、そしてコナンとともにもう一人。

いつも、歩美が思いを寄せていた彼の隣にいる少女。

歩美の知らない女の子。

怖くて怖くて仕方なかった。

写真の中の自分は、彼女自身が知らないその女の子と

楽しそうに喋っている。

手をつないでいる。

お揃いの浴衣を着ている。だから……。

だから、その写真を全て封印した。

写真を焼くのは忍びなかったので、写真をまとめて

紙袋に入れて、押入れの奥深くにしまった。

そんな彼女が——

「……私ね、やっと思い出したんだ。あの写真の子が誰だか」

歩美が穏やかに口元を緩ませて、その言葉を口にした。

「・・・哀ちゃん、だよ。6年前、私たちの前から突然姿を消した女の子、灰原哀ちゃん。大人っぽくて優しいお姉さんのような女の子。赤っぽい茶色の髪がふわふわ綺麗だった女の子。ときどき寂しそうな表情をしていた女の子。私の大切な友達・・・」

歩美は一つ一つ、かみ締めるように言った。

光彦が呆けたように彼女を見つめる。

「・・・そして、コナンくんの・・・」

歩美はそこまで言うと、淡いピンク色の唇をきゅっとかみ締めて、少し俯いた。そのかみ締めた部分だけが深いピンクに変わる。

「コナンくんの・・・」

彼女の唇が震えていた。

「・・・歩美ちゃん？」

光彦は怪訝な顔をして歩美の顔を見た。

「・・・たいせつなひと」

彼女は言った。

再び、阿笠邸地下室。

江戸川コナンは電気もつけずにごろりとベッドに横たわり、ぼんやり高い天井を見上げていた。

現在は夜の11時を少し回ったところだった。

こんなに早く眠ることができるなんて最近は珍しかった。

いつもどこかの事件に彼は助っ人として呼ばれているから。

7年前忽然とこの世から姿を消した高校生探偵と同じように。

高校生探偵、工藤新一。

約2年の間、何百もの凶悪事件、迷宮入りした事件をスピーディに解決した男。日本の救世主といわれた男。

そしてそれは今の江戸川コナンという彼の、いわば『前世』

でもある。生きながらにして体験してしまった2度の人生。
工藤新一という人生を17年生き、そこで果て、江戸川コナン
というもう一つの人生を今は生きている。

そして彼が工藤新一ではなく、江戸川コナンとして歩んでいる
今の人生に多大な影響を与えている人物こそ、灰原哀、
その人だった。なぜなら彼を江戸川コナンという人生を歩ませて
しまったのは、彼女自身だったから。

それが例え彼女の意思で行われたことではなかったとしても。
・・・しかし彼女はある日忽然と姿を消してしまった。
全てがもう少しで終わる、と安心しきっていたそのときに。

6年前の冬、黒の組織はとうとう壊滅した。

それは彼だけじゃない、たくさんの協力によつての賜物だったが。
組織を追い詰める壁は、日本警察、インターポールやFBI、
さまざまな警察組織の手によつて固められていった。

もちろんその中でも日本は江戸川コナンのほかに、

西の名探偵、服部平次、そしていつぞやの『黄昏の館殺人事件』で
知り合つたたくさんの名探偵たち、アメリカFBIでは赤井秀一、
ジョディ・スターリング両捜査官などの活躍が際立っていたが。
そして、もう一つの彼の仕事。

これは江戸川コナン自身の手でその薬のデータが入った
フロップシーを奪取することに成功した。

あとはそのフロップシーを開き、データを見て灰原哀が
APTX4869の解毒剤を作れば彼は再び工藤新一に戻れるはず
だった。

しかし彼女が、灰原哀がとつた行動は彼の予想を大きく反する
ものだった。

彼女は、2通の手紙だけ残して、彼のもとからいなくなつて
しまったのだ。

そう、2通の手紙。

1通は博士宛だった。

内容は、何も言わずに出て行くことゆるしてほしい、ということ、博士の健康管理のこと、少年探偵団への気遣いなどなど、12枚にわたってつらづらと書かれていた。

もう1通は江戸川コナン宛。

何を書いてあるのかは6年経った今でもわからない。

なぜなら今でも彼は封を開けることをしていないから。

博士の手紙のように分厚くはない。多分1枚しか入っていないだろう。それほど薄っぺらなもの。

それなのに開けなかった封筒。

読まなかった手紙。

何に対しての怒りだったのか、何に対してあんな苛立っていたのか、今となっては自分でもわからない。

ただ、あのときは一生読むつもりはなかった。

それなのに・・・。

「あー、くそっ！」

コナンはがばつと突然体を起こした。

そして彼は苛立ちを紛らわせるように頭をくしゃくしゃつかき回す。

・・・眠れない。

手紙のことが頭から離れない・・・。

彼はそのイライラを紛らすために部屋を飛び出した。

水でも飲んで頭を冷やそう、彼はそう思っていた。

1階に続く階段をひたひたと上り、居間を通って・・・。

そこで彼は足をぴたりと止める。

暗い居間にいる怪しい人影。

「・・・っ!？」

コナンは思わず壁に身を隠し、警戒した。

しかしその警戒はすぐに解かれる。

そこにいたのは、博士本人だったのだ。

コナンは安堵の息を吐いて、やれやれというように

「おい、何やってるんだよ、起きてるんなら電気ぐらい・・・」

彼はそこではっとして言葉を止めた。

彼は、泣いていた。

灰原哀の写真立てを抱いて。

肩を、全身を震わせて。

ただ、泣いていた。

2 封印されたモノ（後書き）

作者より：ここまで読んでくださって、ありがとうございます。
小粒納豆こと、こつぶです。

今回は光ちゃんが・・・（泣）

まあ原作でも大方の人間ができているコナンでさえ、
蘭が隣に寝てたりすると、凶悪な事件があっても
かなり混乱してたりしてますし・・・。
許してやってくださいな。

まだ彼、14歳の少年ですからっ。

・・・ていうか、私、何を語ってるんだろう。
このサブタイトルと違うところを強調させて
どうするんだろう（悩）・・・。
で、ではではっ。

3 焦りと苛立ち

吉田歩美が、円谷光彦が、そして帝丹中学2年B組のほとんどの生徒が校門の前でタクシーに乗り込む緋色の髪少女を見たあの日から、既に一週間経っていた。

帝丹中学 図書室。

時刻は夕方5時を過ぎていた。

もうすぐ学校は終わりであるはずなのに、それでも彼は真剣な面持ちで、今もパソコンに向かって、キーを打ちつづけている。

ある情報を探して。

ある一人の少女——灰原哀が自分たちの前から姿を消した前後の事件。

6年前、江戸川コナンと灰原哀がともに帝丹小学校を休んだあの日から、彼女が姿を消した日までの2週間。

そこには一体何があるのか。

自分たちが知らないところで一体何が起こっていたのか。何故彼女が姿を消さなくてはならなかったのか……。

何もわからなかった。

それが彼らにとってもどかしくて仕方なかった。

一度は諦めたことだった。

しかし、一度『彼女』に出会ってしまったらそれを確かめないわけにはいけなくなっていた。心が騒いでいる。

早くその事実を調べなくては。

早く、早く……。

目に見えない誰かに背中を押され、せかされているかのように、彼はひたすらキーボードのキーを叩きつづけていた。

> B < 3 焦りと苛立ち > / B <

「見つかった？」

円谷光彦は長く続いた悪夢から目覚めたように、はっと我に返り、勢いよく顔を上げた。

——歩美だ。

彼女はパソコンの画面を興味深げに覗きこむ。

彼はそんな自然体の彼女を見てみると、強張っていた表情がほんの少しだけ緩まった気がした。

「いえ、・・・あの2週間の間にあった事件を全て調べているつもりなんですけど、それらしいのは未だ・・・」

力なくその言葉を漏らす光彦に対し、歩美は落胆した表情を隠せずにいた。

「そっか・・・」

「・・・やっぱコナンに聞いた方がよかったんじゃないのか？」
げんなりした顔で、奥の本棚から分厚い本を抱えてやってくるのは元太。

かなり重そうだ。そしてそれをどすつとパソコンの机の上に置いた。そんな彼に対し、光彦は呆れたような視線を送った。

「バカですね、コナンくんが教えてくれなかったから、こんなことやらなくちゃいけなくなったんじゃないですか」

「・・・6年前に、ね」

歩美が寂しそうにその言葉を補足する。

「・・・そっか、そうだよな・・・でも今なら・・・」

彼はそこまで口にしてから、ま、無理だな・・・とため息混じりに呟いた。

3人の間に、暗い空気が立ち込める。

長い沈黙。

「なあ・・・」

その沈黙を破ったのは他でもない、元太だった。

彼はふと虚空を見つめて低く、唸るような声で呟いた。

「・・・なあ、俺らつてあいつにとつてどういう存在だったのかな。灰原もどうして俺たちに相談してくれなかったのかな。何で、何であいつら、自分の中に閉じ込めちまつたんだよ・・・」

光彦はその言葉に思わず元太を凝視した。

元太の人一倍大きい体が、なぜか誰よりも小さく見えた。

「元太くん・・・」

歩美は元太に近寄り、そつと優しく彼のそのいかつい肩に手を置く。

「・・・言えなかったんだよ、きつと。いつか哀ちゃん、言つてたじゃない。『「サヨナラ」はお互いの気持ちに針を刺す哀しい言葉」だつて」

歩美の言葉に、元太は思わずその手を振り切つて彼女を睨んだ。

「だからつて・・・サヨナラも言わせてくれねえだなんてずりーよ！何が友達だ、何が少年探偵団だ！コナンだつてあれ以来・・・」

すごい剣幕でその言葉をまくし立てる彼に対し、光彦も思わず声を張り上げていた。

「元太くん、その話は6年前さんざんしたじゃないですか。どうしちやつたんですか？少年探偵団だつて随分前に活動休止したはずでしょ？いまさら、そんなこと蒸し返さないでくださ・・・」

最後まで言えなかった。元太が、彼の胸倉を掴んでいた。

「だったら・・・だったらオメーだつて灰原のことなんか忘れちまえよ！あいつは俺らに何も言わねえで消えたんだ。

もう、俺らと連絡なんてとるつもりはねえってことだろ？

そつだ、最初^{はな}っから俺らなんてどうでも・・・」

「なっ・・・」

光彦の頭のどこかがぶつつん、と切れた音がした。

気が付けば目の前の大きな幼馴染である彼を、その拳で思いつき殴っていた。

彼の巨体が大きくよろけ、机の脚に派手にぶつかる。

その衝撃で、机が元の位置より1、2メートルずれたときに生じた音。

そして机の上にアンバランスに置いてあった本が2、3冊ばさばさと落ちる音。

きやあつ、という歩美の悲鳴。

3人しかないこの広すぎる図書館にこれらの声や音、耳に聞こえるものが響き渡るのは当然のことであつた。

「み、光彦」

元太は怒ることも忘れ、信じられないという顔で光彦に目をむいた。

「光彦君」

はあはあ、と息を切らして、ぶるぶる震える拳を

そのままに、光彦は目の前の親友を睨みつけていた。

「・・・元太くん、見損ないました・・・。コナンくんだけでなく、君まで変わってしまったんですね・・・」

そう呟くと、彼は下を向き、図書室を飛び出していった。

「光彦君！」

歩美が追いかけてくる足音が聞こえる。

しかし、その音を振り切るようにして、彼は駆け続けた。

涙が瞳からボロボロ流れていくのを、誰にも、特に歩美だけには見られなくなかった。

円谷光彦の中で、灰原哀のことを忘れたことはなかった。

そして永遠に忘れることはないだろう。
例え、周りの全てが彼女を忘れてしまおうとも、自分だけは……。
そう彼の中で決め込んでいた。

江戸川コナンと同じ匂いを持った少女。

優しく、ミステリアスで、魅力的な少女。

ずっと、ずっと子供のころからあこがれていた。

同じ年頃の子供よりも大人びた思想を持つ彼にとって
自分よりはるかに理知的で、大人びた彼女がその心を
魅了したのはごく自然なことだった。

彼女が消えたとき、彼はとてもショックを覚えた。

泣き叫びたいくらいの衝動。

でも、泣けなかった。

泣くわけにはいかなかった。

自分より辛い状況下に置かれている人たちがいたから。

その日、彼女が消えたという連絡を受け、彼女が居候
していたその男の家に行ったとき、そして、もぬけの殻に
なったその部屋を見たとき、彼のすぐ隣には、白い
カチューシャの女の子がいた。

同性の中では、最も哀と近づいていた女の子。

彼女をあるときは信頼できるお姉さん、またあるときは
誰よりも大切な友達として慕っていた女の子。

また、彼女が一番大切にしていた女の子。

泣きじゃくり、哀ちゃん、哀ちゃん、と何度も彼女の
名前を呼んでいた。

僕が守ってあげなきゃ、と思った。

そしてすぐ目の前には、彼女と1年と少し、居住生活を
ともにした男がいた。

放心状態で、ぼんやりその場につ立っていたその男。彼には、何故彼女が本当の家族と生活をせずに、親戚と呼ばれるその男と生活を共にしているのかがよくわからなかった。

彼女が転入するそのことも、自分の家に居候すると言うことさえも、その男の口から少しも聞かされてなかったから。離婚とか、両親の死とか、突然のことだったのかもしれない。それほどまで、彼女は精神的に塞ぎこんでいた。

しかしこの1年と少しの中で、彼女がどんどん笑顔が出てきたのを、彼は知っている。

優しさ、いたわり、彼女が少しずつ彼らに見せてくれたことを知っている。

そして彼女がその男に見せるその表情、言葉がけ、それは彼自身が自分の両親に向けるそれらと何ら変わりはなかった。そう、もう2人は家族だった。

それなのに、自分の娘同然に見ていた彼女が手紙だけを残して消えてしまった。

その気持ちはさすがに計り知れない。

そして・・・。

隅の壁に力なく身をもたげているのは黒縁めがねの少年。彼女が少年探偵団の中で・・・いや、おそらく彼女が関わってきた全ての人の中で誰よりも信頼していた少年。お互いを認め、いつも自分たちが知らないところで

ミステリアスな会話を続けていた。

彼はうらやましかった。

彼女がその少年を見つめる目。

彼女がその少年を語るときの表情。

自分たちに対してとは明らかに違っていたから。

そのときの彼女は、いつも女の子の目をしていた。

その少年を見つめるときの、幼馴染のあの子のような。

もちろん、その少年はその視線の意味に気づいていなかった
ようだけれど。

彼自身、その少年の彼女に対する気持ちもよくわからないまま
であつたから。

・・・しかし、彼はとうとう気づいてしまった。

彼女がいなくなったあの日にその少年の姿を見てしまったから。

誰からも離れた場所で、一人手紙を握り締め、唇をかみ、

身をかがめ、ふるふると肩を震わせて床だけを睨んでいる、

その少年の姿を。

ばかりうつ、とたった一言、苦しそうに呟いた少年のその姿を。

そのときに気づいた。

その少年の気持ち。

その少年がどんな風に彼女を見ていたかということ。

きつと、

きつと自分とおんなじ気持ち。

そして二人は・・・。

二人は――

光彦はひたすら走りつづけていた。

図書室を抜け、音楽室の前を通り、廊下を走り、

階段を下り、下駄箱の前まで来て・・・。

思わず彼は、まるで車が急ブレーキをかけたように、強い
勢いで立ち止まった。そして信じられない、という表情を

浮かべ、息をハアハアと切らせながらも、それを

凝視するしかなかった。

なぜなら、そこに、そこに彼女がいたから。

そう、校門に、1週間前に見たあの場所に、彼女は存在し（い）た。彼女は背丈とほぼ同じくらいの門に背をもたげ、ぼんやり彼がいまここにいるこの古ぼけた校舎を見上げている。夕日の逆光で、彼女の顔はよく見えない。

しかし、背格好、その髪型……。

どこからどうみても、そのシルエットは、1週間前の彼女と何ら変わらない。いや、逆にそれは確信に変わっていた。……何の根拠があるわけでもないが。

光彦はあわてて靴に履き替えると、ゆっくり、ゆっくり彼女に近づいていく。

校庭の端を通り、緑に身を潜め、もう彼女に逃げられないように、あたりをきよきよと見渡しながらじりじりと間合いを詰めていく。

そして彼女にあと3メートルほどまで近づいたとき、ばたん、という車のドアが閉まる音とともに、その声は聞こえた。

「哀くん……っ！」

低くしゃがれた、初老の男の声。

そしてどたどたと駆け寄る重い足音。

その声に、はっとして少女は振り返る。

光彦はその少女の顔を見て、思わず息を呑んだ。

先ほどまでその場所からは緋色の髪しか見えなかったが、彼女が顔を動かしたことで、はっきりその顔を

確認することができた。

丸みを帯びた逆三角形の輪郭。

透き通った乳白色の肌。

つーっと長く真っ直ぐ横に伸びた形のよい眉毛。

大きなアーモンド型の印象的な目。

長くつややかに輝^{ひか}るビロード色のまつげ。
鼻筋が通った小鼻。

ぷっくり熟した薄い桃色の唇。

そして、・・・ウエーブがかった緋色の髪。

そう、それは紛れもない灰原哀だった。

1年と少しという同じ時間を共有してきた彼女の、

灰原哀のその横顔だった。

「哀くん、・・・哀くん、わしじゃよ」

彼女を呼ぶのは、力ない、しかしどこかすがるようなその声。
光彦の場所からはその主の姿は見えない。

しかし、光彦は始めにその声を聞いた時点で、それが
誰なのかはすぐに察することができた。

「・・・博士」

震える声で、彼女は言った。

光彦はほおつと大きく息を吐いた。

「哀くん・・・っ」

男の足音が早まるのを光彦は聞いていた。

そして彼自身もまた哀の方へ行こうとしたとき・・・

「ごめんなさい、私・・・」

掠れた、生気のない声が彼の耳を通っていった。

そしてそのすぐ後で、彼の目の前で彼女が直角に倒れていく・・・。
どさり、という音がした。

その音とほぼ同時に彼は彼女の元へ駆け込んでいた。

「哀くんっ・・・!」

「・・・灰原さんっ!!」

彼らが駆け込んだときには既に遅く、彼女はその場に
崩れ落ちるようにして倒れていた。

阿笠邸 居間。

自分以外誰もいないこの家に、江戸川コナンは一人電話の受話器を片手に、熱めのブラックコーヒーを飲んでいる。

「……で？」

コナンは電話の相手に対し、ため息混じりにこう尋ねた。

「俺にどうしろつつうんだ？まさかオメー、その緋色の髪的女を治してやれ、だなんて言うつもりじゃねえだろうな」

「緋色の髪の女、じゃなくて灰原さんです！」

電話の向こうで光彦が声を張り上げる。

その勢いに飲まれ、彼は思わず失笑すると、コーヒーを一口喉に流し込んでから、

「……大体その女がアイツだって証拠、あるのかよ」と尋ねた。

あるはずがない、彼はそう思っていた。

またその少女はオメーらの見間違い、あるいは勘違いだと言うつもりだった。

大体彼女がいまさらこの学校を訪ねる意味もない。

そう決め付けていた。

それなのに彼が聞いた言葉は……。

「ありますよっ！だって……博士を見て、灰原さん、ごめんなさい、って……。『ごめんなさい、私』……

って、彼女そう言ったんですよ」

光彦の言葉に、コナンは驚いたように目を見開いた。

そして思わず少しも乱れてもないそのさらさらとした髪を苛立たしげにかきあげる。光彦の言葉はさらに続いた。

「顔だって、声だって、……掠れてはいますが、でも……。何もかも……。あのころの灰原さんそのままなんです」

切羽詰った彼の声。

コナンは大きくため息をついた。

「……それで？その女の容体は？」

「いや、過労だとか……」

ふうん、とコナンは呟くと、飲みかけのコーヒを棚の上に置き、
朦朧ぼんやりと卓上カレンダーに目をやった。

電話の向こうの彼は、彼の反応にさらに声を張り上げる。

「ふうん、じゃないですよ！彼女、一晩入院して様子見る
ようですけど・・・。コナンくんは一体どうする

つもりなんですか！？」

「・・・どうするつもりだったって・・・」

コナンは思わずふっと息を吐いた。そして天井に向かって
上っていく白い湯気を見ながら、

「俺はここにいるし、事件があつたらそっちへ行く。

誰だかわからねえ女の看病をする余裕なんて今の俺にはねえから」

彼が言ったその言葉の後に、短い沈黙が流れた。

そして諦めたようにため息と共に光彦はその言葉を吐いた。

「コナンくんは嫌でも彼女を灰原さんと認めようとしな

いですね。博士が彼女を灰原さんだと認めても」

「バ一口、身元証明するもんなんてねえんだろ。それが仮に灰原に
の姿形だったとしても・・・本人かさえもわかったもんじゃねえ。

整形だつて今じゃ簡単にできるし、それに・・・」

彼は言葉を一度切った。

怪訝そうに受話器の向こうで光彦が聞き返す。

コナンは、いや、なんでもねえ、と小さく笑った。そして、

「とにかく、俺はそっちへ行く気はねえから」

と言った。

受話器越しに、光彦の落胆した深いため息が聞こえる。

「そうですね。コナンくんは忙しいですもんね。

・・・わかりました。僕が・・・僕が博士と一緒に灰原さんに
付き添います」

彼が言ったその言葉に、コナンはある違和感を感じていた。
その言葉の中に、幼少時からの幼馴染である元太や歩美の
名前は一切含まれてなかったからだ。

「他の奴らは来ねえのか？歩美とか、元太とか・・・」

「歩美ちゃんにはもちろん伝えますが、・・・元太くんとはしばらく顔を合わせたくないんです」

「・・・そっか」

その先は聞かないことにした。

何かあったな、とは推測できたが、今の自分はそれを聞こうとする気はなかった。心の余裕がなかったのかもしれない。

「・・・それでは、お忙しいのにお電話して、失礼しました」

沈んだ声で彼が言う。コナンははっと我に返った。

「あ、おう・・・」

がちやり。

・・・いつになく乱暴な受話器の切り方だと感じるのは気のせいだろうか。

いや、おそらく気のせいではないだろう。

コナンは深いため息をつくとき、ソファに体を沈ませるように腰をおろした。

いらつく心。

ざわざわと騒ぐ心。

とりあえずリモコンでテレビをつけてみる。

このイライラをどうにかして抑えたかった。

チャンネルを一通り回し、彼の興味を引くものが何もないのを知ると、再びリモコンをテレビに向け、オフにした。

そしてちつ、と舌打ちをすると、ソファにリモコンを叩きつける。彼の心の中にあるこのイライラは、一向に治まるわけはなかった。

——だって・・・博士を見て、灰原さん、ごめんなさい、って・・・

先ほどの光彦の言葉が頭に浮かんでくる。

コナンはコーヒートを再び口の中に流し込もうとして、その手を止めた。

「バーロ・・・謝るんなら、何でどっか行っちゃったんだよ」
そう切なそうに、どこかその苦々しくその言葉を吐き
捨てるように呟いた。

そしてそれが無意識に出た言葉であることに気づいて、思わず
口を押える。

それから、コナンは目線を下に下ろし、じっと自分の手を眺めた。
あのころから随分成長した、大きい手。

確実に工藤新一であったころの自分に近づいていく体。

コナンは、ソファから立ち上がると棚の上にあった写真たてを
そっと手にした。

ちょうど1週間前の夜、博士がこれを抱いて泣いていた。
そこに写っているのは、灰原哀、ただ一人。

小学2年に上がる前だったか、博士が新しいカメラを
使いたくて、彼女を被写体にしたという、普通のサイズより
一回り大きい写真。

写真の中の彼女は笑っている。

小さいままで。

あのころのままで。

コナンは再び大きく深いため息をつく、その手入れが行き
届いたその写真たてを棚の上に伏せて置いた。

今、頭の中にあるのは、灰原哀のことしかなかった。

考えたくないのに。

またも光彦の一言で自分は惑わされている。

そもそも、これほど彼女のことを考えるようになったのは、
1週間前、阿笠邸の玄関で彼のあの言葉を聞いたからだ。

——灰原さん、ここにいます！この町にいますよ、博士！

あれから自分の思考回路はいかれてしまった。

今度誰かに哀の話をされたら、今度こそ自分はおかしくなってしまうかもしれない。

それにしても・・・。

自分は一体、何がしたいのだろうか・・・。

逢わなければいけないのだろうか、その女に。

逢いたいのだろうか、その女に。

もしその女が灰原だったらどうするつもりだ？

灰原じゃなかったら・・・？

・・・頭が痛くなりそうだ。

3 焦りと苛立ち（後書き）

作者より：いやー……。難しかった。

ところでこのお話を読んだ後、「光彦って結局どっちが好きなのっ？」って、絶対みなさん、思ってたっしやるでしょうねvv

いやいや、こつぶ自身も今の時点ではよくわかってないです。前はあんなに……。ねえ。（苦笑）でもテーマは光彦くんじゃあないし……。

ま、気にしないでください。

それでも悩みたい人は、おおいに悩んでください。それでコナンくんみたいに頭を痛めても、

こつぶは責任を負いかねますけどね。（おい）

そ、それでは、ここまでお読みいただきまして、本当にありがとうございました。

4 逢いたいのか、逢いたくないのか

その日は星がいつもより数段綺麗な夜だった。

彼と私は、土手に二人肩を並べて空を見上げていた。

キラキラと何億もの星が輝く夜空。

一点の曇りもない、澄み渡った紺の空。

白く輝く星。

そしてそれを静かに見上げる私たち。

何を言うわけでもない。

何をするわけでもない。

ただ、じつとあのどこまでも続く紺色の空を見上げていた。

そして私は時折、彼に気づかれないうちにその横顔を見つめていた。

そう、それは組織のアジトに乗り込む前夜のこと。

眠れなかったあの日。

私が何度止めても、どうしても行くと聞かなかったあの日。

不本意にも彼の前で大泣きしたあの日。

博士の家で何度も彼の肩をゆすり、彼の小さな

胸板を拳で叩き、泣き叫んでいた。

行かないで、死なないで、と何度も訴えた。

鼻水も涙もそのままに。

それでも止めたかった。

哀れに思われてもいい。

無様な姿をさらしてもかまわない。

彼に嫌われたって・・・それでもいいのだ。

彼が行かない、組織とは戦わない、と言ってくれさえすれば。

彼がここに残っていてくれさえすれば。

組織と戦うことを諦めてくれさえすれば。

・・・なぜなら、彼に死んで欲しくなかったから。
ずっと生きてて欲しかったから。
それなのに・・・

——ごめんな、灰原。俺は行くよ。行きたいんだ。
でも、死なねえ。だって・・・俺を待ってるやつがいるから。

決意を秘めたその言葉。

遠くを真っ直ぐ睨みながら、彼はむしろ自分に言い聞かせるように
そう言った。

それから今までの表情がまるで嘘だったように笑って
ハンカチを私にそっと差し出した。

——な、灰原・・・オメーも、待っててくれるんだろ？

屈託もない優しい笑顔で・・・。

そして私は、彼を送り出すことを決意した。

その先に私たちを別つ残酷な運命が待ち構えているとは知らずに。

> B < 4 逢いたいのか、逢いたくないのか > / B <

その少女が目覚めたのは、見知らぬ部屋のベッドの上での
ことだった。

白い鉄パイプで作られたベッド。

シンプルな形のベッド。

シンプルな棚に、シンプルな照明器具。

そしてつんと鼻につくようなアルコール系の薬品の匂い。

これは消毒液だろうか。

少女は目をきよろきよろさせて辺りをうかがった。

「・・・びよう・・・いん？」

そう口の中で呟いたとき・・・。

「気がついたんじゃない？」

少女はそのしゃがれた声にはっと体を起こした。

そしておずおずと、声のした方を振り返る。

そこにいるのは、少女がかつてよく知っていた人物。

薄い禿頭、まん丸な顔立ち、丸メガネに、大きな鷲鼻、

そして白い口ひげ・・・。

そのいでたちはあのころと少しも変わっていない。

ますます実年齢より老けて見えるようにはなっていたが。

それは自分の所為だというのは彼女自身痛いほどわかっていた。

「博士・・・」

少女は思わず声を上げた。

「あの・・・私・・・」

沈んだ声で少女は何か言葉を言いかけた。

彼はわざと遮るように早口でこう言った。

「哀くんなんじゃない？」

「え・・・？」

思わず聞き返す少女に、博士は強い口調でもう一度

その言葉を繰り返した。

「君は・・・哀くんなんじゃない？」

少女は恐る恐るこくり、と頷いた。

次の瞬間、少女は彼のおお、という低い呻きとともに、

彼女の視界は一瞬見えなくなった。

きゅうつと力強い彼の太い両腕に彼女のその細い体は

引き寄せられ、肉厚な彼の胸板に顔を押し付けられた。

大きくて分厚い手が、彼女の頭を包み込む。

強く、強く。

体が締め付けられるほどの強さで。

「・・・博士？」

戸惑ったように少女は彼を見上げた

しかし、彼の体は震えていた。

彼の瞳から、どくどくと涙があふれていった。

「……この、親不孝ものめが！」

低くしゃがれた声が震えている。

自分を泣きながら叱ってくれている。

「……ごめんなさい……」

少女——いや、灰原哀は震える声でそう言った。

謝るしかなかった。

彼女の瞳からも、とめどなく涙があふれてきていた。

彼女の気持ちの中にあるのはただ、後悔だけ。

戻ってきてしまった後悔と、彼を泣かせてしまった後悔と。

哀がその言葉を口にした瞬間、彼女を抱きしめる彼の

腕の力は急速に弱まった。

そして、一時彼女を自分の体から離すと、まじまじと

哀の顔を見た。そして涙をこしこしと拭いてふっと微笑する。

「……おかえり、哀くん」

6年前のあの時と同じ科白。

しかし彼女はあの時と同じようにただいま、とは言うことが

できなかった。ただ、まるで金魚鉢の中の餌を待つ金魚の

ように、口をぱくぱくさせていることしかできなかった。

『ただいま』なんていう言葉、今の自分には言うことができなかった。

「……哀くん？」

博士は怪訝そうに哀を見つめた。

哀はその視線から避けるように静かに俯いた。

博士は寂しそうに静かに笑うと、ああ、そうじゃそうじゃ、と

何か思い出したのか、それまでとは打って変わって明るい調子で言った。

「ほんのさっきまで光彦くんが来てくれてたんじゃよ。救急車に

一緒に乗ってくれたのも彼じゃし。あと10分遅くここに
残っていれば、君とこうやって話ができたのにな……」
光彦くん、という言葉に彼女は一瞬懐かしそうに目を細めた。
昨日、薄れ行く意識の向こうに、精悍な顔立ちの少年が
うつすらと見えたような気がした。あの少年が円谷光彦
だったのだろうか。そんなことを彼女が思っていたそのとき、
「米花町からお越しの阿笠博士様。江戸川様から
お電話が入っております。お近くのナースセンターまで
お越しください」
院内放送が流れてくる。
聞き取りやすい女性の声。

江戸川様……？

どきり、として哀は身を固まらせる。

「……新一から電話じゃ。何じゃろ？」

博士は哀を抱きしめていたその手を解くと、首をかしげて呟いた。

「哀くん、そこでおとなしく待つとるんじゃないぞ？その体で

どこか行こうだなんて思うんでないぞ？」

彼は心配そうに哀に忠告した後、よたよた入り口の方へ向かった。

そして名残惜しそうに一度彼女を振り返ってから病室を後にした。

哀はそんな彼の後姿をぼんやり眺めていた。

そして小さくため息をつく、哀は毛布をかぶり、ごろりと
横になった。

逃げる気はなかった。

これ以上博士を悲しませたくない。

別れるときは、今度はきちんとこの口で言うつもりだった。

もう、これ以上誰かの涙なんて見たくない。

だから……。

彼女はゆっくり目を閉じた。

しばらくはこうやって体を休めておこう。
今はこうして・・・。

米花総合病院から目と鼻の先にある喫茶店『MERRY』。
そこに江戸川コナンと阿笠^{はかせ}博士はいた。

「・・・まったく。ここまで来とるんなら、病室まで来たら
どうなんじゃ。哀くんだってどんなに喜ぶか・・・」

ふかふかの椅子に座り、フレンチトーストをナイフでせっせと
切り分けながら、博士は眉をしかめてコナンを睨んだ。

「そのことなんだけど・・・」

コナンは一度言葉を切り、居住まいを正して、

「・・・その女って本当に灰原なのか？」

博士は一瞬ぼかんと口を開けてコナンを見ていたが、急に
可笑しそうに笑い出す。

「何じゃ、まだ疑っておったのかの。血液検査では彼女は、
哀くんとまったく同じ型だったよ。彼女自身もそう認めておったし、
あんなにそっくりな女の子は本人以外まずこの世におんじやろ」

「マスク・・・」

コナンはまっすぐ博士を見つめたまま、口の中でその言葉を呟いた。
博士は思いもかけないその言葉に、はあ？と怪訝そうな顔をする。

「6年前、壊滅していたはずの組織が実は残っていたとしたら？
その中にベルモットみたいに顔を自由自在に変えることができる
やつがいたとしたら？俺らを一人残らず殺すためにあの姿で
この町に・・・」

「新」

博士は困ったような顔をして彼の言葉を遮った。

「それこそいまさらな話なんじゃないのかのう？なぜ今に
なって組織がわしらを殺そうとするんじゃない？万が一今が
わしらを殺す絶好のチャンスだったとしても、わざわざ哀くんの
姿にならんでも」

「それは組織が卑劣で残酷な集団だから。いや、もしかしたら
そいつは組織の末端中の末端で、ただ、大ボスを俺たちが
自害させたのを根に持っていたのかもしれない。俺のことが
憎かったのかもしれない。そして俺の仲間も。だから一番
苦しむやり方で俺らを殺したかった――。そう考えたらどうだ？」
「何？」

博士は思わず聞き返した。コナンは苦々しく笑った。
「つまりこういうことだ。一度灰原の姿で俺らに近づき、そして
しばらくしたら殺す。信じてたのにまたしても裏切られた、
という思いを埋め込ませるために。死ぬ瞬間まで俺らのことを
果ての果てまで苦しめようとして・・・」

コナンはそこまで言って言葉を切った。博士はフレンチトーストを
ナイフで切り分ける手を止め、神妙な顔をして自分を見ていたから
だ。

「・・・なんだよ、その顔」
思わず不機嫌な顔になる。

「・・・のう、新一。君が彼女を灰原哀ではないと思うのは
何故じゃ？」

彼の言葉に、コナンがはっとして博士を見つめる。

「彼女に逢うのが怖いのか？」

「怖い？・・・何で俺が怖がらなくちゃなんねーんだよ」

コナンは思わず語調を強める。しかし、博士はそれに一切動じる
ことはしなかった。ただ、ため息をついてゆっくりこう言った。

「・・・君は自分の気持ちに嘘をついてるんじゃないか、と
思ってるのう」

「俺が・・・？」

眉に皺を寄せ、コナンは目の前の博士を見つめる。

「・・・ああ。ひょっとしたら君が一番彼女に逢いたいん
じゃないのかのう？最近の君はそれを無理やり押さえ込んで
いるようにしか、わしはどうしても思えないんじゃないか・・・」

博士の真っ直ぐな瞳が彼の瞳の奥を見据えた。

コナンは何も言えずにただ、ぎゅっと下唇をかみしめる。

「・・・今、彼女に逢ったほうがいいんじゃないかのう？
恨んでる、恨んでないは別にして——・・・いや、万が一
彼女が君の言うとおり哀くんじゃなかったとしても、一度
話をしてみることは・・・」

「バーロ」

今度はコナンが博士の話を遮る番だった。

「話をしてどうする？俺がそれで納得できるっつーのか？

それがもし灰原だったとしても、俺が今までどおりあいつに
接することができるっつーのか？・・・俺は、あいつに
人生をめちゃくちやにされたんだぞ？」

「本当に・・・本当にそう思ってるのか？」

博士は先ほど切り分けたフレンチトーストの一片をフォークで
刺し、それを熱いホットココアにつけながら言った。

「何？」

「哀くんが消えた後の君を見て、最初はわしもそう思った。

君は哀くんのことを少しもしゃべろうとしなかったからのう。

そう、6年前のあの日を境に、君はキラキラしていたあのころ
とは別人のように変わってしまった。しかしそれはこの江戸川
コナンという体で一生過ごさなくてはならないかもしれない
ことに対する嫌悪感、そして哀くんのことを忘れたがるのは、
この姿の原因を作った彼女に対する憎悪の気持ちからだと思ってた。
でもそれはどうやら違っていたようじゃな」

彼はそう言うが早いか、フォークに指したココア味のフレンチ
トーストを口の中に放り込む。

「どういうことだよ？」

思わず声を荒げるコナン。

そんな彼に対して、博士はふっと彼を冷やかすような目をした。

「なあに、簡単なことじゃよ。今回、光彦君や歩美くんが

学校で哀くん・・・いや、緋色の髪の女性を見たたん、君はやけに彼女を気にするようになったじゃないか。

そのときに思っただんじゃ。君はただいじけているだけだったんじゃないのか、とな」

「・・・いじめてた、だと？」

「ああ、そうじゃ。彼女が・・・哀くんが君を残して一人で去っていったということ。もっと一緒にいたかったのに・・・何も言わずにどこかへ消えてしまったことに對する苛立ち、そして哀しみ・・・。ただそれだけじゃなかったのかのう？」

博士はそう言つと、かばんの中に手を突っ込んでごそごそと何かを探り始めた。そして目的のものを見つけたのか、ようやくその手をかばんから抜き取つてコナンの前にかざす。

それを見たたん、コナンの目つきがみるみるうちに変わった。

「・・・これ、なんだかわかるかのう？」

一枚の茶封筒を見せた。

薄っぺらな封筒。

そして・・・封は・・・。

封は、開けられている。

「・・・っ!？」

コナンは思わず目をかっとなげ、それを奪い返そうと手を博士の方へ思いつきり伸ばした。

その瞬間、がちゃん、と目の前のコーヒークップが倒れ、半分くらい入っていた紅茶がこぼれた。

どくどくとカップの中の紅茶はこぼれ、白いテーブルクロスに茶色のしみを作っていく。それでも構わずにコナンはただ、博士を、博士だけをものすごい形相で睨んでいた。

「・・・博士・・・どうしてそれを・・・っ。まさか俺の机の引出し勝手に開けて・・・」

「さあ、どうじゃろ・・・それにあの机はもともとわしの

研究室の机じゃったし・・・それを哀くんのためにあげたものなんじゃ。君の机だなんて、わしは思ったことなんてないぞ？」

鼻歌交じりにそう言つて卑屈な笑いを見せる博士。

「博士、てめえっ」

コナンは思わず博士の胸倉を力の限りぐいつと掴んだ。

「封も開けたんだな！？勝手に開けて読んだんだな！？」

ほんの短い間の後、彼は口元にいやらしい笑みを浮かべてああ、そうじゃ、と言った。

「・・・まさか6年もの間、封を開けていないで取つておいたなんて、思つても見なかったがのう。なあ、新一。知りたいのなら、わしが教えてやろうか。哀くんが何を言つたか、今ここで」

彼はぺらぺらと片手で封筒を彼の目の前にちらつかせて見せた。

「・・・っ！」

もう限界だ。

コナンは思わず右手を思いっきり振り上げた。

「お客様、困ります！けんかは外でやっていただかないと他のお客様にご迷惑です！」

店長らしい中年の男性が慌てて2人の間を割つて入ると声を張りあげて二人を引き離れた。

そしてこぼれた紅茶を手際よく布巾で拭き、新しい紅茶をポットから注ぐと、2人を軽く睨みつけてからその場を離れた。

コナンはふつふつと限りなくあふれ出る怒りを何とかして押しとどめようと、どんつと、一度拳を壁に叩きつけた。

そして乱暴に椅子に座ると、博士の手からその茶封筒を引つたくる。そしてそこで彼は気がついた。

これは・・・江戸川コナン宛じゃない。

——博士宛だ。

彼は開けてある封筒から焦つたようにその1枚の便箋を

抜き取った。そしてすぐさま目を通してみる。

しかしその手紙が何であったか、彼はすぐにわかることができた。

これは灰原哀が博士に送った12枚のうちの1枚だ。

つまり・・・

「・・・博士、てめー・・・はめやがったな」

彼は胸の奥から出した深いため息とともにその言葉を吐くと、その封筒をテーブルの上に投げ付けた。そんな彼の様子に、博士は肩を震わせてくっくつと笑った。

「なあに、わしはただ昔の君を真似てみただけじゃよ。

犯人に決定的な証拠を自ら出させるため。自分が犯人だという証拠をな」

「証拠だあ？」

ふてくされた表情でコナンは博士を上目遣いで見上げる。

ああ、そうじゃ、と博士は嬉しそうな表情で大きく頷いた。

「君が哀くんを気にかけているっていう証拠じゃよ。わしは

君宛にも哀くんから手紙をもらっているのを知っていたからのう。あの手紙がどうなったか、知リたかつたんじゃよ。・・・まさか封を開けずにとつてあるとは思わなかつたが・・・」

「読む気がしなかつただけだよ。あの時点で、俺と灰原は切れたと思つてたし」

コナンはそういうと、目の前にある新しい紅茶に口をつけ、その熱さに思わず、あち、と呟いた。しかしそんな彼の様子に、博士は表情一つ変えずに、

「なら何故捨てなかつた？何故それを燃やさなかつたんじゃ？」と尋ねた。

「機会を逃していただけたよ。それに手紙を燃やすというその行為自体、俺は好きじゃねーから」

コナンは博士から明らかにそっぽを向き、その言葉を吐いた。しかしもちろんそれでごまかされることはなく、博士の追及は

さらに進む。

「・・・じゃあその読む気がしない手紙の存在を君が覚えていたのは何故じゃ？あの封筒を見せたたん、それが6年前の『あの手紙』だと

思ったのは？あんなどこにでもある茶封筒見せられて、まさかあれが哀くんからの手紙だなんて思うのは、それだけ君があの手紙を気にかけているということなんじゃないのかね」

「・・・」

答えられなかった。

博士のまん丸なメガネのレンズの奥の黒い瞳が真っ直ぐ

彼の瞳を見据える。

もう、逃げられない。

コナンはふう、と胸の奥から息を吐いた。それから、わからねえんだよ、と苦々しそうに呟いた。

「何？」

博士が怪訝そうに聞き返す。

「・・・俺自身わからねえんだよ、あいつに逢いたいのか、逢いたくねーのか。あいつを恨んでるのか恨んでねえのか。

ただ・・・博士の言うとおり、あの手紙のことを忘れたことはなかったし、あいつのことを忘れたこともなかった。それでもあの手紙を開けるつもりはなかった・・・。開けたって何も解決することじゃねえと思っただし。それなのに・・・」

彼は思わず俯き、頭をくしゃくしゃとかきむしった。

「・・・光彦の話聞いたあの日から・・・あの手紙が何だったのか、何でいなくなっちゃったのか・・・まるであいつが消えた直後の時のように・・・その考えが頭にずっと離れなくなっちゃった」

「・・・新一」

博士がぽんと彼の肩を優しく叩いた。

コナンは俯いていた顔をそっと上げて博士を見た。

博士は優しい顔をしていた。

「・・・開けなさい、その手紙を。それから哀くんに・・・いや、今、病院にいる彼女に逢うか逢わないか決めなさい。

その決断については、もうわしは何も言わんよ」

「・・・博士」

「ありがとう。・・・久々に君の本音を聞かせてもらったよ」

そう言つて博士は軽くあまり上手ではないウイंकをして見せた。ふつとコナンはただ黙つて苦笑する。

「・・・じゃあ、わしは病院に戻るから・・・。君は先に家に帰つてゆつくりしてなさい。明日も仕事があるんじゃない？」

「・・・あ、ああ・・・群馬の山村刑事のところへ」

そうか、と博士は嬉しそうに笑つた。

それから彼は伝票を持つてレジカウンターに行き、二人分の金を払うと、またよたよたとした足取りで再び出口の方へ歩き出す。

カランカラン、と鳴るドアのベルの音。

窓の向こうに映る大きな彼の影。

コナンはぼんやりその姿を見ていたが、小さくため息をついて熱い紅茶を再び口にした。

が、思い直したように勢いよく椅子から立ち上がり、博士の後を追うために出口を飛び出した。

逢わなくてはいけない気がした。

いや、彼女に今、逢つて話がしたかった。

手紙を読む前に、明日ここを発つ前に、彼女の顔が見たかった。

彼女が灰原哀でも、そうじゃなかったとしても。

そしてこのもやもやした霧のような気持ち晴れるのはきつとすぐ先のような気がした。

4 逢いたいのか、逢いたくないのか（後書き）

作者より：ここまで読んでくださって、ありがとうございます。

ホント、2話連続けんかモードで申し訳ないです（泣）。

ていうか、いつもコナンくん騙されますよね。

・・・騙されやすいオーラがあるのかしら。

こつぶワールドの中で（笑）。

しかもなんかこの話、売れないVシネマみたいになっちゃったし。博士の科白、明らかにわざと

らしいし・・・（泣）ホント、どうしたもんかな。

それではこんな駄作ですが、次回もよろしく

おねがいします。

小粒納豆こと、こつぶでした。

5 複雑な再会

時刻はじき夜の8時になろうとしていた。

あと30分で面会時間が終わる。

灰原哀はぼんやりと時計を見ていた。

明日、退院できると担当の医者は言っていた。

しかし今の自分には帰るべき場所はない。

6年間過ごしたあの町には、もう自分を迎えてくれる人はいない。

けれどもだからといってここへ居つづけるつもりもなかった。
なぜなら、自分はここにいてはいけない人間だから。

あの日、凍えるような冷たい地下室の中で、そう誓ったのだから。
・・・では、自分はどこへ行けばいいのだろうか。

どこへ行けば自分の居場所はあるのだろうか――。

「哀くん、入るぞ」

突然聞こえてきた博士の声と、ドアのノックの音で、突然彼女はまるで風船がぱちんと爆ぜるかのように我に返った。

哀はそつと黄色のガウンを肩まで掛けなおすと、

「どうぞ・・・」

と言つて、そこにいるであろう人物を出迎える準備をする。

きいい・・・というきしむ音とともに、開くドア。

そこには案の定、心配そうな表情で自分を見つめる博士がいた。
そして彼の隣にはもう一人。

彼女は目を大きく開けて驚いたようにその人物を見た。

そこにいるのは、博士の隣に立っているのは、江戸川コナン
その人だった・・・。

> B < 5 複雑な再会 > / B <

一瞬、何が起きたのかわからなかった。

目の前の黒縁めがねの少年は、確かに6年前自分が裏切った彼であり……。

そしてその彼の瞳は、まっすぐに自分を見つめている。

「……よお、灰原。久しぶりだな」

コナンは長い沈黙の後、ふっと笑ってそう言った。

「……工藤……くん」

震える声で哀はコナンを見つめる。

信じられなかった。

目の前に彼がいること自体が。

一生逢わないつもりでいたのに。

彼と鉢合わせする前にまだどこかへ行こうと決めていたのに。

まさか彼から出向いてくるなんてそんなことが一生あるはずがないと思っていた。

「……どうして？何であなたがここにいるの？」

哀はまるで小さな子供がいやいやをするように、首を横に振りつつけた。

その言葉にコナンは鼻で笑った。

「それはこっちが聞きてえよ。何でオメーがここにいるんだよ」
それから、今までどこに行ってた？」

彼は一步一步ゆっくりと近づいてくる。

じつと自分の顔を見ていることは、彼女はわかっていた。

あの、何もかも見透かしたような瞳で。

だから、余計に怖かった。

「ねえ、お願い……お願いだから来ないで！」

哀は震える手で何とか毛布を掴むと、それを頭から被り、声を震わせてこう言った。

「あ、哀くん？」

彼女の毛布越しの肩に、博士の手が置かれる。

かつかつと近づいてくる足音。

「・・・おい、失礼な奴だな。せつかく見舞いにきて
やったのに、顔くらい見せろよな」

耳元で少し苦笑いした彼の声が聞こえてくる。

そしてぺろりと毛布を少し捲られた。

顔だけが露わになる。

そこで彼女はまじまじと彼の顔を見せ付けられた。

あそこから6年経った、14歳の江戸川コナンの顔を。

大人に少し近づいた、また、あのころの幼さも残したその顔を。

彼はそつと自分の方へ手を伸ばした。

哀は思わず萎縮して目をきゅっと瞑った。

何もしねーよ、そう苦笑しながらも、その手は確実に

彼女の顎に伸びていく。

つーつと彼のすこしごつごつした3本の指が彼女の繊細な白い

顎の線をなぞっていく。

くすぐったい、なんていう不埒な考えはわかなかった。

ただ、首でもしめられるのだろうか・・・とは思っていた。

でも殺されても仕方ない。

いや、いつそ今すぐここで彼に殺された方が楽だったのかもしれない。

・・・しかしコナンはそれ以上何もすることはなく、彼女の

耳の下から反対側の耳の下まで指をなぞってから、深い息を吐いた。

「・・・やつぱりオメーだったんだな」

「・・・え？」

哀は思わず目を開けると、ほんの10センチしか間がないところに、
彼の顔があつた。彼女は思わず目を逸らした。

直視できなかったのだ。

「わりい。ちよつと疑ってたもんで・・・」

コナンはふつと苦笑した。

テノールとアルトの中間くらいのその声。

6年前とは明らかに成長しているその声。その体。

しかし、それはやはり偽りの体。

「・・・ごめんなさい・・・」

哀はぶるぶる震えながらそう言った。

「・・・私、あなたに・・・ひどいことを」

「ひどいこと・・・？」

コナンがちよつと怪訝そうに聞き返した。

「・・・手紙、見たでしょ？」

「・・・いや？」

短い沈黙が流れる。

「まさか、見てないの？」

哀は思わず目を丸くした。それから小さく苦笑した。

ああ、だからこの人はこんなに温和でいられるんだわ、と思った。

それだけ彼の顔は穏やかだった。

「捨てたのね」

「・・・いや、取ってあるよ。ただ、読んでねえ」

「どうして？」

哀は思わず尋ねた。尋ねずにはいられなかった。

彼は少し困ったように彼女を見てから、視線を逸らすと、

こう言った。

「・・・オメーがいなくなっただ、読む意味なんてねえと

思ったからさ」

「そう」

知らず知らずのうちに沈んだ声になっていた。

「でもまさかこうしてまたオメーに逢えるとは思っても

見なかったけどな」

彼はそう言っただ笑った。哀はそんな彼の顔をただ朦朧と眺めていた。

きっと、この人は嘘をついている。

心に嘘をついて、私に逢っている。

手紙を読まないのは、読む必要がないのは、私が許せないからだ。きつと、今でも私を憎んでいる。

そう思えば思うほど、顔を見るのが辛くなっていく。これ以上、自分を嫌いになつて欲しくはない。

もう、これ以上……。

「……帰つて」

哀は震える声でそう言った。

「え？」

戸惑う彼の顔。

「……お願いだから、帰つて……」

「哀くん……」

博士が戸惑った顔で何か言いかけたが、それをコナンが黙つて目で制した。博士は仕方なしに口をもごもごさせる。

「……ごめ……んなさい」

哀は俯いて、ただ毛布の端をぎゅつと握っていた。

コナンはその様子を黙つて見ていたが、はああつと深いため息をついた。

「……わかった。……悪かったな、疲れてるのに……。心配すんなつて、とつて食いやしねーよ。明日からしばらく出かけるから、その前にちよつとオメーの顔見たくなつちまつただけだからよ」

彼はそう笑つと、哀の頭をポンポンと叩いた。

まるで6年前と少しも変わらない表情で。

ずきり、と心が痛む。

哀は小さな声で、やめて……と呟いた。

お願いだから、もうこれ以上優しくしないで――

体を萎縮させつづける哀に、コナンと博士は困つたように顔を見合わせた。そして彼は口元に自嘲を含んだ笑みを浮かべて、その手を彼女の頭からの除けた。

「……じゃあ、俺はこれで帰るよ。……『また』な」

彼はそう言いながら再び病室のドアの出口に向かって歩き出す。

「し、新一」

あわてて博士は新一の後を追う。

ばたり、とドアの閉まる音。

哀は再び静かになった病室で一人残されて、縮こめていた体をようやく伸ばし、それから小さくため息をついた。しかしその表情は少しも安堵の色などなかった。

それどころか強い力で心を締め付けられるような痛みが彼女の中で生じていた。

6年前のあの冬の日。

あのときの彼の言葉、笑顔、つないだ手のぬくもり、そして自分の体を抱きしめた腕の力強さ。

全て忘れることができなかった。

何度もそれを振り切ろうとしたのに。

ねえ、どうしてあなたはあの日、あの場所にいたの？
ねえ、どうして私たちはあの日、逢ってしまったの？
ねえ、どうしてあなたはあの日、私を抱きしめたの？
ねえ、どうしてあなたはあの日、あの言葉を言ったの？
ねえ、どうして・・・

聞きたいことが山ほどあった。

夢の中で何度彼に尋ねただろう。

夢の中の2人は何年経ってもあのころのままで。

例えて言うなら、同じビデオテープを再生して

見ているかのごとく、そのシーンは微塵も変わることはなかった。

そう、始まりが同じなら、結末も同じ。

夢の中では彼はいつも何も答えてくれなかった。

ただ困ったように笑っていた。

それでも自分はしつこいくらいに同じことを問い詰める。
ねえ、どうして・・・？、と。

まるで駄々をこねつづける子供のように。

そしていつも朝、目覚めてから気づくのだ。

無性に哀しくなるのだ。

ああ、これは夢だったのだ、と。

もう彼と一生逢うことはないのだ、と。

それがその日、初めて頭の中で構成されたばかりの夢であるかのように。

そしてそれはきつと永遠に続く夢であると信じていた。
今日が来るまでは。

それなのに・・・。

今、見たことは明らかに現実。

確かに彼はここに存在し（い）た。

そしてそれは夢の中の彼とは明らかに変わっていた。

低い声で、大きい手で、大きくなった体で。

変わっていないのは、トレードマークの黒縁めがね、

そして優しい表情、その口調。

ただそれだけ。

いや、それすらもひょっとしたら、ただ自分が気づかないだけで、少しずつ変わっているのかもしれない。

しかしそれはあたりまえのことなのだ。

なぜならこれは夢ではないのだから。

彼はあのころの幼い少年のままではなく、そして

24歳の青年でもなく、14歳の、少年と青年の間を

歩き始めた現実の少年なのだから。

彼は確かにここに、現実に自分の目の前にいるのだから。

そしてそのことが自分を苦しめる。
逢いたくて仕方なかった相手。

でも、逢ってはいけなかった相手。
彼はずっと自分を恨んでいるのだ。

一生償えない罪を自分は犯してしまったのだ。

和解なんてありえない。

あのころには戻れない。

夢は夢で在り続ける方がよかったのかもしれない。

それでも・・・。

それでも、彼の姿を見て、偽りかもしれない笑顔を見て、
心のどこかが微かに華やいだように感じたのは、まだ自分が
彼に対して『女』でいるからなのだろうか――。

哀はそこまで考えてふう、と浅いため息をつく、

その細くしなやかな10本の指で顔を覆った。

そこで彼女は初めて自分の顔がまるで死人のようにひんやり
していることに気が付いた。

鏡を見れば、きつとひどい顔をしているだろう。

青白くて、やつれてて、きつとボロボロ。

「無様ね・・・」

哀は自嘲の笑みを浮かべて、ポツリと呟いた。

「何や、それで終わりか」

電話の向こうで、がっかりしたように大阪弁の彼が大きく
ため息をついた。

「それで終わりって、一体何を期待してたんだよ、オメーは」

阿笠邸、回廊のところで腰をおろし、江戸川コナンは

7年来の親友、そしてライバルでもある彼にげんなりした顔で
尋ねる。

服部平次、大阪府警本部捜査一課に配属された新米刑事だ。

去年1年はとある交番で働いていたが、彼の持ち前の飛び出た推理力とその好奇心を買われて、それに加えて、交番業務をほったらかしてまで事件に首を突っ込むのを同僚から迷惑がられていたということもあり、現在の部署にいたっている。「せつかく6年ぶりに逢ったんやろ、あのちっさい姉ちゃんともっと濃密でエロティックで・・・痛っ、和葉、何すんねや！」受話器の向こうで、彼が叫んでいる。

どうやら幼馴染で、今は彼の妻である服部（旧姓遠山）和葉に何かで殴られたらしい。それが一体何であるかが気になるが。

「あんた、中学生のコナンくん相手に何言ってるの!？」

ホンマこんな男に騙されたて思うと自分が情けのうなるわ!

仮にも大阪府警の刑事やないのっ!もっとしゃきつとしい、しゃきつと!」

遠くの方で、久しぶりに聞いた彼女の声が聞こえる。

コナンは思わず微笑んだ。

去年の蘭の結婚式以来逢っていない気がする。

「どアホ!いつ俺がおまえを騙したっちゅうんや。『アタシ、平次がおらんとあかんねん』言っただの誰やっちゅうねや。

・・・それにいまだきの中学生いうたらなあ・・・痛っ、またぶちよったな!？そんなんでぶつなや!

この男前な顔にあざができたかどうかどうすんねや!」

「どこが男前やっていうねや。それにそんな色黒い顔、どこにあざができて目立たなくてええやないの!それからこの際やから言わせてもらいますけど、平次が最初に言っただんやないの、

『和葉をこれから一生守ったる、だから今は逃げる』て」

「な、な、何やお・・・!?誰がいつそんなん言っただちゅうねや!？」

「6年前や!」

「アホ!そんな昔のこと覚えとるか!？」

痴話げんかが始まる。

いつもと変わらぬ痴話げんか。

どうやら組織と戦う前にそのようなやりとりが2人の間でなされていたらしい。コナンは思わず苦笑した。

しかしもうそろそろ付き合っていられない。

「じゃー、俺、切るから」

げんなりした声でコナンが受話器を置こうとすると、平次がちよ、ちよ、ちよお待った、とかなりあわてたような声で叫んだ。

「何だよ」

コナンはめんどくさそうに聞き返す。まあ、聞けや、と

平次は先ほどとは声のトーンを落として、低い声で笑うと、

「のお、工藤。今度は絶対離さんようにするんやぞ？大事にしたれよ？」

「・・・あん？」

唐突に言われたその言葉に、コナンは一瞬の短い間を開けて聞き返した。

「そのちっさいねーちゃんを、や。6年前、それに4年前のあの時と同じことをするんやないぞ、て言うておきたかっただけや」和葉に気づかれないように、小声で彼はぼそぼそと言った。

コナンは思わず苦笑する。

「何だよ、それ。6年前はあいつが勝手にここを出ただけで、4年前や今回とは全然関係ねえだろ」

「アホ。みいんな一緒や。6年前、工藤があおちっさいねーちゃんの異変に気づいていれば、今も工藤、あのねーちゃんはおまえの傍にいてたかもしれへんし、4年前に毛利のねーちゃんを止めれば、まだ工藤を待ちつつけてたかもしれへんやぞ？どっちも大切にせえへんかったから、あないなことになったんや。どっちにも逃げられてしもつたんや。そやから今度ばかりは・・・」

バー口、と彼は親友の言葉を小声で、しかし強い口調で遮った。

「俺は蘭を止めなかったことには後悔してねーぜ。あいつがこれ以上俺を覚えていて欲しくなかったから。あいつに

幸せになつて欲しかったから。もう、俺は・・・いや、工藤新一はここに存在し（い）ないんだから。あいつを止める必要はなかったんだよ」

「工藤・・・」

平次はかける言葉が見つからないのか、しばらく黙り込んだ。

コナンは思わず失笑する。それから真面目な顔になつて、ただ・・・と言いかけた。それから深いため息をつく。

「・・・ただ、灰原については、オメーの言う通りだと思つてゐる。俺があんとき、あいつの異変に気づいていれば、ってな」

——ごめんなさい・・・

6年前、自分が退院したあの日。

ちらちらと静かに霽雪が降つたあの日。

震える声で、彼女はその言葉を何度も呟いた。

それは彼女が、組織と戦い、そして重傷を負つた

彼に対しての罪悪感からつぶやいた言葉だと思つていた。

しかし、それだけではなかった。

それを自分は見抜けなかった。

見抜けないで、拳句、浮かれてた。

もしかしたら彼女を追ひ詰めたのは、

自分の科白だったかもしれない。

自分の行動だったのかもしれない。

・・・あの日、この手で抱きしめた彼女の体はとても冷たかつた。

「何や、工藤。おまえ、随分かわいくなつたやんか」

平次のその言葉に彼は現実に取り返された。

「え？」

「そやから随分自分素直になつたやないか、言つたんや、今」
彼に1度言い直されてようやくコナンは不機嫌そうな顔をし

てこう言葉を返した。

「・・・はあ？オメー俺のことバカにしてんのか」

しかし、平次は思いのほか嬉しそうに、

「ちやうちやう。ホンマに心の底から言う тоннねや。そやかておまえはこの6年の間、少しもあのちっさいねーちゃんの話に触れようとせえへんかったやないか。周りは周りでおまえに対して腫れもんに触らんようにでもしてるゆう感じやったし・・・。」

こっちがイライラしてたんや。それが今日になって自分からそのことについて電話したーゆうから、ホンマ驚いたんやで？」

「・・・ああ、それはこっちも驚いてるよ」

彼の言葉にコナンは思わず失笑すると、それからふっと

テーブルの上に置かれた江戸川コナン宛の封筒に目をやった。封は既に開けられている。

もちろん、今度こそ自分の手で。

そしてその隣には、何度も読み返した便箋が一枚。

そう、あれから既に3時間が経っていた。

コナンは思わずふう、とため息をついた。

「・・・まあ、それがホンマもんのおまえらしゅうて俺は

好きやけどなvvこの6年間おまえは抜け殻みたいなもんやったし」

「・・・そうだったか？」

きょんととして彼は聞き返した。

「何や、おまえ気づいてへんかったのか？呆れたやつちなあ」

本当に呆れた、というように、平次は大げさにため息をついて見せた。

そんな彼の様子に、何やの？と遠くで和葉が尋ねる声がする。

平次は電話の向こうであわてて弁解しているが、和葉は疑いを隠しきれずにいるらしい。

ホンマに電話の相手、コナンくん？という声が聞こえてきた。

それから、彼女が受話器を彼女が取り上げたらしく、

「もしもしー。あなた一体だれですのん？」

という受話器のすぐ向こうで、和葉のかわいらしくも間抜けな声が聞こえてきた。コナンは思わず失笑すると、彼女の電話相手を務めたのである。

もちろん、今までの服部平次の相手、24歳の工藤新一ではなく、14歳の江戸川コナンとして。

5 複雑な再会（後書き）

作者より：コナンちゃんと哀ちゃん、ようやく再会を果たすことができました。はー、長かった。

でもまだラブラブロードは遠いようで（笑）。

まあ、少しずつ少しずつ近づいてはいるようですが。

4年前に蘭ちゃんとコナンくん（＝新一）の間に何があったのか、それはいずれ少し話すことができましたらいいな、とは思います。

ですが、これ自体がコ哀の話なので、くどくならないように頑張りたいです。

あ、それと手紙の内容は・・・

次回、言えるかな、言えるかなっ・・・。

私自身、ちよつとどきどきです。

何せ内容がまだ全然考えてないので（笑）。

それから久しぶりに大阪弁、書きました。

ちよつと変と思っても気にしないでくださいね。

地元の言葉さえよくわからない人なので（泣）

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございます。ございました。

6 解かれた封印

——ねえ、・・・ねえ、お願いだから、行かないで。行っちゃだめ。あそこに一人で乗り込もうとするなんて危険すぎるわ。

——大丈夫だ、心配すんなって。俺一人じゃねえ。日本の警察もインターポールもFBIも、それに服部を含む世界中の名探偵がいるんだ。ま、何とかなるだろ。そりゃまあ俺一人で追い詰めたいのは山々だけだな・・・。

——でも、彼らは殺人のプロなのよ？いいえ、それどころか殺すことを楽しむ殺人鬼の集団。もし、万一あなた1人だけになったとしたら？全て死ぬことはなくても、もしあなたが他のみんなとはぐれたときに組織の人間と鉢合わせしたら、一体どうしようっていうの？あいつらにはあなたの正義なんてものは通用しないわ。あなたが手を下さなければ逆に殺られるのよ。

——・・・ああ、そうかもしれねーな。

——そうかも、って・・・。

——たぶんオメーが考えてるように、俺はそいつを殺すことはもちろんしねーし、それに殺られるつもりもねえ。けどな、灰原。

俺は希望を持てえんだ。もしかしたらおまえの言う、俺の『正義』ってやつが、あいつらに通用するかも知れねえつつ希望をな。

—— だめよ！彼らに何を期待しても無理ってことぐらい・・・

—— それでも・・・それでも信じたいんだよ、同じ人間としてな・・・ま、それでだめなら片っ端から

このパワーアップされた筋肉増強シユーズで何とかしねーとな。
時計型麻醉銃はとっておきのために残して。

—— 待つて、あなた正気？それじゃ死に行くようなものじゃない！
い！

—— そうじゃねえよ。・・・俺は死ぬなんてへまは絶対しない。
い。

—— バカ！何言ってるのよ！あなた、まだわからないの！？
組織がどんなに残酷で卑劣で・・・。

—— わかってるよ。だけど・・・俺は・・・

—— だめ！行かないで。行くなら私を殺してから行きなさい！
私はあなたが憎むべき組織の人間よ。いくら裏切ったとはいえ、
あなたをこんな姿にしたのは、多くの何も罪のない人を殺したのは、
この私なんだから。倒す価値のある人間・・・。

—— ちょ、何言ってるんだよ、オメー・・・。

—— 殺せないの？

—— あたりまえだろ？オメーに恨みなんて今はこれっ
ぽっちもねーんだから。それどころかオメーはもう・・・

—— だったら・・・！！ だったら、私の言うことを聞いて！
恨んでないんだったら、私を少しでも大切に思ってくれてるのなら、
もうこれ以上私を苦しめるのはやめて・・・。

—— え？

——・・・あなたに、あなたに死んでほしくないのよ。
もうこれ以上大切な人を失うのは嫌なの・・・。
ここで手を離したら、お姉ちゃんみたいに突然目の前から
消えてしまいそうで・・・怖いよ。

—— 灰原・・・。

—— あなたを・・・あなたを失いたくないの。

> B < 6 解かれた封印 > / B <

「・・・くん、コナンくん」

遠くの方でだれかが、誰かが自分の名前を呼んでいる。

・・・『自分』？

そもそも俺は一体誰なんだ？

いつから自分のことを『江戸川コナン』と認識した？

『工藤新一』から吹っ切れた？

『工藤新一』は死んだ、と思えるようになった？

蘭を『幼馴染』としか思えなくなった？

いつから、いつからあいつを——

「コナンくん・・・？」

今度ははつきり頭の中で聞こえた。

そこでようやく目が覚める。

群馬県警パトカーの助手席で寝ていた自分の顔を窓から心配そうに覗き込んでいたのは、群馬県警の山村刑事だった。

ここは群馬県警察署前の公園。

連日起きている連続通り魔殺人事件の協力を依頼されたのは3日前のことだった。米花駅から朝一の始発電車でやってきてから既に9時間経っていた。

前々から山村刑事にFAXで事件資料を送ってもらっていたし、警察署で詳しい説明も受けたので、大体のことは早々と解決した。ただ、凶器確定とアリバイ証明に時間がかかって、これほどまで時間が過ぎてしまったのだ。

「・・・どうしたのー？疲れちゃったのかい？」

「え、ああ、すみません・・・」

コナンはあわてて笑みを作る。

「いや、いいんだけどさ。最近ずっと仕事仕事だったからね。

昨日は久しぶりのオフだったんでしょ？・・・でもその様子じゃ全然眠れなかったようだねー」

山村刑事はくすくすと笑った。

いやみも何もない笑顔。ただ純粹におかしかったらしい。

警察官の仕事としては彼はあまり向いてはいないかもしれない。

しかしコナンは最近、この人柄を前よりは好きになり始めていた。子供っぽいというか、なんと言うか・・・憎めない存在。

まあ、それだけ自分も大人になったというだけなのかもしれないが。

「・・・お茶でも飲むかい？コーヒーの方がいいんだろうけど、あいにく切らしちゃってね」

彼は運転席に回ると、水筒から熱いお茶を注ぎ、コナンに手渡した。彼は軽く会釈してそれを受け取ると、一口喉に通した。

熱いほうじ茶が胸に染みる。

「今日はありがとねー・・・。いい旅館用意してるから、ゆっくり休んでいきなさいよ」

山村刑事の運転で、車はゆっくり動き出す。

「・・・いや、いいです。これからすぐに戻らなきゃいけないんで」
コナンがそう言ったとたん、動き始めたパトカーは突如急停止した。
「・・・うわっ!？」

その勢いで体は大きく前の方へつんのめる。

思わず眉を寄せて、一言文句をいおうと口を開きかけたコナンだが、先に声を上げたのは山村刑事だった。

「ええええっ？コナンくん一泊してかないの？僕、いろいろ

聞きたいことあったんだよ？お酒とか飲みながらもさー・・・。

あ、そうそう。お酒といえばね、最近いいお酒見つけたんだよ。

実はね、上司には内緒でトランクの中に隠してたりするんだよねー。
だからお願い、一泊してよおvvvv」

コナンは思わず苦笑した。

やっぱり生理的に受け付けないところも確かにまだ存在する。

「・・・いや、僕、まだ中学生ですし・・・」

心は成人だけど、と心の中で付け足しながら、彼は山村刑事の誘いをさらりと交わした。

「そんなこと言わないでさー・・・あれ？コナンくんまた寝てるの？
弱ったなあ・・・」

山村刑事は本当に困ったというような顔で彼を見ると、大きくため息を吐いて再び車を走らせた。

もちろんコナンは本当に寝ているわけではない。

狸寝入りをしてその場をやり過ごすことにしたのだ。

そうして彼はこっそり薄目を開け、山村刑事の様子を伺ってから再び目を瞑ると、先ほどまで見ていた夢の続きを考えていた。

そう、あれは確かに夢だった。

けれど実際にあったこと。

6年前、組織が壊滅する前日のこと。

組織のアジトに乗り込む前日、灰原哀は確かに自分の前で泣いた。

彼女の涙を見たのは、出会った当初に見たあの日以来だった。そう、自分が彼女の涙を見たのはたった2回だけ。あの日は組織に操られ、拳銃殺されてしまった姉を思って。そして6年前は、組織に行く自分を思っただけ。それはただ自分のために死んでいった姉と重ねているだけだったかもしれない。それでも、彼女の涙を見たとき、彼女の心からの叫びを聞いたとき、とても……。とても、嬉しかった。

「コナンくん、駅に着いたよ」

山村刑事のちよつと甘くしゃがれたその声に彼は再び起こされる。狸寝入りだったつもりが、どうやら本当に眠っていたらしい。

コナンは大きく伸びをすると体を起こした。

「予約しておいた部屋は僕が泊まっておくから、君は気にしないでいいからね？」

彼は名残惜しそうな顔をして、それでも笑顔を無理やり作っている。キャンセルすればいいのに、とは思ったが、コナンは口には出さなかった。

助手席を降りると、山村刑事は既にコナンの旅行用かばんを後部座席から出し終えていて、すぐに彼に手渡してくれる。

「じゃあねー……。何かあったらまた連絡するねー」

「……。何かないことを期待します」

山村刑事は自動改札口まで一緒についてきてくれた。

それでもコナンが階段に上り、彼の姿が見えなくなるまでしっかりと見送ろうとしているようだった。

コナンは一度振り返り、そんな彼の姿に思わず微笑すると、コートのポケットの中の薄い封筒を指でなぞり、再び階段を上っていった。

阿笠邸。

灰原哀は朦朧^{ぼんやり}とした顔で、地下室にたたずんでいた。

部屋の配置はそのままだった。しかし、どこか違う。

ここには、生活の匂いが感じられた。

自分が知らないこの空白の6年の間に、だれか別の人間がここで暮らしていた。

一体誰が……？

……博士だろうか。

いや、それはない、と彼女は自分の考えをすぐに打ち消した。
大雑把な彼の性格。

いつも物が雑駁に置かれていて、彼女が片付けなかったら
延々と積み上げられていくというような状態。

しかし、この部屋は違った。

こんな整理整頓された部屋に彼がいられるわけがない。

というより、こんな綺麗にできるわけがない。

……とはいっても、この6年で彼は変わってしまった
だけなのかもしれないが。

そう思いながらも哀は何気なく、本棚をちらりと見た。

そして次の瞬間、彼女は思わず目の動きはそこで活動を停止
してしまった。

まるで女怪物メデューサに石にされてしまったかのように。

そこにあるのは、世界各国の推理小説、事件ファイル、六法全書、
宗教関連の本、歴史書……

この部屋に暮らしているであろう人物が彼女の脳裏の中に瞬時に
浮かんでくる。

おそらく、今、この地下室を使っている人物は――

突然自分のすぐ後ろで、かたりと物音がして、哀はびくりと体を
固まらせると、おそろおそろ振り返った。そこにいるのは博士。

彼女の姿を認めると、彼はほっとしたように微笑んだ。

「哀くん、そんなところにいたのか。悪いのう、今、新一が使ってて・・・。帰ってきたら移動してもらってから」

奇しくも何気なく言った彼のその言葉が彼女の推測を確信に変えてしまう。

『新一』

彼女の知っている限り、彼が呼ぶ『新一』なる人物は一人しかいない。

哀は桃色の唇をわななかせながら、

「・・・待つて、博士。・・・何で、工藤くんがここに？」

「え？・・・ああ。4年前にな、毛利探偵事務所を出たんじゃよ。」

そして名目上、わしが全ての面倒を見るということになったんじゃ」

「・・・どうして？」

哀は震えた声で聞き返した。

どうして、彼がここに来なくちゃいけないの？

毛利探偵事務所は、蘭さんのことはどうなったの？

彼はどういう気持ちでここにやって来たの？

・・・また、私の所為なの？

そんな思いが彼女の中で渦巻いていた。

苦しい。

苦しくて、息が詰まりそうになる。

ここにいと・・・

眩暈が・・・

「・・・哀くん？」

心配そうに博士が彼女の体を支えた。

ふらり、と彼女の細い体がよろけたのだった。

「・・・大丈夫、ちよつと眩暈がしたただけだから・・・」

「で、でも・・・」

そのとき、

p r r r r p r r r r r . . .

という、電話の音が鳴った。1階の居間である。

「・・・ほら、行きなさい。大切な電話だったらどうするの?」

「わしは哀くんの方が・・・」

「いいから。私も後から行くから」

哀がそう言つと、彼は仕方なさそうに地下室を出て、ゆっくりと階段を上っていった。

哀はそんな彼の後姿を見て深くため息をつくと、哀しそうに地下室を見渡し、それから逃げるようにしてその部屋を後にしたのだった。

「・・・ああ。だから、絶対あいつを一人にすんなよ。俺がそっちへ戻るまで、目を離すんじゃねーぞ。うん、じゃあすぐ帰るから・・・それまでよろしくな」

東京行きのホーム。

江戸川コナンは携帯電話を切ると、ため息をついて停車中の電車に乗り込んだ。

今日は平日の午後だけあつて、人は少ない。

ドア付近に立っている数名の人を除けば、あたりの人はみんなのんびりとした顔で座っている。

彼はそんな乗客の間をすり抜け、空いている座席にゆっくりと座ると、コートのポケットから再び封筒を取り出した。

昨日から何度も読み返した手紙。

それでも再び封筒から便箋を取り出し、深いため息を一度吐くと、切なそうな表情でそれに目を通し始めた。

『江戸川コナン様

工藤君、あなたがこれを読んだときは、私はもうあなたの知らない街にいるでしょうね。

先に謝つとくわね。ごめんなさい。

いつかあなたは言つたわね、運命から逃げるな、って。

あのとき、私、とてもうれしかったのよ。

だから私も自分の運命と向き合うことに決めた。

でも、もうその約束は果たせないみたい。

ううん、それは少し違うわね。

約束は『果たせなかった』と言うべきかしら。

現に私は既にあなたたちの前から姿を消してしまったのだから。

ら。

一体どうして、って思うでしょうね。

それはね、あなたがこれから一生『工藤新一』として

ではなく、『江戸川コナン』としての道を歩むしか

なくなってしまったことを、告げるのが怖かったから。

あなたが組織から奪取したフロツピー、あれを見て解毒剤は完成したのよ。

でもそれをあなたにあげることはできなかった。

だってその解毒剤もある意味、人を殺す『毒薬』だったんだ

から。

そう、考えてみればあたりまえかもしれないわね。

A P T X 4 8 6 9 で幼児化になる方が珍しかったんだもの。

ジンが投与したほとんどの人たちが私の所為で死んだ。

その解毒剤だって、危険でないはずがない。

実は一昨日、博士に隠れて久々に動物実験をしたわ。

A P T X 4 8 6 9 を大量のマウスに投与するの。

もちろん、多くのマウスは死んでいった。

幼児化するマウスを10匹集めるだけでも、それは

膨大なマウスが死んでいったわ。頭がおかしくなって

しまつくらい。あれほど大量のマウスが、目の前で苦しんで

死んでいく様子を見たら、とても気分が悪くなつて

昨日は一日中食欲も出なかったわ。

組織にいたころはなんでもなかったのにね。

でもね、それでもやるしかなかった。

それでその後、その幼児化したマウスに解毒剤を与えてみた

の。

幼児化したマウスは、一匹残らず死んでいったわ。

——つまり、そういうこと。

そのマウスがたまたま全部弱っていただけだったのかもしれない。

ない。

もしかしたら、実験材料が、幼児化したマウスの量が

少なかったのかもしれない。もっと大量のマウスを使えば、

1匹か2匹は元のマウスに戻れたのかもしれない。

副作用も何もなく、生きられたのかもしれない。

だけど私はあなたをあのマウスたちみたいにしたくなかった。

生きるか死ぬかわからない、何パーセントにも満たないような

確率にあなたを賭けたくなかった。

きつとあなたは私の考えをすぐに否定してこう言うでしょう

ね。

「バーク、残りの数パーセントがあるじゃねーか。

ひょっとしたらそれは確実にゼロに近い数値かも知れねーけ

ど、

でも、ゼロじゃねえかもしれないだぜ？」って。

わかってる。

でも、あなたにこれを渡すのはやっぱり無理だわ。

本当にごめんなさい。

あなたの期待をこんな形で踏みにじるようなことをして。

もうあなたの前に現れることもないでしょうね。

この1年と少しの間、あなたと出会えて、あなたたちと

一緒に過ごすことができて、とても楽しかったわ。
ありがとう。そして、さようなら。

追伸。博士と子供たちのこと、よろしくね。

灰原 哀

彼は読み終わると、遣る瀬無い顔をして大きくため息を吐いた。
「・・・つたく。まさかこんなことのために6年も姿くらましてた
なんてな」

ぼそりと呟くと、その視線を窓の外に目をやる。

発車を知らせるベルの音とともに、動き出す電車。

景色がゆっくりと変わっていく。

彼はそれをぼんやり眺めながら、手にしていたその便箋を
大切そうに再びコートのポケットの中にしまいこんだ。

——あなたを・・・あなたを失いたくないの。

それは夢の中の科白。

しかし、それは6年前の記憶。

この6年の間、すっかり忘れていた。

いや、無意識に彼女のことを考えないようにしていた。

それをこんなに明瞭と夢の中に再現される

日がくるなんて、思ってもみなかった。

それはきつと、昨日の夜、自分と同じ14歳の彼女に逢ったから。

1週間前、光彦が、歩美が彼女に逢ったその日から彼の心は
少しずつ変化していた。意識下の奥深く眠っていた心が
目を覚まし、ゆっくりと浮上していた。

そして昨日彼女を想う光彦と博士の話にあれほど頑なだった

自分の心が動かされ、彼女に逢おうと思った。

灰原じゃなきゃいい。いや、灰原であってほしい。

病院に向かう道を、博士の後ろをついて歩きながら、ずっと思っていた。

逢うことを決意しながらも、心がかたことと音を立てて揺れていた。

まだ迷っていた。その扉を開けるまでは。

しかし彼女に逢ったとたん、自分の迷いが一気に吹っ切れた。

あの白い肌、人を見透かしたような大きな瞳、緋色の髪。

思い浮かべていたそれ以上の輝きを持って、彼女はそこにいた。きっとそれが自分のあの記憶を覚ましてくれた封印の鍵。

素直じゃないと思っていた彼女が、精一杯自分にぶつけてくれた気持ち。

大切にしようと思っていた当時の感情。

全て彼の脳裏に鮮明にのみがえっていた。

彼女に逢ったことで、迷いをふっ切るだけじゃない、

当時の失われた感情も思い出すことができた。

素直になれた。

そう、今、自分は――。

「あのときの言葉、そっくりオメーに返すよ、灰原」

コナンは虚空を見つめ、ポツリと呟いた。

隣にいた中年の女性が、不審そうに彼の顔を覗き込んだが、それすらも気づかずにはいた。

彼を乗せた電車は少しずつスピードを上げながら、確実に東京へ、米花町へ進んでいく……。

6 解かれた封印（後書き）

作者より：ああ、ようやく手紙の内容が・・・。

こつぶは内心ほっとしてます。ま、実にありきたりな内容ですが細かいことは気にしないように（笑）。

ちなみに最初の方でコナンくんの夢の内容として出てきた2人の会話、結構お気に入りです。

おわかりのように、これは4話のサブタイトル前の哀ちゃんの回想と連結してます。ちょこつと矛盾が生じますが、今回のセリフ、かなりこつぶ的には気に入っちゃったので、あえてほっとくことにしましたっ（笑）！だって好きなんだものvv
それではここまでお読みいただきありがとうございます

た。

7 揺れる心

時刻は夕方5時を少し回っていた。

阿笠邸宅前の公道。

そこにいるのは、帝丹中学の詰襟の制服を着た少年2人と、セーラー服の少女。

円谷光彦、小島元太、吉田歩美の3人である。

彼らはそれぞれ半ば緊張した面持ちでそこにたたずんでいた。

光彦は昨日の夜に博士からの電話で、哀が気が付いたこと、

そして明日の昼過ぎには退院できることを聞いた。

それを今日学校で歩美と元太に告げると、急遽即日、彼女を見舞うという次第になったわけである。

「いいですね、元太君。絶対灰原さんを不安がらせること、言っではいけませんよ」

円谷光彦は幼馴染の小島元太に眉をしかめて忠告する。

「おう、まかせとけ！」

「それと歩美ちゃん。君はまだ病み上がりなんですから

無理しないでくださいね」

「あたし、病気なんて……。あ、哀ちゃんを忘れてたってことね。大丈夫！心配しないで」

歩美は嬉しそうに言った。

最初のころはまだ少し欠けていた記憶もあつたようだが、

今では光彦自身すっかり忘れていた哀のほんの些細な動作や言動まで歩美は覚えているようだった。

そんな彼女に光彦はふっと優しく微笑むと、チャイムを押した。

『……はい……』

少しの間の後、インターホンの向こうで聞こえたのは思いもかけず

少女自身の声。

消え入るようなどこか生気のないその声に、光彦は思わず身を固まらせた。

昨日よりさらに悪化させているのではないかと、彼が思わず不安になったほどに、彼女の声は弱弱しかった。

「・・・哀ちゃんだ」

信じられない、という表情でポツリと呟く歩美。

彼女の唇は微かに震えていた。

『え？・・・まさか、・・・吉田さん？』

その言葉を受けて、短い間の後、インターホンの向こうで少女は聞き返す。

その口調から、彼女もさすがに驚いているのが感じ取れた。

『・・・ちよつと、ちよつと待ってなさい。すぐ行くから』

「うん！」

歩美はとびつきりの笑顔でインターホンに向かって頷いた。

そんな彼女たちの様子に、光彦と元太は思わず顔を見合わせ、お互い笑みを浮かべたのだった。

阿笠邸宅、居間。

「まさかあなたたちがここに来てくれるなんて、思いもしなかったわ」

博士が用意してくれたホットミルクと、光彦たちが買ってきたばかりのアツアツのたい焼きをお盆の上に乗せて台所から

やってくると、彼女はちよつとはにかんだような笑みを見せた。

「だって・・・。だって少しでも早く哀ちゃんに逢いたかったんだもん」

一足先にソファに座っていた歩美は、すねたように頬をぷうつと膨らませた。

こんな歩美を見たのは、光彦にとって久しぶりのことだった。年上のお姉さんに甘えたような、どこか媚びたような彼女の表情。

さつきなんて哀が玄関のドアを開けた瞬間に、彼女はただ哀に抱きつき、大泣きしたのだ。

——バカバカ、何で歩美を追っていつちゃったのよ！

あんなに表情を露わにした彼女を見たのは、いつたいいつのことだっただろうか。

記憶をなくした後の彼女はそれまでの彼女とどこか違っていた。それが何かと聞かれたら簡単に答えられることではなかったけれど。

ではこんな彼女を見たのは6年ぶりだっただろうか。

・・・いや、違う。もっと最近のこと。

そうだ、自分はこんな彼女を最近見たばかりだったではないか。ちょうど1週間前に。

彼女が、そして自分が校庭で灰原哀を見たあの瞬間に。そしてそのことがきつと吉田歩美が『彼女らしさ』を取り戻した瞬間だったのだ。

それなら・・・。

それならあの人はいつ『自分らしさ』を取り戻すことができるのだろうか。

あのころの『彼』に戻れるのだろうか。

「・・・円谷君？どうしたの」

哀の言葉に、光彦ははっと我に返った。

「いえ・・・。なんでもないです」

彼はあわてて笑顔を作ってみせる。

これ以上彼女に心配を増やしたくなかったのだ。

それだけ彼女の顔は青白く、まるで蠟人形のようなだった。美しい、蠟人形。

しかし生気があまり感じられなくて。

彼女の周りを陽炎のようなものがゆれているような
気持ちさえした。

「・・・ちよつと風に当たってきます」

「何だ、光彦、便所か？」

「違いますよ！」

彼はむきになつて乱暴に言い返すと、席を立ち、ゆつくりと
居間のドアに向かつて歩き出した。

「・・・たくよー、光彦の奴がオメーが入院してたこと、
隠してやがつてよー・・・入院してるって知ってたら俺、
一番に飛んでいってやったのによー」

相変わらずの野太い声で哀に話し掛ける元太の声をバツクに
聞きながら、彼はほんの何気ない気持ちで居間のドアを
開ける。

そしてそこで彼は目にする。

玄関のドアを開け、外の様子を何度も何度も確かめる

阿笠博士の様子を。

どうしたんですか、そう言おうと口をすばめた瞬間、
博士は彼の気配に気づいたのか、ぎくり、と体を硬くして
それから恐る恐る振り返った。

「・・・何じゃ、光彦くんか」

ほつとしたように彼がぼそり、と呟いた。

心からほつとしたような彼の声。

「誰かを待ってるんですか？」

光彦の言葉を受けて、彼は困ったようにふつと笑って頷く。

・・・まさか。

彼の脳裏に思い当たる人物が浮かんでくる。

「・・・コナンくん、帰ってくるんですか？」

「ああ。・・・『灰原から目を離すな』じゃと。哀くんには『しばらく』家を開けると言っておいたが、本当なら

『今日中』には帰ってこれる仕事だったそうじゃ。どうやらコナンは哀くんを足止めさせたかったようじゃな」

その言葉に、光彦は安堵の息を吐いた。

博士の表情も思わずほころぶ。

「・・・心配してくれてたんじゃな」

はい、と光彦は頷いた。博士は嬉しそうに目を細めながら、ようやく彼の方に向き直った。

「昨日あの後、コナンと見舞いに行ったんじゃ。あれでようやくコナンは彼なりの答えを出したんじゃろうな。とてもすっきりとした顔をしていたよ」

「・・・そうですか」

光彦の心は次第に楽になっていた。

もう、大丈夫。

彼はそう思っていた。

あんな辛そうな彼女の心を楽にすることは自分では到底無理なこと。彼女の心の中にいるのは、彼女のその澄んだ瞳に映っているのは他ならぬ江戸川コナンただ一人なのだから。

「・・・で？どうしてそんな大事ことを灰原さんに言っただげないんですか？」

「え？」

博士はちよつと驚いたように光彦を見てから、慌てたように笑った。その反応は彼にとって思いもかけないものだった。

「・・・まだ何か隠してるんですか？」

自然と彼の口調が強くなっていた。責めるように博士を睨み据える。

「それは・・・」

博士は少々言いにくそうに一度視線を逸らしたが、ちろりと横目で光彦の真摯な表情を見ると、諦めたようにため息をつく。

「哀くんが……。哀くんが姿を消した理由は彼にあるんじゃない」
「……。え……。コナンくん、ですか」

光彦はその言葉を受けて、思わず聞き返した。
しかしその言葉とは裏腹に、実は彼には思い当たる節があった。

よみがえる記憶の中に映るもの。それは――

短い間の後、確信を持った顔で彼はその言葉を口にする。

「手紙、ですね。彼の持っていたあの薄っぺらな」

博士は何故それを、というような驚きの表情で彼を見つめた。

「6年前のあの日のこと。あなたがそうであるように、僕も忘れることはできなかった。それどころか、彼女と再会した今では、より鮮明にあの日のことが目に浮かんでくるんです」

6年前のあの日のこと。

灰原哀が去った地下室で、江戸川コナンが握り締めていたもの。
茶色の封筒。

彼宛につづられた手紙。
特別な物。

それが恋文ではないか、と疑ったときもあった。
でもそれは彼の態度でわかった。

彼は無理に彼女のことを忘れたがっていた。

彼女の名前すら口にしようとしなかった。

恋文であるはずがない。

きつと自分たちが知らない大切なことが書かれているはずだ。
まさかそれを読ませてくれだなんて言えるわけがなかったが、
ずっと自分の胸の中にあったことは確かだった。

「何が書かれていたかわしにはわからんが、そこに全ての

事実が書かれていたのは確かじゃよ。おそらく哀くんはコナンくんに関わっている感じがして、いたんじゃないかのう」博士は寂しそうにそう呟いた。

「・・・そしてコナンくんは今になってそれを許した・・・」

「いや、彼は・・・」

彼は何か言いかけたが、考え直したようにあわててごほん、と一つ咳払いをした。

「とにかく哀くんはコナンよりも厚い氷の殻で身を固めてしまっているんじゃない。彼女が自分の意志で消えたあの日からずっと。じゃあ彼女にコナンが今日中に帰ってくると知れたらまずい。もしかしたら哀くんはコナンがあの子の周りの氷を溶かすまでに逃げ出してしまいかもしれないじゃろ。

『自責の念』とやらで」

「そう・・・ですね」

「・・・切ないのう」

ため息と一緒に出した博士のその言葉に、光彦は思わず彼の顔をうかがった。博士の虚空を見つめるその瞳は哀しく揺れていた。

「こんなに哀くんのことを思っている、こんな傍にいても、わしの力じゃ何もできなんて、歯がゆいのう」

「・・・僕も同じ気持ちです」

光彦はそう言っただけで哀しそうに笑った。

そのとき、がちゃり、と居間のドアが開くと、歩美が顔を覗かせた。

「光彦君、何やってるの？元太くんが光彦くんのたい焼き

食べようとしてるよ。早く来ないと食べられちゃうんだから！」

「え、あ、はい！」

光彦は思わず大声で言っただけで、居間に向かい歩きかけると、思い直したように踵を返した。

博士が物を言いたそうな自分の顔を見つめている。

そんな彼の表情に光彦は思わず笑みを作ると、

「大丈夫、コナンくんがすぐに何とかしてくれますよ。」

それまでの辛抱です。彼を信じて、待っていきましょう」

と言った。そんな彼の様子に博士も思わず口元を綻ばせると、まあ、それはそれで複雑なんじゃが、とほんの小さな声で呟いた。

「え？」

光彦の怪訝そうなその顔に、聞こえてしまったのか、という顔で決まり悪そうに笑う。

「まあ一種の・・・一人娘を持つ父親の嫉妬みたいなもんじゃよ。まさかこのわしがコナンをそんな風に見てしまうとは思わなかったがの。」

彼の方が、哀くんより付き合いが長いというのに」

光彦はその言葉に思わず微笑し、それから再び居間に向かって歩き出した。

鼻先を掠めたい焼きの甘く優しい匂いが、彼の歩くスピードを少しずつ、少しずつ早めていた。

阿笠邸 寝室。

灰原哀はベッドに身を横たわらせてぼんやりその白い天井を見つめていた。

あのころと変わらないベッドが2つ、そこに置いてあった。地下室にあったのは簡素な鉄パイプ式のベッドだったが、寝室にあるのはあのころと少しも変わらない、しっかりしたシングルベッド。

そのベッドは彼女が使っていた6年前のままで、ふかふかで温かい匂いがして、とても懐かしくて落ち着いた。

時刻はやつと夜の7時になったばかりだった。

彼女は博士にまだ体調が優れないからという理由で、子供たちが帰ってすぐに無理やり寝かしつけられたのだ。今日中にどこか消えるはずだったのだけれど・・・。

哀は思わず自嘲の笑みを浮かべると、そっと目を閉じた。

——蘭くんは去年の夏、高校時代からの同級生と結婚したよ。

子供たちが来る少し前、博士が困った顔をして自分に教えてくれた。しかしいくらその理由を尋ねても彼は他人様のことじゃから、と口を濁して、それ以上何も教えてくれなかった。それでもまだこの場所に自分を留めているのは、彼らが自分に見せてくれたたくさんの笑顔だったのかもしれない。

久しぶりに見た子供たちの表情。

あのころとは外見はだいぶ変わって見えただけど、内面は少しも変わっていなかった。

一緒にいたい、と純粹に思った。
でも。

でもきつともうすぐ限界が来る。

ここにずっといればあの人はいつか戻ってくる。
きつと、もうすぐ。ここ2、3日の間に。

そしていつかは彼女とも逢ってしまう。

そんなところにいつまでもいられるわけがない。

それにしても一体どうしてこんなことになったのだろう。

彼女はもうあの人を待っていない。

それどころか彼女は毎日毎日、違う人の帰りを待っている。

一日の初めに家を出て、夕方になれば必ず帰ってくる人。

きつと毎回、彼女はとびきりの笑顔でその人物を

「おかえりなさい」と迎えるのだろう。

そして夜になればその人物と口づけをし、また、
重なり合っているのだろう。

そのことに彼はどう思っていたのだろう。

今まで自分の帰りを待っていた、両思いだと思っていた
彼女の突然の結婚に、何故裏切った、と罵るのだろうか。

いや、彼はそんなことをしない。

そんなことはとうに気づいていたではないか。

きつと彼は笑って彼女の結婚を祝っていたのだろう。

それがどんな心中ではあったか、自分には図り知れないけれど。

・・・なぜなら。

哀はそこまで考えて思わず目を瞑ったまま、ぎゅっと拳を握り締めた。

いつかのあの言葉が彼女の頭の中で木霊していた。

——もう、あいつの涙は見たかねーんだよ。あいつの中から俺の存在が消え失せることになってもな・・・

そう、いつか彼が自分の前で、幼馴染の彼女を想い、呟いた言葉。いつも強気な彼が、彼女だけのために見せた表情。

見るからに痛々しく、哀しい表情。

彼のそんな表情はもう見たくなくて、そんな言葉は聞きたくなくて、彼のために、何よりも自分のために絶対元の姿に戻してみせる、と決意した。

それなのに結局彼を元に戻すことなどできなかった。

彼の大切な人までも、自分の所為で失わせてしまった。

またしても自分の罪は増えていく一方だった。

結局何も彼のためにできることはなかった。

それどころか自分の撒いた種の後始末すらできていなかったのだ。

ばかみたい・・・

思いもかけず出た一粒の涙がポロリと頬を伝って枕を湿らす。

そのとき、そつと誰かに涙を拭われた指の感触を感じた。

かさかさえしてないが、少しごつごつした太い指の感触。

哀はどきり、と胸が波打つを感じていた。

目を開けられずに、それどころかますます閉じる目に力がこもる。

「・・・泣いてたのか」

ため息交じりにつぶやく誰かの声。

哀はそこではつと身を固まらせた。

この声は聞き覚えがある。

相変わらずのテノールとアルトの中間の声。

昨日聞いたばかりの声。

だけどどこか懐かしいその声。

「悪かったな。オメーがどんなに苦しんでたか気づいてやれねえで」

その声の人物はぼそり、と聞こえるか聞こえない声で呟いた。

ベッドマットの右端の部分が少し沈んだ。

哀はそれが誰だかわかっていた。

わかっていて、目を開けるのが怖かった。

そつと彼女の髪をそつと撫で上げる感触。

あのときとは違う、大きなごつごつとしたその手で。

しかし優しいその手の感触はそのまま。

哀はその手が彼女の頭から除けられるまで、しばらく身を固まらせていた。

その大きな手が除けられたのはしばらく経つてのこと。

ゆっくりとマットの右端の沈んでいた部分が元に戻っていく。

哀ははつとして一瞬目を開けた。

もう既に彼は彼女の前にはいなかった。

「おやすみ、灰原」

遠くで聞こえる彼の声。

優しく、少し切ない彼の声。

それから静かにドアが閉まる音がした。

彼は行ってしまった。

その瞬間、彼女はがばつと体を起こして、誰もいなくなったそのドアを食い入るように見つめた。

「く、どう・・・く・・・」

すでにそこにいない彼の名前を呼ぶ。

唇が震えて声にならない。

知らず知らずのうちに再び彼女の瞳から

大粒の涙が流れていた。

何故彼がここにいるのか、そんなことはどうでもよかった。

ただ、もっともつと彼の声が聞きたかった。

傍にいて欲しかった。触れて欲しかった。

でも、そんな権利は自分にはない。

それは自分が決して抱いていけない感情。

そう思えば思うほど、とりとめのない気持ちがあふれてくる。

苦しくて、切なくて。

どうしようもない、この気持ち。

狂おしいほどの、この気持ち。

彼が・・・。

彼が、愛おしかった。

7 揺れる心（後書き）

作者より…こつぶです。いやあ、実にありきたりだ（笑）

いつか長編でもこんなシーンを書いた覚えが・

・・。

・・・平和コンビだったけど。

ふー。でもコ哀でこういうシーンを書くと、

無性に

彼にちゅーをさせたくなるんですよね。

哀ちゃんの髪の毛とかでもいいんで。

だけど無理でした。今の私にはここまでで

精一杯です（笑）

お楽しみは最後の最後までとつときましよう

V
V
V

目指せ、ちゅー作家（↑意味不明）！

そ、それではここまでお読みいただきまして

ありがとうございます。

8 彼女への想い

阿笠邸宅。

江戸川コナンは2階の寝室のドアの前に胡座をかき、デスクライトで手元を照らし、ただぼんやりと推理小説を読んでいた。

心ここにあらずといった感じだろうか。

彼の様子は目線は本にあれど、文章を読んでいるというよりも、ただページを眺めている、と言ったように思えた。強いて言えば、彼の目は焦点が合っていないのだ。

ただ薄弱に、ただ朦朧と、彼はそれを見つめていた。

そんな様子だったから、小説の読み具合は一向に進むわけがなく、彼はようやくそんな自分に気づいたとき、思わず苦笑した。

それから一度大きく伸びをすると、再びその視線を文字に向けたのである――。

時刻は深夜2時をまわっていた。

辺りは寂々とし、ここには自分以外誰もいないようにも思えた。

しかし1階には博士がいて、そしてそのドアの向こうには、彼女がいる。

この6年、自分の前から、皆の前から行方を晦ましつづけていた人物。

自分の新たな未来を作り出した人物。

そして自分が今、誰よりも大切にしたい人物。

決してもうこの手から離したくない人物。

――灰原哀が、そこにいる。

8 彼女への想い

コトリ、という幽かな物音を耳にし、江戸川コナンはその蒼白い顔をそっと上げた。

半螺旋の階段の脇から見えるのは、大きな白い影。

場合によつては雪男と勘違いするかもしれない、大きな影。

しかし彼はその影に動じることなく、逆に思わずその口元を緩ませた。

そこにいるのは博士だ。

白地で金色のイチヨウのマークのパジャマが、仄暗い闇からそこだけ浮き出ているかのようにもみえる。

彼の初恋の女性であり、この7年間、友達以上恋人未満という微妙な仲をずっと保ったままの女性でもあるフサエさんが、彼の誕生日にプレゼントしてくれたフサエブランドのパジャマである。

コナンはふつと笑って、彼に小声で声をかけた。

「何だ、まだ起きてたのか？・・・早く寝ねえと体に毒だぞ？」

博士は思わず眉をひそめて、闇の中から顔を出すと、抗議した。

「バカもん、わしを年寄り扱いするでないっ。それでも昔と少しも・

・・・

ごとりと、と部屋の中で音がして、コナンはしつ、と口元に指をあてがった。

博士はあわてて自分の口を押さえる。

それから軽くノックをすると、そつと寝室のドアノブをまわした。

少しの隙間から覗き込む2つの影。

開けたとたんに彼の目に映ったのは窓だった。

少し開いた窓からは冷たい空気が入り込み、カーテンをそよそよと揺らしていた。まだ3月にもなっていないというのに。

嫌な予感が2人の脳裏に浮かび、コナンと博士は思わず目を見合わせた。

そしてほぼ同時にベッドに目が行く。

・・・いる。

何も変わりがない。

相変わらずすやすやと寝ているのが、遠目で見てもわかる。穏やかな表情をして、すやすやと静かな寝息を立てている。

コナンは思わずほっと安堵のため息をついた。

そしてまた元通りにドアノブを引こうとした、その時。

ごとり、とまたどこかで音がして、彼らはその音の方向を反射的に視線をやる。

次の瞬間、コナンの口から出てきた言葉は思いもかけず

気の抜けた言葉だった。

「なんだ、オメーかよ・・・」

いつのまに入り込んでいたのだろう。ベッドの下から顔を出すのは黒猫1匹。博士がずいぶん前からえさを与えるようになったメスの野良猫。どうやら原因は『彼女』らしい。

コナンと博士は思わず顔を見合わせて苦笑いを浮かべ、その黒猫の柔らかな体を抱きあげると、部屋を後にした。

阿笠邸 居間。

2人はソファに腰掛け、お互いしばらく何も話そうとはしなかった。コナンは手元にあるブラックコーヒーの入ったマグカップをただ口を真一文字にしたままで見つめ、一方、博士は時折2階に視線をやっては疲れた表情で小さいため息をついていた。

そんな彼の様子に、コナンは思わず心配そうな表情をする。

「ホントに・・・俺が起きてるから、博士は寝てていいんだぜ？」
テーブルの下で温かいミルクをぴちゃぴちゃと音を立て、器用に飲んでいる黒猫の頭を指尻で優しく撫でながら、コナンはいつになく優しい口調で言った。博士はその言葉に、ふっと彼に視線を向け、力なく笑みを浮かべる。

「・・・いや、眠れんのじゃよ。朝、起きたら哀くんがまたいなくなっているような気がして・・・6年前のあの日のように」その言葉に、コナンは思わず言葉をなくして俯いた。

そして、また『6年前』か、と呟いた。

彼らの中で6年前の出来事は心に深い傷を残していたようだった。

博士の中で、歩美の中で、光彦の中で、元太の中で、そして・・・。

「・・・だがそれは新一、君も同じなんじゃろ？」

唐突に出たその言葉にコナンは一瞬驚いたような顔をして、

博士を見た。それから、苦笑いを浮かべて、ああ、とつぶやく。

「・・・俺は、あいつをもう手放したくねえ。一生な」

「一生、か」

博士はふふつと小さく含み笑いをした。

「それは哀くんへのプロポーズの言葉と捕らえてよいのかのう？」と訊いた。

「・・・はあ？」

数秒の間を開けて、コナンは怪訝そうに博士を見つめる。

博士は、冗談じゃよ、と口の中で呟いてみせた。それから寂しそうにため息をつく。そんな彼の様子にコナンは思わず失笑すると、

コーヒーを一口口に流して、喉を潤した。

「・・・そんなんじゃないよ。けど、これは俺の本心だ。もう二度と俺の目の前から消えないで欲しい・・・つつう心からのな」

「え？」

案の定博士は目を丸くしてこちらを見ている。信じられない、という表情だ。

「気づいちまったんだよ。あいつがいなきゃ、俺は『俺』じゃなくなるつつうことを。・・・俺は、あいつが好きだ。たぶん、ずっと前から」

そんなコナンの言葉に博士はしばらく呆けた顔で、まじまじと彼の顔を

見つめた。

「・・・本当か？本当に君は、哀くんを・・・」

「そんなの嘘言ったってしょうがねーだろ」

コナンはなぜかふてくされたように博士から背を向けた。

その言葉にコナンは、そうか、と低く唸るようにつぶやくと、その柔らかな表情をぴりりと強張らせた。

「なら早くその思いを彼女に伝えんな。さもないと哀くんは君を誤解したまま、ここを去ってしまうことにもなりかねん。

いまさらかつこつけは不要じゃよ、新一」

説教じみた博士のその口調に、コナンは明らかに不快そうな顔をして彼の方へ振り返った。

「バー口、そんなのわかってるよ。だからここに戻ってきたんじゃないか。

・・・もう、俺のせいであいつを苦しめたくねえんだ。何に縛られることも

なく、あいつの思うが儘に、自由に生きて欲しいんだよ」

「新一・・・」

「まあ、俺の気持ちを言ったところであいつが救われるとは到底思えねえけどな・・・」

彼はそう付け足すと、手で軽く自分の顎を2、3度しゃくった。

「どういうことじゃ？」

博士は訝しげに訊くが、コナンはただ、ふっと痛々しそうに笑い、
「・・・それだけ根が深いっつうことだよ」

とだけつぶやいた。

それからソファから立ち上がると、テレビ棚がある場所へゆっくりと歩き出し、棚の上に伏せて置いた写真立てを起こした。

写真の中の彼女は相変わらず笑っていた。

彼はその写真を手にしばらく見つめていたが、腹の底から大きくため息をつく、それをまた元の場所に戻したのである。

頬が痛い。

ぬめつとしたような、それでいてざらざらしている何かが自分の頬をしきりに撫でている。

胸が息苦しい。

何かが乗っているような重みを感じる……。

しなやかで、柔らかい何か……。

がぶっ。

突然自分の頬に鋭い痛みを感じ、灰原哀は思わず飛び起きた。

そこにいるのは黒い猫。大きな金色の瞳で彼女をじっと見つめている。

「……きゃっ！」

にゃああ、とその黒猫は一声上げると、ようやく彼女の体から退けた。

「猫……？」

哀はしばらく呆然とそれを見つめていたが、突然ふっと口元を緩め、黒猫を抱き上げようと手を伸ばした。一度ベッドの下へ逃げ込んだその猫は、彼女に手を差し伸べられると素直に顔だけ出して、ピンク色の鼻先を押し付け、ふんふんと匂いを嗅ぎ、彼女の指先をぺろぺろと舐めはじめた。

「おはよう、あなたは博士の家の子なの？」

哀の問いかけに答えるかのように、その猫は顔を上げ、にゃん、と短い鳴き声を上げる。

それから彼女の指元から離れると、尻尾をたおやかに揺らしながら少し開いてあったドアに顔を押し込ませ、ドアの向こうへ

あっという間に消えていってしまった。

哀はその後姿を見つめながら、思わずくすりと微笑んだ。

しかし再び静寂が戻ると、その笑顔が嘘だったかのように、ふっと彼女の美しい顔は儚くその華やいだ表情を消してしまった。哀は小さくため息をついて、辺りを見渡した。

自分以外いなくなってしまった部屋。

窓の向こうの東の空はうつすら白じんでいて、昨夜はあんなに綺麗に輝いていた星は既に霞んでいた。

新しい朝がきたのだ。

隣には博士はいない。

糊の効いた白いシート。

綺麗に畳まれた布団。

6年前までとは違い、体も大人に近づいた一人の女性の隣に寝ることに

躊躇があつたのか、ベッドは少しも使った形跡がなかった。

哀はほおっと小さくため息をつく、そのしなやかな5本の指で顔を覆う。

喉が渴いていた。

パジャマの上から黄色のカーディガンに袖を通し、スリッパを履くと、

ゆっくりと部屋の出口に向かって歩き出した。

それから何気なく部屋のドアノブを回した。

半分ほど開いたところで、彼女はあるものを目撃し、そこで制止したまま動かなくなっていた。

ドアを開けたすぐ横の壁、そこには座ったまま、体を壁面に寄りかからせて微かな寝息を立てている人物がいる。

コナンだ。

彼は両腕を組み、柳のように頭を垂れて眠っている。

もしかしたら自分が夜中のうちにどこかへ行かないようにここで

一晩中見張っていたのかもしれない。

それを裏付けるように、彼の手元には点けっぱなしのデスクライトと、

1冊の長編推理小説が置かれていた。

「・・・バカ・・・」

思わずそう呟くと、その言葉にコナンはそこでようやく目を開け、その顔をゆっくりと上げた。それから彼女の姿を認め、一瞬驚いた顔になる。

それから、全てを思い出したかのように苦笑いを浮かべ、

「・・・よお」

と言った。

かなり眠そうだ。

目をこすりつつ、彼はそれでも少し表情を綻ばせていた。

哀はその彼の表情に思わず顔を強張らせると、しばし目を逸らしたが、思い直したように再び彼の目を見つめ、何とか笑顔を作ると、

「・・・昨日は悪かったわね・・・。もう、大丈夫だから」

とだけ言い、逃げるように早足で階段へと続く回廊の方へと歩いていった。

「そうは見えねえんだけど・・・」

背中では聞こえる彼の声。

それでも聞こえないふりをして、哀はつかつかと歩きつづけた。

「・・・俺、あれからあの手紙、読んだんだ」

唐突に切り出されるその言葉に、ぎくりとして哀は足を止める。

「それで？」

精一杯の強がり。

彼女はあふれる動揺した気持ちを無理やり押さえ込みながら、口角の筋肉を必死に上げて何とかその言葉を言った。

「いまさらなこともしれねえけど、・・・あのときおまえが消えなきゃいけない理由なんて一つもなかったんだぜ？」

「・・・どうして？」

彼に背中を向けたまま、震える声で尋ねる。

「・・・だつて」

もう耐えられない。

彼が何か言い出す前に、哀は振り返り、彼の顔を見つめて語気を強めてこう言った。

「私は、あなたの人生をめちやくちやにしたのよ。蘭さんだつてあなたのものになるはずだった。誰かのものになるだなんてそんなの有り得なかつたんだから」

そのあとに短い沈黙が流れた。

不思議なことに、コナンはその言葉が来るのをあらかじめわかつていたのか、哀がなぜそれを知っているのか、誰から聞いたのか、そのようなことは一切訊かなかった。

ただ、コナンは落ち着いた表情でじつと哀を見つめていた。何もかも見透かしたような視線で。

あのころと少しも変わらない優しいまっすぐな瞳で。

「なあ、灰原。言つただろ、いつか。『俺はオメーに恨みなんて今はこれっぽっちもねーんだから』って」

哀は彼の言葉に思わず顔の筋肉をぴりりと強張らせた。

それは組織に乗り込む前日に彼が言つた科白。

組織に行くなら私を殺せ、と言つた自分を嗜めるために、今と同じ、少し困惑したようで、それでいて優しい表情を浮かべて彼が言つた科白。

しかし――

「・・・あのときと今とでは、明らかに状況が違うわ。

あの時は未来があつた。組織を倒すことができれば工藤新一に戻り、大好きな彼女と今までどおりの生活を送ることができるという未来があなたにはあつた。だけどそんな微かな希望さえ私は叶わなくしてしまつた。何もかも、この手で・・・あなたの進むべき道を

閉ざしてしまったのよ」

そこまで言って、哀は思わずその白い手を握り締め、天井をそっと仰いだ。涙がこぼれてきそうだった。

そんな彼女に、コナンはちよつと苦笑いを浮かべてこう呟いた。

「未来、ねえ……。確かにおまえの言う一つの道はなくなっちまったかもしれないけど」

ずきん、と左胸が痛んだ。

「けど他にも未来への道つつうやつはいろいろあるはずだぜ。俺らは死んだわけじゃねえんだし」

「死んだじゃない、あなたは……。『工藤新一』は」

哀は思わず声を上ずらせて彼の言葉を遮った

「そりゃそうだけど……。でも、『江戸川コナン』としての俺は……」

『そりゃそうだけど』

その言葉に哀は再び自分の胸がずきん、と痛むのを感じた。

どうして、

どうして、そんなことを言うの？

哀の心は今、ざわざわと騒いでいた。

それでも必死に平静を装おうとした。

これ以上彼に自分の弱いところを見せたくなかった。

だから――

哀は何とか蔑みにも似た表情を浮かべ、あら、と言って不器用に

口元を緩ませた。

「あん？」

コナンはその整った片眉を少し吊り上げ、訝しげに哀を見る。

「・・・時は人をここまでして変えるものなのね。昔のあなたならそんな科白死んでも吐かなかったのに」

違う。

そうじゃない。

こんなことを言いたかったのではない。

こんなことを言う権利は私にはない。

彼にその科白を吐かせたのは、自分自身ではないか。

彼を変えたのは私が――

「・・・昔の俺って何だよ」

案の定、不機嫌そうに彼は彼女を軽く睨んだ。

「・・・ごめんなさい、何でもないわ」

哀はあわてて口の中で呟くようにその言葉を言つと、くると向きを変え、再び歩き始めた。

「待てよ、灰原・・・っ」

背中では聞こえる、彼の声。そして近づく足音。

思わず早足になっていた。

つかまりたくない。・・・彼から逃げ切りたかった。

「待てって！」

彼の力強い手が、自分の手首を捕まえる。

顔が、見られない。

「・・・離して」

彼女は震える声で、それでも精一杯声を振り絞って小さく叫んだ。

「なあ、灰原。・・・俺は――」

「聞きたくないの。もう、あのころのことは忘れたいの」

忘れる？

そんなことできるはずない。

一生自分が背負わなくてはいけない罪。

そんなこと始めからわかってることではないか――。

みるみるうちに自分の手首を掴む彼の手は弱くなった。
彼の温もりを感じていた場所が次第に冷めていく。
外の空気が徐々に手首にぶつかっていく。
つめたい、空気。

哀は戸惑ったような顔をしてコナンを見上げた。

「……俺は忘れたかねえな、もう二度と」
ぼそり、と彼が呟いた。

その瞬間、涙がはらり、と一滴落ちる。

透明な、純粋な涙が一滴だけ。

それを彼に気づかれたことなく、彼女はじつと俯いたまま、
拳に力を入れ、床を睨んでいた。

「俺らが戦い続けたあの2週間、俺らが誓ったあの約束。
俺にとってはもう二度と忘れたくない記憶だよ。

例えばそれがおまえにとってはいくら2週間だとしてもな」

「……どうして？それはあなたにとっても辛い記憶だった
はずじゃない。2年間ずっと追ってた組織を倒したから？

あなたの探偵の血が忘れたくない、と言ってるの？それとも」

「違うよ、灰原。探偵とか、組織とか、そういうのは全然関係ない」
コナンが哀の言葉を遮るように強い口調で、しかし優しさを

含んだその声で言った。

「……ただ単純に忘れたくねえんだ、あのころのことを。おまえが
俺に見せてくれた全ての気持ちを」

「……え？」

哀は思わず彼の顔を凝視した。

再び自分の手首を掴む彼の手が強くなる。

「気づいちまったんだよ。俺はオメーが――」

彼の口はある5文字の言葉のために動いていく。

それは自分のために動くことはなかったはずの科白。

しかし、哀の耳には届かなかった。

まるで何か催眠術にでもかかっているように、その言葉だけは聞こえなかった。

「何を、言ってるの？」

震える声で彼女は聞き返す。

「だから、・・・俺はおまえが」

『すきなんだ』

彼の口は確かにそう動いていた。

「・・・取り消して」

その言葉を口にしながら、自分の唇が微かに震えているのを感じていた。

もう、怖くて彼の顔が見れなかった。その唇の震えを隠すように、ぎゅっと下唇を噛み、下を向く。

「今すぐその言葉、取り消しなさい。聞かなかったことにしてあげる」

「・・・何で？」

意外と落ち着いたような声で彼は訊いた。

こう答えるのがわかっていたのだろうか。

哀はその動揺をひた隠し、そこでようやく挑むような視線で彼をまっすぐ見上げた。

「思い出しなさい。あなたが好きなのは誰？あなたがこんな目に合わせたのは誰？私を恨むこそすれ、『好き』だなんて感情、履き違えてるわ」

その言葉に、彼は再び大きくため息をつく。

「・・・あのなあ。おまえさっきから勘違いしてるぜ？俺はもう蘭のことはただの幼馴染だと思ってるし」

哀はその言葉に反応し、ぴくりと眉尻を上げて冷ややかな視線を彼に向ける。

「それはあなただけじゃない。蘭さんにとっての『あなた』は弟みたいな存在。世話のかかる、それでいて憎めない・・・」

「違うんだよ、灰原」

コナンは強く遮った。

そうじゃねーんだ、口の中で再びつぶやくコナンの声が哀の耳に幽かに届き、彼女は上目遣いに彼を見た。

彼はその視線を感じたのか、哀から目をそらし、それから覚悟を決めたように、彼女をゆっくりと再び見つめ返した。

8 彼女への想い（後書き）

作者より…こつぶです。とうとう彼に告白させちゃいました。

もつと時間がかかるかと思いきや、自分の気持ちに
気が付いてからは、あつというまで・・・（笑）

しかしこの先どうなるのかは皆目見当がつきません。

哀ちゃんを早く幸せにしてあげないと・・・。

このままでは夢にまで出てきそうです（涙）

でも少しは進んでいますよねっ？ね、哀ちゃん？

それではここまでお読みいただき、ありがとう
ございました。

9 罪

茜色の夕日に照らされ、俺たちはあの日、そこにいた。

あのころよりほんの少し幼さが消え、背が高くなった俺と、髪型を少し変え、化粧も薄く塗り、また一段と綺麗になった蘭。

あの日、俺たちは同じ歩調で歩き、夕飯の買い物を済ませ、彼女の父親の待つ

家路へと向かっていた。

それはいつもと同じ光景。何も変わらない光景。

—— ねえ、コナンくん。夕日、綺麗だね……。ちょっと寄り道してかない？

ふと足を止め、その言葉を口にしたあいつの表情。

その時の表情は今では取り分けてはつきりと思い出すことはできない。

それだけいつもと同じようにみえたからだ。

そう、いつもと同じ。

ただ穏やかに笑っていた。

だから俺はその言葉の真意に何一つ疑うこともなかった。

俺たちがこれから行こうとする場所で、一体あいつが何を喋ろうとしているかだなんて少しも考えてもみなかった。

あいつが俺に向けたその『提案』を、ほんの些細な気紛れだと思っていた。

だけど、それは違ってた。

俺は――

俺はあいつを心のどこかで、軽視していたのかもしれない。

9 罪

阿笠邸。

高い天窓から薄白んだ陽光が部屋の中に刺していた。

少しずつ、少しずつ明るくなっていく光。

その光の下に二人は立っていた。

お互い、相手の目から一秒足りともその視線を逸らそうとはせず、ただ見つめあっていた。

2人の中で、長い時間が過ぎていたようにも思えた。

そんな静寂の中に、2人は、いた。

「どういうこと・・・？」

その長い沈黙を破ったのは意外にも哀の方だった。

「ねえ、答えて。・・・あなたと彼女との間に、一体何があったの？」

その言葉にコナンは小さくため息をついた。

今日になって、この短い時間の中で吐いた何度目かのため息。

哀が混乱しているように、コナンにとってもその心中は少しも穏やかではなかった。

今から話そうとしていることが哀にとって、そして自分にとって吉と出るか凶と出るか、それはわからない。

しかしそれでもこの話はしなければならぬということだけは彼には十分過ぎるほどわかっていた。ここで足踏みするわけにはいかないのだ。

少しでも彼女を楽しむには、ここに、自分のもとに彼女を留めておくにはこの方法しかなかったのだ。それが喻え何パーセント、というほんの小さな確率だとしても。

僅かな可能性がほんの少しでもあるのならば、その可能性に賭けたかった。

そんな自分の性分を彼女はわかっていて、だからこそ彼女を余計に苦しめさせていたのではあるが――。

「おまえが・・・」

ほんの少しの間の後、コナンはようやくこの話を口にしようとしていた。

緊張のせい、痰が喉に絡まりうまく言葉が出ない。コナンは軽く咳払いをすると、

覚悟を決めたように、目の前の彼女のその大きな瞳を、睨むような視線でじっと見つめた。

「・・・おまえがいない間に状況は大きく変わったんだ。

あいつは俺が工藤新一だったってことも知ってるし、俺が何故こんな姿に

なったかも知ってる。何もかもわかった上であいつは結婚したんだよ。自分が心から愛した男とな」

「・・・そう、それじゃあ」

「でも、それはおまえの所為じゃねえ」

彼女が何か言う前に、コナンは早口で遮った。

それに対して彼女の反応は、綺麗に整った眉根がぴくり、と動いた。ただ、それだけ。

それ以外は何も前と変わったところはなく、彼女は平常を保っていた。

しかしそれはつくられたことだと彼は確信していた。

彼女の言い出しそうな事は全て彼にはわかっていて。しかし、それ

をもう彼女の口から

言わせなくなかった。これ以上、自分を追いつめて欲しくなかった。
「・・・ばれてたんだよ、あいつにはとづくに。・・・おまえがまだここにいるときから。」

『江戸川コナン』 つつうガキの正体と、そいつ自身すら気づかねえ心の内もな」

コナンはそう言いながら、ちらり、と目の前の彼女の表情の変化を探っていた。

「・・・でも蘭はそれを口には出さずに、ずっと知らないふりをしてくてくれた。だから俺も

『コナン』のままでいられた。あいつの苦しみも哀しみも気づかねえで、のうのうと生きてることが

できたんだ。・・・あいつを氣遣うつもりで、逆に奥へ奥へと追い詰めていたことすら知らずにな」

・・・馬鹿だよな、と、コナンはその言葉だけは何かまずいものでも吐き出すかのような表情でつぶやいた。

脳裏にはつきりと映るのは、当時の記憶。

丹精して磨かれた窓ガラスのように、それは、彼の頭の中に明瞭に映し出される。

4年前。

西の空へ、少しずつ、少しずつ沈んでいく夕日を、公園のベンチに腰掛け、2人は眺めていた。

綺麗だね、と彼がいつものように無邪気な子供の表情を作ると、彼女は少し寂しそうに笑った。

どうしたの？、彼は思わず目の前の『幼馴染』に尋ねる。

小学4年生の『居候』としてではなく、一瞬だけ、隣の彼女と同じ20歳の青年に戻っていた。

――・・・あたしね、告白されちゃった。高校時代のクラスメイトで、

とっても優しい人よ？・・・ねえ、コナンくんはどう思う？

突然彼女はその言葉を口にした。赤い夕日が思いのほか眩しくて、それに背を向けた彼女の輪郭が赤くゆらゆらと浮き出て見える。

赤い光の羽衣を纏った天女。

しかしどこかその天女表情は美しく、儚げで。

（・・・“どう思う”、とは？）

彼は彼女が投げかけたその問いかけに答えることができなかった。

「告白された」という言葉自体にはそれほどショックを感じることはなかった。

その言葉のニュアンス的に、彼女は相手に気持ちが行っているようにも思える。

だったらこちらから背中を押すべきではないか、と彼は思っていた。自分が『工藤新一』に戻ることができない限り、そして彼女の傍にいつも

いない限り、それを止める権利はどこにもないし、逆に推奨しなければならぬこと。

ガキの姿の、ただの居候の身分である自分は、10も年が離れた彼女を、本当の意味で

幸せにはできないし、彼女の幼なじみである自分は、その彼女の想いに電話でしか

答えることができない。そんな細い絆で彼女を自分のもとに繋ぎ止めるのは

彼女にとって酷なことだから。

そしてその気持ちは、組織があり、消えた少女がまだ自分の傍にいたときから

思っていたことだし、また、そのことは今になっても、少しも変わることもなかった。

しかし、実際彼女にそんな話をされたら、快く彼女の科白を受け入れる、とは到底思えなかった。

少なからずのショックは覚えるだろう。たとえその相手が彼女の永遠の伴侶ではないとしても。

彼はそう思っていた。

しかし――。

・・・しかし、そのときの彼にはそんな感情よりも、蘭が最後に彼に言った科白、

「ねえ、コナン君はどう思う？」

という言葉の方に気が行っていた。

それだけ彼にとって重大で、衝撃的な科白に、その前の彼女の言葉が霞んでしまったからだ、と

彼は解釈した。

けれども、それは違っていた。それだけではなかった。

それがわかるのは4年も経った後になつてからのことなのだが。

(・・・“どう思う”、とは?)

目の前でじつと自分の見つめる彼女が今、何を言いたいのか、自分に今、

何を言つて欲しいのか、彼自身、その意図を汲み取ることができなかった。

いや、汲み取りたくなかったのかもしれない。

認めてしまえば、必然的に彼女が何を知っているのかが見えてくる。

・・・そのことを認めたくなかった。

彼自身が3年間彼女に隠し通していたことを、彼女がその生涯を終えるまで、知らないままできて欲しかった。

所詮そんなことは無理だとわかっていても――。

だから、こう答えた。

――好きなの？その人のこと。

え、と彼女は戸惑った表情で彼を見つめる。

彼は子どもを演じ続けていた。

――蘭姉ちゃんが好きだ、って思えるならいいんじゃないの？

・・・新一兄ちゃんをふっきるいいチャンスだと思うよ？

ダカラ 俺ノコトナンテ モウ 忘レロヨ・・・

彼は心の中で呟いた。

自分を見つめているであろう目の前の彼女の表情を見るのは辛かった。

彼の言葉に、蘭は一瞬視線を床に落とす。そして再びゆっくりと顔を上げた。

――あなたは、それでいいの？

今度は彼が驚く番だった。思わず蘭を凝視する。

が、すぐにいつもの無邪気な笑顔を作ると、あたりまえじゃない、と答えた。

僕はいつでも蘭姉ちゃんの味方だよ、と。

屈託のない笑顔。

表面は10歳の少年。

しかし、実際は20歳の青年。

彼女が今まで待ちわびていた相手。

・・・それが、自分。

彼女はそっか、と呟くと、しばらく考え込んだ様子で足元を見つめていたが、

突然表情を崩して、微笑んだ。

それからありがとう、と一言、震える声で言った。

・・・小刻みに震えた、薄紅色の唇。

ぽとり、ぽとり、と透明の液体が彼女のスカートの上に落ち、染みを作る。

それは嬉しくて泣いているのではないというのは彼にもわかっていった。

思わず、その小さな手を、彼女の手の上に重ねる。

が、蘭はその瞬間、そっと彼の手をもう片方の手でのけた。

彼は驚いて蘭を見上げる。

怒ってはいない、けれども決して笑ってなどいない。

ただ、哀しそうな顔で彼女は自分の顔を見ていた。

そして、さよなら、と呟くと、彼女は――。

彼女は、彼に口づけた。

柔らかい唇が彼の唇に触れる。

彼の唇に伝わっていくのは塩辛い水。

彼女の、涙。

別れの、涙。

それはほんの一瞬だったのかもしれない。
数秒のことだったのかもしれない。

しかし、彼女の哀しみは全身に彼の中に十分すぎるほど伝わっていた。

それが自分に対して、『工藤新一』に対しての別れの言葉だということも――。

そしてようやくそのことが自分の中で確実に理解していく。

否定できない事実。

蘭は、知っていた。

「・・・俺が『工藤新一』だってことも、これから先もあいつが求める『工藤新一』になれないってことも」

再び現在。

コナンは目の前の憔悴しきっている灰原哀の前で、彼はまるで自身自身に

言い聞かせるように、ゆっくりとしたテンポで言った。

「それに気づかされたのは、あいつに別れを告げられてからだなんて・・・」

ホント、探偵が聞いて呆れるよな」

コナンは思わず自虐的に笑った。

「・・・でも、・・・でも、どうして・・・。あなた、自分を『工藤新一』だなんて

認めなかったんじゃないの？だったら、ばれてるだなんてどうして言い切れるのよ！？」

哀は思わず声を荒げた。そんな彼女に、コナンは少し驚いたようにまじまじと

彼女の顔を見つめていたが、ふっと苦笑する。

「バーロ、俺はあいつの幼馴染だぜ？一体あいつと何年付き合ってると思ってるんだよ。」

いくらなんでもそれくらいはわかるさ。あのとき、全てを見透かした瞳をしていた。言葉も、表情も。

組織は壊滅したんだ。もうあいつに嘘をつく必要はない。けどあのとき、あの状況で、あいつに自分は

工藤新一だ、と言うのは俺にとっても辛かった。『工藤新一』として、あいつに別れを切り出すのは辛かった。

だから江戸川コナンを演じ続けたんだ。俺はあのとき、度胸がなかったんだよ……」

2日前、親友であり、ライバルである服部に、自分は確かにこう言った。

『4年前、蘭を止めなかったことは後悔していない』
それは嘘偽りないこと。

・・・しかし、その時、彼女を傷つけていたのは確かだった。ひよっとしたら別の言い方があったかもしれない。

それについてしばらく悩んだのも確かだ。

・・・元凶となった自分を彼女に見せたくなくて、またそんな彼女を見たくなくて、彼は逃げるように毛利邸を後にしたくらいなのだから。

彼女の実父である小五郎が止めるのも聞かず。

毛利邸から阿笠邸に向かう途中、彼は蘭の携帯電話の留守電に江戸川コナンの声のままで、

真実を全て打ち明けた。

自分が工藤新一であること、組織を倒したが元に戻る術をなくしてしまったことということを簡潔に告げた。

きつと返事は返ってこないだろうし、もうしばらくは逢うことはないだろう、と

彼は思っていた。どんな理由にしろ、『別れ』ということで彼女を傷つけたのは確かだったから。

「・・・今にして思えば、俺は灰原と同じようなことをしてたんだな」

コナンは思わずひとりごちた。哀はその言葉が聞こえなかったのか、小首を傾げる。

彼はただ笑って、何でもねえ、と呟いた。

「・・・それで？・・・蘭さんとは、そのままなの？」

哀は乾いた唇を唾液で潤しながら、掠れた声で訊ねた。

「いや。何もなかったころの幼馴染の関係に戻った・・・とは言えないかもしれないけど」

彼はそこで言葉を切り、手すりに全身を預け、それから大きく息を吐いた。

「・・・俺が今探偵に戻れているのは、あいつのおかげなんだ」

彼はふつと苦笑いすると、ぽりぽりと頭を掻く。

「・・・オメーが消えた後、しばらくして少年探偵団は活動停止したし毛利のおっちゃんも

ばちばち仕事ができるようになってきたから手を貸さねえようにしたんだ。

「・・・それに何より、俺が探偵の仕事をやりたくなくなった、っていうか・・・」

「・・・あなたが？」

哀の顔が驚きの表情に変わる。コナンは思わず苦笑して、頷いた。

「・・・それをあいつが救ってくれた。あいつがその男と付き合う、

と決めたとき、

俺に電話で報告してくれたんだ。そのときにあいつに叱られたんだよ。

「・・・あなたは日本の救世主、でしょ？つてな」

コナンは思わず表情をほころばせた。

「・・・まあ。その時はまだ小学生だったから単独行動は控えてたけど・・・」

おっちゃんの後、またついてくようにしたら、急にまた一段と仕事が増えた、って

喜ぶようになってよ・・・中学にあがって今みたいに動くことにしたんだよ。

「・・・少年探偵団はやっぱりまだ抵抗があったからしなかったけど」
「・・・抵抗、って・・・」

「・・・おまえがいないことへの抵抗、だったのかもな。あいつらと探偵を続けると、

自然におまえのことを思い出すから」

コナンはそこで小さく笑う。哀は黙って俯いた。そんな彼女の様子に、コナンは

視線を逸らすと、明らかに困惑したように深くため息をついた。

「一体オメーはこれ以上何を悩む必要があるつつつんだよ？何がそんなに自分を苦しめてる？」

俺が、俺がおまえを好きになっちゃいけないのかよ。一緒にいちゃいけないのかよ！」

「・・・いけない、わ」

哀が俯いたまま、震える声で呟いた。

「何でだよ！」

コナンは思わず声を荒げる。その言葉に、哀はゆっくりと顔を上げた。

コナンは自分が思いも掛けず出してしまったその声の大きさに驚き、そして

ごめん、と小さく言った。哀は力なくかぶりを振る。

「・・・私は、・・・あなたを好きよ。多分、あなたと同じくらい。ううん、それ以上かもしれない」

その言葉に、コナンは思わず彼女を見つめた。

「だけどあなたと一緒にいてはいけない。幸せになっではいけないの」

どうして、と彼が訊く。哀は答えた。

「・・・それでもやっぱり私はあなたに罪があるから」

「・・・だから、それはもう・・・」

違うの、哀は彼の言葉に小さく否定した。

「それだけじゃない。真実をあなたに伝えなくてはいけないあの手紙でさえ、私は嘘をついた」

彼女の言葉に、コナンは怪訝そうな顔をする。

「解毒剤は完成してなかったのよ」

彼女の言葉が震えていた。

「解毒剤は完成してなかったのよ」

哀は胸の中に詰まったものを吐き出すように、苦しそうに、その言葉をお口にしていた。

どういうことだ、何も言わないでいるが、彼の目がそう語っている。

先ほどは彼が自らの罪を語ってくれた。

今度は自分が今更ですつと彼に言えなかったことを言う番だ、彼女はそう覚悟を決めた。

そして、ここを去ろう、と。

一昨日、病院で彼と再会したあのおときとはずいぶん違う感情が彼女の中に芽生えていた。

それは彼のおかげだ、ということもわかっている。

彼は自分を助けてくれた。何時も、何度でも。

そして今回もそうだった。あのころと少しも変わらない。だけどそれに甘えてはいけないことぐらい彼女にはわかっていた。

彼に真実を話さなければならぬ。

それがどういふ結果になつたとしても、自分はそれを受け止めなければならぬ。

それがどういふ結果になつたとしても。

哀はゆるゆるとその薄い唇を再び動かし始めた。その真実を告白するために。

「・・・99、9パーセント、死ぬかもしれない解毒剤。それを私は手紙の中で完成品だと言いつたわ。だけど実際それで本当に完成できたものと言える？」

「・・・違ふのか？」

コナンの少し低いその声に、哀は目線だけで肯定すると、言葉を続けた。

「あなたが組織から持ってきたフロツピー、あれね、一つだけわからない部分があつたの。

いくら考えても解けない部分。もし、あのまま何年も研究を続けていれば、その部分も

いつかは解くことができたかもしれない。あの確率が半分くらい減つていたかもしれない。

副作用のないものができるかもしれない。・・・だけでもう、研究を続けたくなかつたの。

解毒剤を心待ちにしているあなたを想うのは辛かつた。もう、自由になりたい、

何度そう思つたか・・・あの解毒剤ができあがつたあの日、・・・私はね、工藤君。

研究を続けることを放棄したの。・・・あなたを捨てたの」

長いような、短いような、沈黙が二人の間に立ち込めていた。

コナンは困惑したような顔で自分を見つめている。怒る、というよりか、ただ、困ったような顔をして。

そんな思わぬ表情に、哀は思わず戸惑いの色を隠せなかった。

「・・・で？なぜそれを手紙に書かなかったんだよ。何ら変化はねえっていうのに」

「あるわ。・・・“できなかった”と、“できるかもしれないけどその可能性を探さないで逃げてしまった”

とはだいぶ違うわ」

哀は強くその言葉を言いきった。そして一呼吸置くと、それに、と言葉を続ける。

「・・・それに、書かなかったんじゃないで、書けなかったのよ。もうこれ以上あなたに嫌われたくなかったから

その言葉に、コナンはまじまじと哀の顔を見つめる。それから、ためいきをついて、

「わかつちゃねーのな。おまえは何にも」と呟いた。

「・・・それで俺がおまえを責めると思っただのか。なぜ諦めた、なぜもつと続けてくれなかった、

どうして研究をやめたんだ、と。それで俺が嫌いになるとでも思っただのか？」

哀は力なくかぶりを振る。そして、

「そうじゃないわ、でも・・・。」

と言葉を濁らす。・・・うまく言えない。言葉に表せない。

コナンはそんな彼女に大袈裟にため息を吐いて見せると、

「・・・ったく。どうしてオメーはそう、うだうだうだ考え込むんだよ」

と言って苦笑した。

「・・・俺がもしおまえを責めるとしたらただ一つ、・・・おまえが俺の前から

消えたこと、ただ、それだけだつつうのに」

優しい瞳が哀を包む。

哀は小さくごめんなさい、と思わずつぶやいた。

「・・・ごめんなさい、か・・・」

コナンはぼつりと呟いた。

「その言葉、結構トラウマになってるんだよな、俺」

え？と哀は思わず彼を見上げる。

「6年前にも何度も言われた挙げ句、次の日には消えられたし、この前はこの前で

おまえに拒否られて、顔もまともに見てくれなかったし・・・」

「・・・ごめんなさい」

「ほら、また」

ジト目でコナンは哀を睨んでから、冗談っぽく笑ってみせる。

それから、急に彼は彼女の方に手を伸ばした。

強い力で彼のその太い両腕に引き寄せられたかと思うと、一瞬視界が暗くなる。

そして次の瞬間、彼女は彼のその広い胸板に押し付けられていた。彼に抱きしめられたのだ。

聞こえるのは、彼の心臓の鼓動。

とくん、とくんと波打って。

感じるのは、彼の体温。

ほんのり、ほんのり温かい。

あの時とおんなじ。

でも、あのときとは少し違う。

少し大人になった彼、少し大人になった自分。

そして、何より自分自身の気持ちも明らかに違っていて。

穏やかな気持ち。

優しい気持ち。

柔らかい気持ち……。

全てが今の自分の中にあることを彼女は感じていた。

きつとそれは彼のおかげ。

そんな気持ちにさせてくれたのは、やっぱり彼のおかげであって……。

そんな彼を、彼女は――

「今回は暴れないのな」

コナンはちよつと拍子抜けしたように哀の顔を覗き込んだ。

哀は思わず彼から顔を隠す。が、彼は知っていた。

自分のパジャマシャツの胸の部分がだんだん湿ってきていたから。

彼女の小さい肩が小刻みに震えていたから。

そして、彼のシャツの袖を掴む手も。

そんな彼女が愛しくて、その抱きしめる手がさらに強くなる。

「……もう、どこにも行くなよ」

コナンはぼつりと呟いた。

哀は、小さくこくり、とうなずいた。

窓の外はもうすっかり明るい。小鳥の囀りも聞こえる。

東の陽光が二人の体を照らし続ける間、彼はずっと、彼女の体を離すことはしなかった。

もう、絶対離したくなかった。離れたくなかった。

9 罪（後書き）

作者より：お久しぶりです。ようやく蘭ちゃんとコナンさんの過去が書くことが

できました。こつぶ的にはかなり大満足なんですが・・・。

どうして最終回になるといつもこんなに苦しむんでしょう（涙）

でも、かなりの難産だったので、ちょこつとこの話には愛着があつて・・・（笑）

と、言うわけでここまでお読みいただいてありがとうございます。ごさいましたっ。

こつぶでしたゝゝゝゝ

10 彼女の門出

春陽の3月。

桜の蕾もゆっくりゆっくり膨らんで、花を咲かせる頃合いを今か今かと待ちわびていて。

温かい風に誘われて、花の香りもいっそう引き立つ季節。

小鳥の囀り、柔らかな陽光、うつすら黄緑色をした新緑。

何もかも春の訪れを祝福しているように思える。

しかし、それだけではない。

たとえばそれは一人の少女の新たな門出を祝福しているかのようで。

今宵は居待ち月。

少女は電気も点けずに、ただぼんやりと真ん丸より少し欠けたその白い月を眺めていた。

彼女の身長よりもはるかに高くて広い窓から、その紺色の空に浮かぶ白い月を。

「・・・何か飲むか？」

その声に振り返ると、案の定、彼女の思うめがねの少年が立っていた。

風呂上りだったのか、体から湯気がもくもくと湧き上がるのが見える。

彼は紺色のパジャマに真っ白なタオルを首にかけ、心配そうに自分を見つめていた。

そんな彼の様子に、少女は僅かに笑みを浮かべて、ただ黙ってゆっくりと首を振る。

そうか、と彼は口の中で呟くと小さく笑い、それからそっと彼女の横に立つと、

かみ締めるように、

「いよいよだな」

と言った。少女は彼の言葉にしばし間を空けてから、ええ、と小さく頷く。

そして、窓の外に再び視線を移した。

外は申し分ない快晴で。

窓を少し開けると、ふんわりと、花の香りが鼻腔をくすぐる。

少女はその空気を胸一杯吸い込んだ。

10 彼女の門出

帝丹中学 2年B組。

今日は修了式。明日から始まる少しの休暇を一体この時期の彼らはどう過ごすのだろうか。

来春の自分の進路が、希望で一杯になるために春季講習に通い出すもの、

部活動に明け暮れるもの、映画やデートに費やすもの、特に予定もないまま、

だらだら家で過ごすもの、それは様々だろう。

円谷光彦の場合は、やはり春季講習に望む勉強組であって・・・。

まず5月初旬にある実力テストのために、今から実力を高めなくてはならない、

彼はそう思っていた。

体育館で式が終わり、担任の短い話の後、配られるのが通知票。

勉強の成果だろうか、今回の成績はすこぶる良い。ほとんどが5だ。円谷光彦はそれを机の中に丁寧にしまいこむと、少し俯き、ほうつと深いため息を吐いた。

「・・・な」にそんな暗いため息なんて吐いてんのよ。ため息つき

たいのはこつちだつての」

不意に耳に飛び込んできたその声に思わず顔を上げると、隣の席の栗毛の少女が、頬をぷうつと

膨らませて彼を睨んでいた。

今日はその肩より短い髪を2つに分けて結わいている。いつもは髪を下ろしたままなのに。

それが新鮮で、それに加えて、その髪型がよく似合っていて、光彦は思わずどきりとその胸を高鳴らせた。

「きつとまた円谷くん、4と5ばかりなんでしょ？どーせあたしは1と2しかないですよ」だ」

いじけというか、八つ当たりというか、それともただのちょっかいというか……。

少女はぽこん、と通知票で彼の頭を軽く小突いた。

「佐塚にあたし個別に呼ばれてるんだよね。……数学特別悪かったからなあ。……

きつと春休みどっさりプリント出すつもりなんだよ、あいつ。この前の冬休みも半端ないほど

くれちゃってさ……遊びどころじゃなかったんだよね？」

「……君の点数がよくなるように、じゃあないんですか？ほら、テスト近いですし」

光彦はそう言つて苦笑する。

「そりゃそうだけど……」

栗毛の少女はそれでもまだ物を言いたげな表情をしていたが、後ろの席の少女に呼ばれ、振り返った。

どうやら近く武道館で行われる今人気沸騰中の若手ミュージシャンのライブの話のようで、

憂鬱だった彼女の表情はみるみるうちに明るくなっていく。

光彦はそんな彼女の表情の変化に苦笑しながら、視線を別に向けた。

廊下から1番目、後ろから2番目の席。

・・・江戸川コナン。

彼と最後に会ったのは3週間前、光彦が灰原哀の姿を6年ぶりに見た日以来のことです。

光彦が元太たちと見舞いに訪れた日の翌日に彼はまた一人阿笠邸を訪れた。

あ後のことが知りたかったからだ。

コナンは無事、哀の元にたどり着けたのだろうか。

彼女を、博士が言う『自責の念』というものから救うことができたのだろうか。

そして、彼自身も自分の気持ちに気づくことができたのだろうか。

あのころのように戻れたのだろうか。

聞きたいことが次から次へと、まるで谷底から湧き出る水のように、彼の頭から

次々と溢れていた。

なのに、そこには誰もいなかった。

灰原哀も、江戸川コナンも、・・・阿笠博士でさえも。

次の日も、また、その次の日もずっと・・・。

テストが始まったこともあり、それから光彦はしばらく阿笠邸に行くのをやめた。

しばらくして、歩美が陸上部の練習で遅くなったときに阿笠邸に灯りが点っていたというのを

耳にしたが、何となく足を運ぶことができなかった。

もし、訪れたときに灰原哀が再び姿を消した、という話を博士から聞かされたら、という

一種の不安に駆られていた。だから、訪れなかった。

光彦はちらちらと江戸川コナンの様子を眺めていた。

コナンはぼんやり通知票を眺め、薄笑いにも苦笑いにもつかない表

情を浮かべていた。

彼の何気ないその表情に、思わず光彦は彼を凝視する。

・・・表情が柔らかくなつた、と感じるのは気のせいだろうか。その視線を強く感じたのか、不意にこちらを見たコナンの視線。あわてて光彦は目を逸らそうとしたとき、彼はゆつくりと微笑み、よお、と言った。

その言葉に光彦は少し決まり悪そうにため息をつく、と、気だるさを感じながらゆつくり立ち上がり、

彼の席のもとへ歩み寄つたのだった。

「・・・成績、最悪だったんですか？」

「・・・いや、というより、何も書いてねえ。・・・ただ単位免除の判子がぼんつと

押されてるだけで。・・・考えてみりゃあ今学期はまともに授業受

けてなかったもんなあ・・・」

彼の反省を含んだその表情に、光彦はつられて笑みを浮かべた。

「・・・んで？光彦の方はどうだったんだ？」

「まあ、・・・いい方だとは思いますが」

「そうか、・・・よかったじゃねえか」

コナンはそう言つて笑つと、目線を落とし、手にしていた通知票をかばんの中に入れる。

光彦はその動きだけをじつと見ていた。ふと、彼が顔を上げて苦笑する。

「・・・何だよ」

「え、いや、・・・あの」

「・・・・・・灰原、だろ」

その言葉に、光彦は思わず、え、と呟き彼を見つめた。

彼は今までどおり、表情を崩すこともなく、ただ穏やかな表情で自分を見つめている。

そして光彦が否定も肯定もしないうちに、彼はぼつりと呟いた。

「オメーはちつとも変わらねえなあ。・・・あのころと」

それは彼が素直に漏らした言葉だ、と光彦は理解した。

嫌みでも卑屈から来た言葉でも何でもない、彼の素直な心。

彼の目線はいつのまにか窓際に向けられている。

窓際には、女友達と楽しそうに会話する歩美の姿。

「ガキのころからいつだって真っ直ぐで、一生懸命で。誰かの・・・とくにあいつらの

ことになる、こっちが冷や冷やするくらいの行動ばかりして・・・。

ガキのくせして、っていつも思っていたよ」

「コナンくんだってあのころは同じ『ガキ』だったじゃないですか」
照れ隠しに光彦が発したその言葉に、コナンはただ笑って視線をそらした。

思いもかけないその表情に、光彦は思わず訊ねる。

「・・・違うんですか？」

「違うよ」

・・・沈黙。

一瞬空気が全てこの世界から消え去ったような気がした。

光彦はただ言葉も見つからず、目の前のめがねの少年を見つめていることしかできなかった。

ただ、彼の顔を眺めているだけしか。

「俺は、『江戸川コナン』であって『江戸川コナン』じゃなかった」

「・・・どういう、ことですか？」

光彦は喉の奥がぶるぶると痙攣しているのを感じていた。

彼は真面目な顔をしてこう答える。

「・・・江戸川コナンは仮の姿で、実は正義を貫く戦士、仮面ヤイバーだったんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

思わず目が点になって、光彦はコナンを見つめる。
たっぷり時間を開けた後、彼は言った。

「・・・・・・・・・・なんてな」

無表情とも感じとれるほどの真面目な顔から、くしゃっと崩れるその表情。

懐かしいだろ、と、まるでいたずらっ子のように、柔らかに彼は笑う。

そのとたん、光彦の全身の力が全てぬけたような感覚に囚われた。

「こんなときに冗談なんて言わないでくださいよ」

思わずふくれつつらになってしまう。

気分が悪い。

いつもいつもこうやって話をはぐらかされるのだ。

自分は真剣に聞いているのに、いつも大切なところだけつままれる。
この前の博士のときも、自分たちが蚊帳の外だったことに改めて気づかされた。

・・・・悔しかった。

「・・・・・・・・悪い」

コナンはそう呻くように呟くと、ただ・・・・と、言葉が続けた。

「・・・・ただ、俺はある意味この6年、ガキにも大人にもなれない、
中途半端なやつ

だったのかもしれない」

「・・・・・・・・・・はあ？」

知らず知らずのうちにコナンを見るのを避けていた光彦だが、そこで思わず彼の表情を凝視する。

彼が今、一体何を言わんとしているのか、わからなかったのだ。

コナンの視線はいつのまにか窓際を見つめている。が、光彦が自分のことを見つめている

その視線に気づいたのか、ゆつくりと彼の方に視線を落とした。うつすら笑みを浮かべて。

「・・・情けねえけど、そのことをオメーのおかげでようやく気が付くことができたんだ」

サンキューな、と言って、彼がぼんつと光彦の頭を軽く叩くと、席を立って教室のドアの向こうに歩き出す。

「ど、どどど、どこ行くんですかっ!？」

思わず光彦は声を精一杯出して叫んでいた。

「・・・便所」

彼は一度踵を廻らせてそう言つと、茶目つ気たつぷりに笑った。

そんなコナンの様子に抵抗を感じ、光彦は一度目を逸らしたが、コナンが再び歩き出す足音が

聞こえると思わず顔を上げた。それからは、気が付けば彼の後ろ姿をまた目で追っていた。

ドア付近には他クラス、上級生、下級生問わず、多くの生徒がコナンを待ち受けていた。

彼がそれを当たり前のようにサインや写真撮影要求に応じている。

その姿を見ながら光彦はポツリと呟いた。

「・・・どういう、意味ですか？」

期待して、いいんですか、と。

その笑顔に、その言葉に。

光彦は深いため息と共に、コナンが今まで見つめていた窓際に視線を戻した。

そこには既に歩美の姿はない。

ただ、先ほどまで彼女と楽しそうに話していた女子数名が、面白そうな表情をしてきやあ

きやあ騒ぎながら窓の外を覗き込んでいる。

その光景に、ある種の予感を感じて、光彦は早足で窓際に駆け寄っ

た。

・・・まさか。

彼の脳裏に映るのはただ一人。

光彦は思わず女子生徒の横を陣取って、身を乗り出していた。そこで光彦は目撃する。

彼がクラスメートと、3週間前に目撃した同じ場所で、同じ人物を。ウェーブがかった緋色の髪の自分と同じ年代の少女を。

「・・・はい・・・ばらさん」

そこにいるのはまさしく、灰原哀、その人で。

あのときのように校門に背をもたげて、誰かを待っている様子。

あのとときと違うのは、彼女の身の纏うもの、・・・帝丹中学校の制服。紺のセーラー服。

スカートの裾はひらひらと柔らかな風にふかれて揺れている。

誰かを探しているのだろうか。

校舎を見上げたまま、彼女はその視線をその場所以外他に移すことはなく。

1階、2階、3階と視線をスライドさせていく。ただ、柔らかな表情で。

そしてその場所で光彦の姿を見つけると、安心したような表情で、にこり、と微笑んだ。

そのとたん、どきり、と左胸が高鳴る。

2週間前には見られなかった、6年前の、いや、それ以上に優しく綺麗な笑顔。

2週間前はあるに生気のない顔をしていたのに。

いったいこの2週間の間にどんな変化があったのだろうか。
何が彼女を変えたというのだろうか。

光彦ははっとしてドアの方へ振り返ると、案の定、そこには既にコナンの姿はなく。

「・・・コナンくん!？」

あわてて光彦は廊下を飛び出すと、きよろきよろと辺りを見渡した。

——見つけた。

男子トイレとは反対側の、階段に向けて踏みしめるように歩くコナンの後ろ姿。

その姿を見て、光彦は思わず安らかに微笑んだ。

彼はわかっていた。

彼女の待ち人は自分でも、歩美でもなく、江戸川コナン、ただ一人だということを。

二人はようやくお互いの気持ちを確かめ合えたのだ、ということを。彼女がこの町から去ることはないだろう、ということを。

そして、もう、誰も苦しむ必要はないのだ、ということを。

「・・・たく。消えたり現れたり・・・。幽霊かよ、オメーら。俺らは別に

幽霊研究会でもなんでもねーつつの」

帝丹中学、校舎の裏の小高い丘にある桜の樹の下で、コンビニから買ってきた

おでんのだいこんを口いっぱいにはお張りながら言った。そのつゆ

がこれ以上にないくらい

つまっただいこんから汁がぼたぼたと、彼の胡座の上に落ちていく。彼はあわててそれを手で無造作に拭いている。

「幽霊じゃありませんよ、僕らの前に2人は今こうしているんですから」

同じく、桜の樹にもたげ、彼の隣に座っているのは光彦。

光彦の隣には歩美、哀、コナンと続いている。

中学生の5人が囲んで間合いを開けて座っても、まだ全然余裕がある。

それほど大きい樹を、学校は、そして生徒は誇りとしていた。もちろん、光彦たちも。

小学校の時はよくここでいろんな話をしたものである。

「・・・また少し大きくなったわね」

哀がポツリ、と呟く。

「もうとづくに伐られてしまったのかと思ったわ。・・・よかった」
優しく木肌を撫でる哀。その表情に、光彦は、いや、誰もが見蕩れていたのかもしれない。

あるいは、久しぶりにこうして穏やかな表情の彼女を見ることができたという喜びを感じて

いたのかもしれない。しばし、誰もが黙って哀を、また桜の樹を見つめていた。

しかし、その穏やかな沈黙から、突如口火を切ったのは歩美だった。今までにないほどの真剣な顔をして。急に、歩美は哀の方に全身を向けてこう言った。

「・・・歩美ね、哀ちゃんに聞きたいことがたくさんあるの」

目の前の哀の、こくり、とつばを飲み込む音。光彦はそれをじっと聞いていた。

隣にいる歩美は、ただじつと、今まで見たことのない怖い瞳で哀を見据えている。

「一体哀ちゃんは今までどこへ行ってたの？この6年のことは聞か

ないわ。この2週間よ。

歩美たちが哀ちゃんちにお見舞いに行った次の日から姿を見せなかったじゃない」

真つ直ぐ哀を見つめる、彼女のその表情。責めるような表情。

光彦は何か言おうと思わず口を開きかけたが、ぎゅ、と誰かに腕を捕まれ、それを制止された。

驚いて振り返る。コナンだった。

彼は、いつのまにか目をつぶって下を向いている。

それは胡座をかいているせいもあるからか、瞑想しているようにも思えた。

しかし、自分の腕をつかんでいる手の力はとても強くて。

黙って聞いている、という合図なのだろうか。光彦は小さく頷くと、口を堅く結び、

彼女たちの状況を見守ることにした。

「・・・それは・・・。イギリスに」

「い、イギリスうつっ!？」

元太が思わず声を張り上げ、あわてて自分の口を押えた。

ずっと下を向いていた哀は、一瞬だけ元太の顔を見るが、小さくそう、と呟いた。

「・・・この6年間、母の知り合いを頼ってイギリスにいたの。イギリスの小学校、中学校に

何不自由なく、通わせてもらい、普通の生活をしていたわ。そう、日本にいたあなたたちと同じようにね。

・・・本当は早くに別の道に進めようと、その分野の人たちがことあるごとに訪ねてきた

ようだけど、知り合いは一切断っていた。そしてこの6年、彼女はそういう事実があったことに対して

一言も私に言ったことはなかったわ。気を使ってくれていたのかしらね・・・。」

ふ．．．と彼女が笑う。

「ちょ、ちよつと待ってください、．．．別の道？．．．それって．．．」

黙っていようと決めていた光彦だが思わずその言葉が口から先に零れるように出ていた。

「医学だよ．．．こいつが妙に化学式や薬に詳しかったことはオメーらだつて知ってるだろ。まあ、そのばあさ．．．わりい、その女性も、こいつがまだ子どもだから普通の経験をさせてやりてえって思っただろうけどな」

コナンが腕を組み、目をつぶったまま、いつもより数段低い声で言う。

「おばあさん、だっただんですか？」

光彦の言葉に、哀は小さく頷く。そして胸のポケットから取り出したのは定期入れ。

それを大切そうに開くと、一人の異国の老婦人が顔を出した。

上品な笑顔をたたえているその老婦人。そしてその隣にいるのは哀。幸せそうな笑顔をして、純粹な年相応の笑顔をして、哀は女性を見上げている。

女性は女性で、若いときはとても綺麗だったろう、銀髪を綺麗に一つに束ねて、安楽椅子に

ゆったりと腰掛け、緋色の少女の髪を撫でている。優しく微笑みながら。

どこことなく、どこなくだが、二人は似ていた。笑顔も、雰囲気も彼女に外国の血が、しかもイギリスの女性の血が入ってるからそんな気持ちになるのだろうか、それとも．．．。

光彦はしばし、その写真に見蕩れていた。

「ホントは、もうここには帰らないつもりでいた。だけど、この6年私を育ててくれたその人が、病気で死んでしまって・・・」

はっとして、光彦は哀を見つめた。俯いたままの彼女の肩が心なしか震えているのは気の所為だろうか。

光彦はあわててポケットからハンカチを取り出し、彼女に渡そうとしたとき、既にコナンから

彼女へそつとハンカチを渡されているのを見て、思わず苦笑した。

「・・・気が付けば、日本行きの飛行機に乗っていた。・・・あなたちの顔が見えた」

哀は、いつのまにか桜ではなくて自分を囲んでいた、目の前のすべての人物の顔を見渡した。

「この2週間、イギリスに戻ったのは、冷たいお墓の中に埋もれてしまったその人にさよならを言うため。・・・そして学校と

母の生まれたイギリスにさよならを言うため。・・・そして学校と手続きをとるため」

一瞬、光彦は食い入るように哀を見つめていた。

もちろん、歩美も、元太も。

ただ、コナンだけがじつと目をつぶったまま、腕を組んだまま、身じろぎさえせずにそこに座っていた。

「な、なあなあなあ、それって今度の始業式から、帝丹中学3年生として編入するってことか?!」

「じゃあ、哀ちゃん、もう、どこにも行かないんだよね!?!ずっと・・・ずーっと歩美たちの傍に

いてくれるんだよね!?!」

矢継ぎ早に飛び込む元太と歩美の質問に、哀は少し困ったように、はにかんだように笑うと、頷いた。

そのとたん、歩美は哀の体に、思いつきり抱き着いたのである。

学校の帰り道。

こうやって5人で帰るのは6年ぶりだ。

言葉にしたら6文字という、すぐに終わるものだけど、実際の値にしたらとても長い年月。

自分たちは小学校の課程を終了し、来春にくるそれぞれの進路のために動きはじめている。

いつかは別れがくるだろう。でも、この5人の友情は、いつまでも続くことを信じていた。

離れていても、きつとまた、今回の彼女みたいに戻ってきてくれることを信じていた。

「・・・僕らの友情は永久に不滅です」

「・・・はあ？」

コナンが怪訝そうに光彦を見つめる。

他の3人は彼らより10メートルほど離れた前を歩いていて、光彦の呟きに反応できるのは

必然的に彼しかいなかったのだ。何でもありませんよ、と光彦は小さく笑う。

彼は先ほど芽生えた微かな疑問を彼にぶつけてみる。

「・・・あの、コナンくん・・・あの写真のおばあさん、もしかして」

「・・・ああ。そうかもしれないな。それは当人同士の問題であって、俺たちにはどうすることもできねえけど」

でも、そうであってほしいよな、と彼が呟いた。

ええ、と光彦も答える。

イギリスの地でこの6年間、彼女を慈しみ育ててくれた老婦人は死んでしまったけれど、

何もない6年間ではなく、ただ一人残された身内に愛情を持って育

てられたということ。

カセットテープの声上でしか察することができないけど、心優しい自分の母親を産んでくれた

その女性の元で、穏やかに生活できたということ。

また、自分の母親が小さいころ過ごしていたと思われる場所で生活できたということ。

母親の匂いを感じることができたということ。

そういう事実が彼女のもとにあってほしかった。

少しでも幸せに、この6年間を精一杯生きていて欲しかった。

それを、彼らは願っていた――。

空はいつのまにか緋色に染まっていて。

いつか見たあの空のように……。

「コナンくん、光彦くんっ！！！」

二人はその声に思わず我に返る。

いつのまにか、歩美たちは随分先の方へ行っていて。歩美は彼らに向かつて大きく手を振っている。

「何やってるの?!置いてっちゃうよっ!」

近所迷惑ではないのだろうか、というほどのかなり大きい声に、コナンと光彦は思わず顔を見合わせて、

さも可笑しそうに笑った。

「・・・じゃ、行くか」

「はいっ」

2人は彼女たちのいるゴール地点に向かつて精いっぱい走り出した。この先に5人を待つ未来のように、輝く緋色の夕陽に向かつて。

10 彼女の門出（後書き）

作者より：こつぶです。ここまで読んでくださって、本当にありがとうございました。

とりあえず本題はこれでおしまいですvvv
あとはエピソード。

最後のしめくりはやっぱり……。くすくすっ（笑）。

中学生コ哀をテーマにして、……。やっぱり
難しかったなあ、こつぶは

しみじみ思いました。HANABIとどこが
違うんだろう、と思ったんですけど、

やっぱりノーマルとそうじゃないというもの
の違いですかね。

蘭ちゃんをどう扱おうかずっと迷って、結局
きちんと登場させたのは、

前回の9話だけ。……。うん（苦笑）。

あ、なんかこの話、エピソードで言えばよかったのかな
（笑）。

そうそう、とりあえず本題は光彦で始まり、
光彦で終わるっていう形を

とりたかったのでこうしました。今回光彦が
活躍できて、こつぶ的にはバンバンザイです。

では、次回もよろしくお願いします。こ
つぶこと、小粒納豆でした。

エピローグ 夕陽の中で思うこと

時刻は5時を回っていた。

空一面塗りつぶされたオレンジの色は既に濃い赤に変わっていて、
緋色の太陽は

もう地平線すれすれのところで何とか真ん丸の形を保っていた。
それをぼんやり見つめる5つの影。

光彦、元太、コナン、歩美、哀、の5人のものだ。

横に一直線になり、神社の境内に繋がる石段に腰を下ろし、ただ、静かに空を見上げていた。

「同じだね・・・」

ポツリ、と歩美は呟く。

目線はずっと空を見上げたまま。

隣に居た哀が怪訝な顔をして彼女を見つめると、そこで初めて歩美がこちらを

向き、静かに笑った。

「あの頃と同じ。・・・綺麗な色・・・」

「・・・あの頃？」

哀が眉間に皺を寄せて訊ねる。

「・・・そう。あ、もしかして忘れちゃった？時期はちょっともう遅くなっちゃった

かもしれないけど。・・・こんな色した夕陽に、そして紅く染まった階段。」

女の子の節句と言えば？」

歩美がいたずらっぽく笑う。

「・・・あ・・・」

7年前の記憶が甦っていく。

ちょうど夕陽に照らされ緋色に染まった階段に腰掛けて、クリーム色の

エレベーターの扉をバックに撮った記念写真。

雛壇を意識して撮った写真だったのに。

それは全部歩美が仕組んだこと。

1度目は失敗し、2度目は歩美が何処となく泣きそうな顔をして写っている。

どちらも5人1列に並んだ写真だ。

まるで5人囃子のように、愛らしく、朗らかで。

小学1年生らしい顔がそこにある。

それはそれでかわいらしかった。

しかし歩美が、自分の言うことを聞かなければ明日から絶交、と光彦と元太に

無理矢理約束させ、もう一度撮り直そうとしたときには既に夕陽の光は

階段の位置から微妙にずれていて・・・。

結局、その2枚とも消去されずに現像されてみんなの元に渡ってはいたけれど。

「あのとき、あなたホント、泣きそうな顔をしていたわね」

「・・・せつかく哀ちゃんが背中を押してくれたのにね」

くすり、と歩美は苦笑した。

「あん？何のことだよ」

コナンが怪訝な顔で2人を交互に見比べるから、

「何でもないわ、こっちのことよ」

哀はそう言ってみせると、座っていた境内の石段から立ち上がった。

夕陽がとても眩しい。

ちょうどあのころのように、西陽が石段を照らし、赤い毛氈のよう

に魅せていた。

気が付けばそれに見蕩れていた。

とても綺麗だったから。

純粹にそれに見蕩れていた。

あのころから何度自分はこの夕陽に出会っただろう。

少なくともあのころ思っていた数よりは多く見ているような気がした。

こんなにも生きてられるとは思っても見なかった。

そしてこんなにも心から幸せな日が来るとは思ってもみなかった。

妙なもののね、と哀は呟く。

あのころは空一面真っ赤に染める夕陽を見て、あんなにも哀しい色だと思っていたのに。

あのころ自分は、この時期の夕暮れを、世界を血に染める太陽の断末魔、と比喻していた。

たくさんさんの返り血を浴びているようで。

空から、誰かの叫びが聞こえてきそう。

救いを求める手がにゅるりとこちら側に伸びてきそう。

もしかしたら、組織が手を染めた多くの犠牲者と重ねて見ていたのかもしれない。

あんなに綺麗なのに、それでもどこか穏やかな気持ちで見ることができなかった。

それなのに、今では夕陽を見て、こんなにも温かいと思える自分がいる。

「・・・ホントはね。歩美、ずっと記憶をなくしてたんだ。哀ちゃんのこと」

歩美の呟く声に哀は我に返ると、あたりを見回した。

彼女だけでなく、コナンも、光彦も元太も心配そうに彼女を見つめている。

そんな彼らにお構いも無しに、歩美は彼女の隣で、ただ、真っ直ぐ前を向いていた。

敢えて誰とも目線を合わせないようにでもしているかのように。

「哀ちゃんと暮らした日々、楽しかったことも、怖かったことも、優しかった哀ちゃんの笑顔も、この6年間、みんな忘れてたんだ・

・

「・・・そう」

「でもね、・・・思い出したの。・・・あのとき、ほんの少しだけ」

歩美はそこでようやく視線を哀に向けた。

彼女を見つめる凜としたその表情。

「・・・私がこの中学校に一度来たとき？」

哀が静かに訊ねると、ううん、と彼女は小さくかぶりを振った。

「その前日。・・・今みたいにこんな綺麗な夕陽の階段を学校で見たとき。」

哀ちゃんの言葉が聞こえたんだ。あのときの、哀ちゃんの言葉が。忘れちゃいけない言葉が、零れてきたんだよ？」

——あなたらしくていいんじゃない？わりと好きよ、こういうの・
・・。

歩美の脳裏に写るのは、7年前のあの日の記憶。

階段の端の壁に、そっと身を凭れ、うつすら笑みを浮かべて夕陽を見つめる哀の横顔——。

「嬉しかったんだ。・・・すっごく嬉しかったんだから。哀ちゃんが認めて

くれたこと。私がしようとしていることに、『子どもっぽい』って

笑われるかなって思ってた。・・・なのに・・・」

歩美はそこで言葉を切ると、そつと哀の両手に両手を重ねて、ありがとう、と言った。

あつたかい歩美の体温、歩美の微笑み。

「バカね・・・」

哀はふんわり微笑んだ。

感謝したいのはこつちだというのに。

彼だけでなく、彼女に、・・・子供たちに救われたことも数え切れないくらいある。

彼らの純粹で、直向きな言葉に、何度心を動かされただろう。それなのに・・・。

「そうだっ！」

何を閃いたのか、突然、歩美は彼女から手を離して立ち上がると、階段のある

部分を指差して、満面の笑みでこつちいった。

「ねえ、哀ちゃん。あのさ、こつちに座って？」

感謝の言葉も言えないうちに、あまりに彼女が輝くような笑顔で微笑むから、

哀はあわてて彼女の指示に従った。

「それから、コナンくんも」

「・・・へ？俺？」

突然話を振られて、コナンは思わず間の抜けた顔する。

「そう。コナンくんはこつち」

歩美は哀の右隣に座らせる。

「で、光彦ちゃんと元太くんはあたしと一緒に一段下ね」

「はいっゝわかりましたあつ」

妙に返事が良い光彦に、歩美の言っている意味が全然わかっていない、という顔の元太。

しかし光彦に半ば手を引つ張られるような感じで彼らの下の段にどつしりと座った。

おかしい。

何かが似ている。

この配置、この雰囲気。

「ちょ、ちよつと待って・・・まさかこれって・・・」

哀はあわてて早口になっていた。

「・・・だろうな」

ふ、とコナンは笑う。

「だろうな、じゃないわよつ。何呑気な顔して・・・ねえ、吉田さん、中学生にもなって・・・」

救いを求めるように勢いよく振り返る哀に、いたってクールに彼女は返した。

「今更何言ってるのよお。二人つきあってるんでしょ？」

その言葉に、コナンと哀は思わず顔を見合わせる。

それから顔一面真っ赤にして、哀はさつと俯いた。

「ええええええっ！？どういうことだよ、コナンっ！？」

何も知らない元太が思わず声を上げてコナンに詰め寄った。

「こういうことですよ、元太くん」

光彦はにつこり笑ってこう言った。

やられたな、とコナンが笑う。

それでも本当に嬉しそうで、穏やかで。

そんな彼の表情に、哀も思わず口元を綻ばせた。

「じゃあね、また明日！あ、コナンくん、明日博士の家に遊びに行くから、

それまで哀ちゃんに変なことしないでよ？歩美の大事な友達なんだからっ」

「うっせーな、わぁーってるよ！」

半分ほど身を隠した夕日を背に、いつもの帰り道で、元太と光彦と歩美にさよならをする。

歩美に向かって叫ぶ彼の横顔は、夕陽の所為だけでない、うつすら紅く染められている。

「・・・ったく・・・。マセガキが」

照れ隠しに言う彼のその言葉に、哀はふふっと笑った。

10年前にはその捨てぜりふも通ったけど、今はそれが通じるのかすらわからなかったから。

撮影は無事成功した。

少し緊張気味のお内裏様とお雛様。

犬の散歩中だった、通りすがりの人のよさそうな中年女性に、歩美偶然学校に

持ってきていた使い捨てカメラで写真を撮ってもらったのだ。

会心のできた、と歩美は喜んでいた。

きっと1週間以内にはみんなの手元に届くはずだ。

「また明日・・・か」

2人きりになった十字路の道端で、ポツリ、とコナンが呟いた。

「何？」

哀が訊ねると、彼は自分の独り言を聞かれたことに、決まり悪そうに苦笑した。

「・・・またこんな日が来られるとは思わなかったから、さ」

「・・・そうね」

哀は答える。

——じゃあ、また明日な。

彼がその言葉とともに残した笑顔。

あのときは彼の顔を見ていることが辛かったのに。

もう逢えないんだ、と思うと顔を見ることすらできなかったのに。もし逢えたとしても、そのときはきつと今のように笑ってくれることはないだろう、そう思っていたのに。

それなのに、現実はず違った。

彼は今、また、自分の目の前にいる。

手を伸ばせばすぐ触れることができる位置にいる。

彼はあのころと変わらない、むしろそれ以上の笑顔を自分に見せてくれる。

全ての苦しみを吐き出したというのに、その事実を全て受け入れてくれている。

包み込んでくれている。

「・・・ありがとう」

ぽつ、と彼女は呟いた。

ん、と彼は小さく頷きかけて、思い直したように顔を上げた。

「何が？」

きょんとした顔でコナンは彼女を見つめていた。

「何がって・・・」

うまく伝えることができないのがもどかしくて、哀は思わず下を向く。

「何でおまえが俺にその言葉を言うんだよ。逆に俺が感謝してえくれえなのに」

さもおかしそうに彼は笑った。彼女は驚いたように再び顔を上げる。

「・・・おまえが灰原哀として戻ってきてくれたから。今のおまえは俺の知らない宮野志保でもないし、組織の中のシェリーでもない。

14歳の灰原哀として、今、俺の前にいてくれるから。一人の『江戸川コナン』を

見ていてくれるから」

「え？」

「・・・おまえと俺を隔てる壁はもうなくなっただんだ」
「だろ？」と彼が言った。

「工藤くん・・・」

「・・・『灰原哀』に出会えてよかったよ。ありがとな」
穏やかに微笑む彼の口元。

哀はそんな彼に、突然表情をくしゃっと歪め、泣き笑いのような表情をすると、

ぼすつと、倒れ込むように彼の胸板に体を預けた。

微かに残る、制服の防虫剤の匂い。

そして、頬に感じる、彼の鼓動。

とく、とく、とく、と軽快に波打っている。

心地よい、鼓動。

「・・・いきなりびっくりさせんなよな」

少しの間とともに、彼の言葉がその胸板の振動を通して彼女の耳に伝わってきた。

心地よい、振動。

その声はとても甘くて、少し照れてるようだった。

そして彼女の体は彼の腕により、優しく離された。

「おめえがいきなり、そんなことすつから・・・」

そんな彼の様子に哀は何か言おうと口を開きかけたとき、それを言うことが

できなかった。

唇を塞がれていたのだ。

それは一瞬のこと。

本当に一瞬のことで。

でもそれを塞ぐのは、彼の唇。

それだけは間違いないようだった。

「っ……!？」

すぐに離されたその彼の唇だけを、彼女は信じられない、という表情で

見つめるしかなかった。そしてだんだんその視線を上になぞらしていき。

あの緋色の太陽よりも真っ赤になった彼の顔がすぐ近くにある。

「く、どうくん。あなた……」

「……へへっ、間抜けっつらしてやがる」

彼は顔を紅くしたまま思わずぶっと吹き出した。

「あた……あたりまえじゃない。だって今、あなた……わたしに……」

動揺が抑え切れない。

火照っていく顔。じつとりと汗ばんでいく体。そして、くらくらくていく頭。

感じるこのことできるのは今は唇の感触より、体の熱さぐらいで。どこに触れたかすら思い出せないのに。

なのに。

キスをした、という事実だけが彼女の中を支配していく。

「灰原……」

彼に名前を呼ばれて哀ははっと我に返って彼を見つめた。

ねっとりとした彼の視線。

その視線の魔術に操られるように、そっと彼女は目を閉じる。近づいてくる彼の微かな吐息。

そして、彼らは再び口付けをした。

吸い付くように重なり合う唇。

熱く、激しく。

こんなどうしようもないほどのお互いへの熱い感情を、慕情を、二人はずっと

心の奥底にしまいこんでいた。

知らないうちに、お互いを遮断し続けていた。

けれど、一度その箍が外れたら、愛しいと思う気持ちはとりとめもなく

溢れ出て、彼らの中を水浸しにする。

気が付けば涙が哀の頬を湿らせていた。

それに気づき、コナンはそこでようやく唇を離すと、そっと指先で涙を拭ってやった。

「ったく、いつからおめえはそんな涙もろくなったんだよ。そこまですぐで俺たちや

まだ、年食ってねえぞ」

からかうように彼は微笑む。

「・・・悪かったわね」

頬を赤らめたままでそれでも拗ねたように口を尖らせるから、コナンは思わず

ぷつと吹き出して、太陽と同じ色をした、彼女のふわふわとしたその髪を

くしゃつと撫で上げたのだった。

既に夕日は沈んでいて、あとは月の訪れを待つのみだった。

二人は既に薄暗くなった道を、阿笠邸に向かって歩いていく。3歩ほど前をコナンが歩き、その後を彼女が続くようにして。

あのころのように、雪は降ってはいないし、気温も少しは温かいように思える。

まだ、ぴゅうつと音を立てて、頬をかすめる風は冷たいけれど。

「・・・そうそう、俺、近いうちに隣に引っ越すらしいぜ」

思い出したように、コナンが突然彼女の方に振り返った。

「え？・・・何で？」

「・・・博士がおまえと俺をくつつけるのが嫌みたいなんだ。既に父さんたちの

許可もとってある」

きよとん、とする哀の表情。

そんな素振りには全然見られなかったが。

「『血が繋がっていない年頃の男女が一つ屋根の下でなんて、実に不埒なことじゃと

思わんか、新一』！」

博士の真似をしてみせてから、コナンはぷつと吹き出した。

「・・・おまえとのことについては、相当信用されてねえみたいだな、俺」

「・・・そうね」

哀は彼につられて、穏やかに笑った。

「あんだ俺に発破かけたくせしてよく言うよな・・・」

彼が思わず苦笑してから、ま、しかたねえか、と呟いた。

「え？」

「だってそうだろ？博士にとってはおまえは目の中に入れても痛くないほどの

一人娘みたいなもんで、俺はいつまで経っても、所詮友人の息子でしかありえねえんだろうから」

冗談っぽく、ちらりと彼女の顔を見てコナンが笑うから、哀はくすりと微笑んだ。

「あら、ひょっとして僻み？・・・天下の名探偵さんともあろうものが」

まさか、とコナンは澄ました顔をして見せてから、彼女と顔を見合

わせて

可笑しそうに笑った。

この角を曲がればもうすぐ彼らが帰るべき家がある。

「おかえり」とあのころと変わらない笑顔で、きつと二人を迎えてくれる彼がいる。

二人がこうして同じ家に帰ることはもう数える程しかないかもしれない。

「また明日」と彼と言い合う日々が近いうちに再び訪れるのだろう。けれど、もうあの頃のように明日を恐れることはない。

なぜなら、新しい朝をまた彼らと過ごすことができるのだから。

全てを吐き出して、全てを空にして、また新しい自分を入れることができたのだから。

もう、怖くない――。

ぶるるつと激しいバイブ音が何処かで聞こえた。

哀はそこではつとして我に返る。どうやら彼のケータイのようだ。

コナンは制服のズボンのポケットからケータイを取り出すと、相手先の名前を確認して、

またか、と半笑いの表情を浮かべた。どうやらまた山村刑事のようだ。

「はい、・・・そうです、江戸川です。・・・どうしましたか？・・・ちよつ、

落ち着いてください。一体何があつたんですか？」

最初は困惑していた彼の顔。

しかしだんだん真剣な顔になり、終いには表情がイキイキしていく。

哀は思わず苦笑した。どうやら彼の好きそうな事件のようだ。

その表情はあのころと少しも変わっていない。

「はい、じゃあ準備ができたらずう行きまう。．．．東京駅についたらずう連絡しまうので」

話がついたのか、ケータイをたたんでポケットの中にしまうと、コナンは哀に向かつて

申し分けなさそうに微笑んだ。

「悪い。．．．山村刑事、また何か大きな事件に関わうちまうらしい。泣きべそかいて

やがる。．．．予告状とかあつたみたいだし、．．．話を聞いてみたら、何か気になうて

しかたねーんだ。先帰うて支度してきていいか？」

「どうぞ、ご自由に」

哀はくすりと微笑んだ。

博士の待つ家は歩いて行うても5分ほどで着いてしまう距離だといふのに。

それほど早く現場にたどり着きたいのだろう。

「．．．すまねえな。．．．絶対明日になうたらまたおまえのところにずう飛んで帰うてくつから」

「別に飛んでこなくてもいいわよ。落ち着いて帰うてきてても私はちやんとここに

いるんだから」

彼女は思わず苦笑して、目の前の明らかにそわそわとしている彼を見上げた。

それにあなたが今急いで家に帰うて支度をしたとしても、私が寄り道しない限り、きつとまた逢えるでしょ。ふとそんなことを思ったが、

それを口に出すのはやめておいた。

これ以上彼をここに足止めさせているのもなんとなくかわいそうだ

から。

「じゃあ、また明日な！」

「そうね、明日……」

彼は右手を上げると、彼女の元を去り、阿笠邸に向かって走り出した。

その後ろ姿を見ながら、哀は思わず口元を綻ばせて、呟いた。

「こんなにも早くこの言葉を言うなんてね……」

小さくなっていく彼の後ろ姿。

哀はその姿を最後まで追っていたようにしたが、あっという間に彼は角を曲がり、姿を消してしまっていた。

薄暗い、細くて長い道路に一人、ぽつんと取り残される。

後になってなんだか妙に寂しくなってきた、なるほど、こういうことかと、と

彼女は苦笑した。

工藤くんは相変わらず、なんでもお見通しだわ、と。

彼女は家路に向かう足取りをさつきより早いペースで歩きはじめた。家々には灯かりが点り、飲食店のごみ捨て場のところでは、からすが生ごみの入った袋を漁っている。

既に見慣れた彼の家の黒猫が、彼女を見てにやああと一声鳴いた。

そんな町の風景を横目に、彼女は立ち止まることもせず、ひたすら早足で

歩いていた。

この角を曲がれば、風変わりな家が見えてくる。

きつと家に帰ればまだ彼がいて。

顔を合わせれば、決まり悪そうに笑うのだろう。

そんな彼の姿を想像して、彼女は思わずぶつと吹き出した。

たどり着いた家の前で立ち止まると、哀はポケットから合鍵を取りだし、

玄関のドアまでゆっくりと歩いていく。

鍵穴にキーを差し込もうとしたとき、かちゃっという鍵の音と共にドアノブが内側から回った。

そしてきいいと音をたててゆっくりと開く。

「おかえり、灰原」

ドアの向こうには思った通りに彼がいて、思った通りに笑うから、哀も思わず微笑んだ。

< 完 >

エピソード タ陽の中で思うこと（後書き）

作者より：こんにちは、小粒納豆ことつづです。エピソードです、最終回です。

ちゅーさせちゃいました、2回もですつ。

これは自己タイ記録ですつ。・・・だって蘭

ちゃんと新ちゃんて

一度やつちゃってるし・・・さ、3回しとけばよかったかな（ときどき）。

とにかくこれで「哀ちゃんをめちやくちゃ幸せにしよう計画」完結ですつーいえいつ！

実はね、とある哀ちゃんサイトさんの大好きなお姉様たちと3人で、

中学生コ哀をやってみようっていう話からこの物語は始まったのです。

まさかここまでかかってしまうとは思いませんでしたが、すつごく

楽しかった。本当に感謝しておりますvvv

ここまで読んでくださった皆様へ。最後まで書き終えることができたのは、

皆様のあったかいお言葉のおかげです、

本当にありがとうございました。そして、今後ともよろしく願います。

では、失礼いたします。皆様と次回もまたお会いできますように・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0059a/>

またあした・・・

2010年10月10日06時07分発行